

A99

Z

4



00806454



0010178000

0010178-000

A99-Z-4

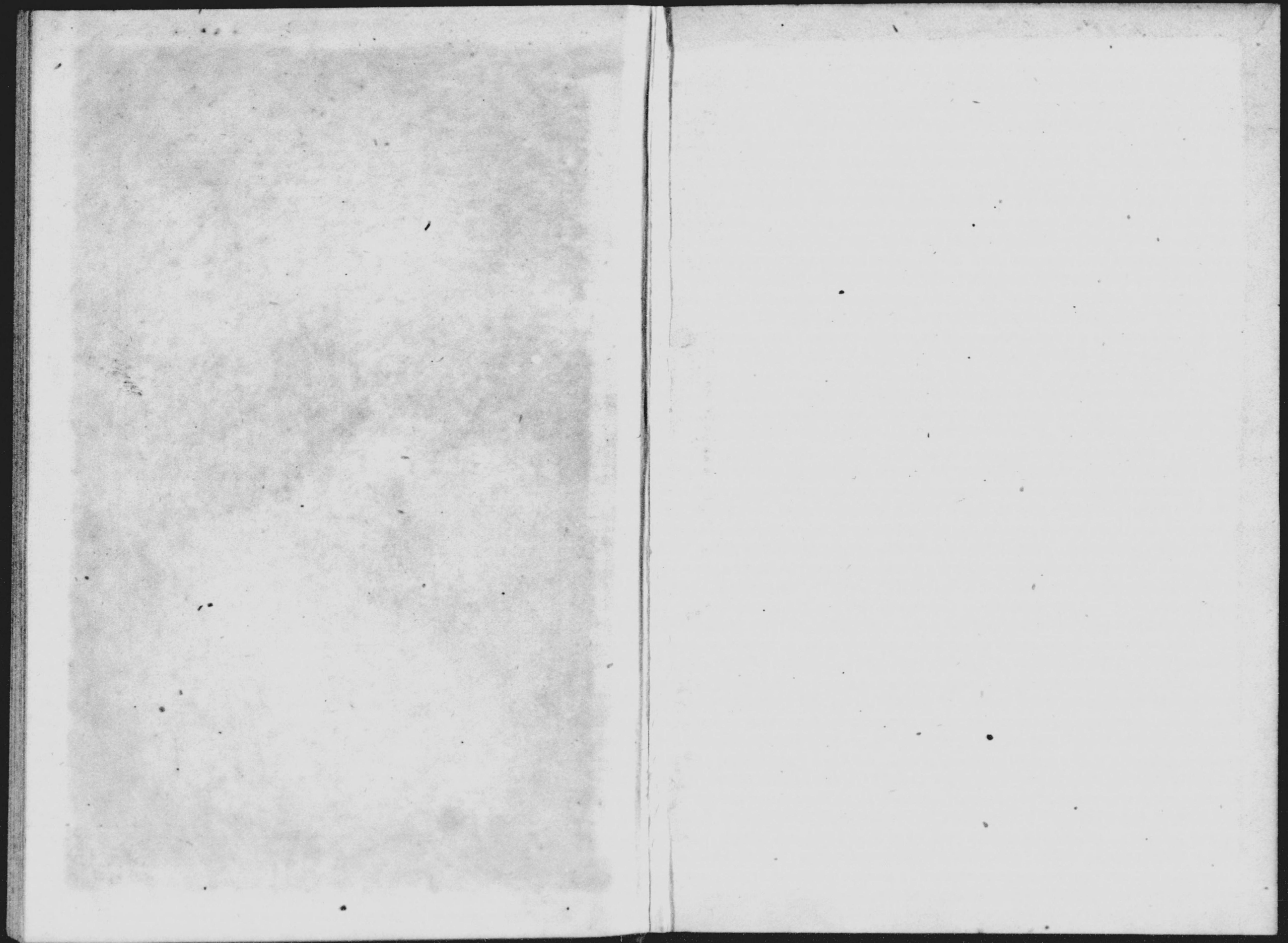
新東亜建設の綱領

三枝茂智・著

今日の問題社

1939

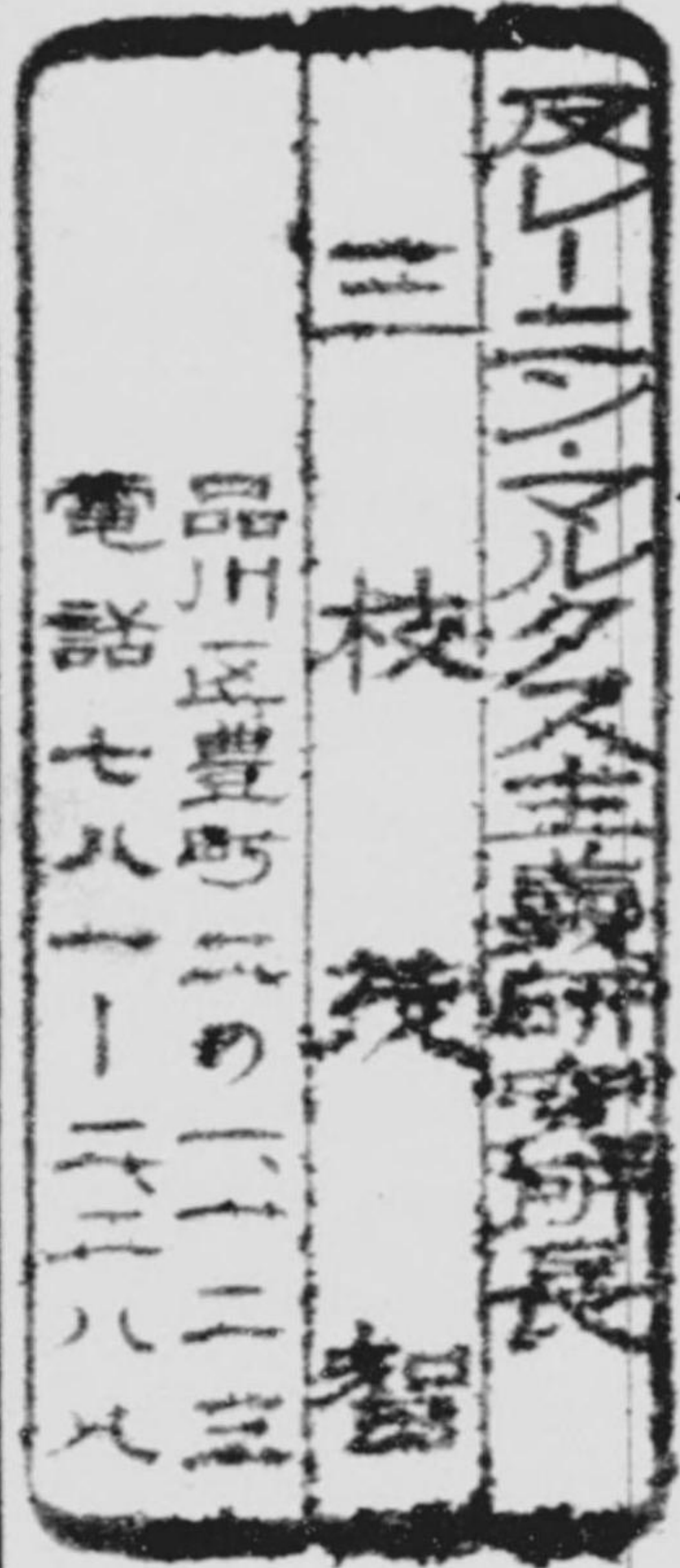
ABJ



法學博士 三枝茂智 著

新東亞建設の綱領

法學博士 三枝茂智



今日の問題社版

A99
乙
4



806454

自序

歐洲政治家が塙皇儲暗殺事件から發展して行つた大戦争の目的發見に苦しみ、白耳義、『アルサス・ローレーン』、『セルビア』の恢復、民主主義の擁護などと云ふたのは、二十五年前のことである。蘆溝橋事件後の不擴大主義から擴大して行つた日支大事變と云ふ追隨戦争に戦争目的が有る筈はない。併し國力を傾倒して莫須有の孤立下の長期戦を續ける爲めには、是非とも目標が立てられねばならぬ。交戦一年有半、漸くにして近衛内閣の東亞新秩序の聲明ありし所以である。此の漠然たるの故を以て、褒貶一つならざる東亞新秩序又は新體制、略して新東亞は決して拙い用語ではない。今次の日支大事變が人間の撰擇意思よりも、寧ろ宇宙法則の健全なる運営に淵源する所以を悟得するに於て特に然りとす。

1 序
（拙著『國際軍備縮小問題』八二三頁）こそより高次の原則たるべきを確言して置いた。人類は精

神的な不平等と物質的平等とを揚棄した大乘的平等に向つて進みたがる。過去數世紀間の歴史を民族主義、民主主義、社會主義が動かして來たのは茲に基因する。然るに右の三主義に依りては未だ一部だも是正されない最後の最大の不正が嚴存する。夫は歐洲化された世界に於て僅か四箇國が世界地表及人口の四分の三、富源の八割五分を壟斷し、阿弗利加、亞細亞の諸民族は其の固有の領土と共に物として扱はれ、天、地、人三才は生成化育の爲め調和的に合作することを阻止され、有色人百五十億を容れ得べき地球は英米人と其の支配下に立つ者と合せて二十億を容れ得るに過ぎなくなり、超大既成飽和帝國主義國の奢侈淫蕩と有色人種の飢饉との矛盾を露呈して居ることである。此の世界舊秩序其の延長たる東亞舊秩序の下敷となつて創造力溢るる若き全體主義國日獨伊等の民族生命は無駄に燃焼し盡さねばならないのか。之に對する返答は人類が増殖の法則に支配さるる限り滿洲、『エチオピア』、『チエツコ・スロヴァキア』の自主的解決將又過熟文明國の顛落たらざるを得ない。本質的の決闘は現状打破派と現状維持派との間に戦はれねばならぬ。又此の争闘に於て蘇聯が我が敵に廻つたのは『マルクス』主義以外に眞理があることを證明してゐる。支那が敵に廻つたのは米國の感情的理想主義、三民主義

に基く民族運動、革命外交、聯蘇容共、歐米依存、遠攻近交、抗日侮日、日本財政經濟力の過小評價ばかりでなく、其處にもつと深い理法の支配がある。

人類五萬年の歴史に唯一回の世界戦争と云ふ機會を毫も利用せなかつた日本人は宇宙理法の線に沿ふて國策を築くを忘れ、登音なしに進む歴史の歩武に促され、世界地表の二百分の一を占むる唯一真正獨立黄色人國家としての宿命に隨順して、無準備に此の孤立下の長期戦に臨んだ。政略、機略、外交の用ふべきもの尠き際、國家總力戦の貫徹に缺くべからざるは物心二方面の總動員である。小著は之に貢献せむことを期したもので次の内容を有する。

東亞舊秩序は世界舊秩序の延長としての存在である。東亞新秩序の誕生は東亞舊秩序の一掃を意味し、其の彼岸には直に世界新秩序が芽生へて居る。筆者は滿洲事變支那事變の最深の世界史的意義を闡明して、其の基礎の上に把握し難い東亞新秩序及世界新秩序の形式内容を想定して見た。

東亞新秩序内の日滿支協力體制は互助連環、ブロック、集團、聯盟、協同體等の言葉を以て表現されて來た。筆者は協同體説が過度に一體性を高調し、聯盟説が幻滅の名残であるに鑑み

4 緩きも内容ある東亞聯合なる文字を撰んだ。其の連鎖は王道や有機體論ではなくて科學的基礎の上に立つ大東亞主義である。新東亞は夫が有意義である爲には大東亞であらねばならぬ。

序 本主義は日本の具體的世界政策の最初の規定で、善隣友好、協同防共、經濟提携に生命を鼓舞するものである。此の主義の裡に汪兆銘氏の求むる共同目的、將又日支双方の恣意に對する東亞的限界、將又興邦興亞の併行性原理が盛られて居る。其の達成に乾坤第一邦に相應はしい大陸太平洋大空體制の布陣を必要とするは云ふ迄もない。

虚々實々の實行案に於ては目的と手段とは正反對になり、國民は時として政府に欺かるる義務を持つ。従つて神算鬼謀を著書に盛ることは徒事である。併し筆者は四面楚歌と經濟の海外依存律とに鑑み中庸の一途を指示し、東亞無政府狀態の遞増を豫告し、英米追隨に墮して伯林羅馬東京樞軸に龜裂を生ずるを戒め、西洋的、他律秩序に依存する國內舊秩序の革新を説き、小東亞僞似新秩序に對し大東亞新秩序即ち本來の新東亞を拮抗させ、夫が全貌を示すのは吾人の主觀觀念内のことで、長期建設こそ當面の口號たるべく、而も日本の終局的勝利は約束され、白人優越時代は送葬されむとすることを敢て豫斷した。舊著極東外交論策、雄邦日本の東亞

復興の姉妹篇たる本書が皇國創建以來最大の岐路に立てる同胞に多少の光明を頒ち得るならば望外の仕合である。

昭和十四年六月下旬

北京南長街東河沿第十三號春名醫院樓上にて

著者 三枝茂智識

目次

自序……………(一)

第一章 世界大維新の黎明……………(三)

第二章 羽搏く新乾坤……………(三)

一、文章報國の來し方……………(三)

二、遊獵から出來た世界……………(三)

三、停頓退嬰の世界……………(三)

四、萌え出づる力……………(四)

五、世界改造の曉鐘……………(六)

六、世界史よ、廻れ右……………(元)

七、跳梁する敗戦主義……………(四)

第三章 東亞新秩序

- 一、世界秩序、準世界秩序、大陸秩序……………(四)
- 二、東亞舊秩序否東亞無秩序……………(四)
- 三、東亞新秩序又は日滿支互助連環の關係……………(五)
- 四、東亞協同體說……………(五)
- 五、世界新秩序……………(六)

第四章 宿命の東亞聯合

- 一、序 說……………(六)
- 二、抗爭と協力……………(七)
- 三、國際聯盟の黄昏……………(七)
- 四、成年帝國主義の闊歩……………(七)

第五章 大東亞主義宣言

- 一、世界の歐洲化……………(一三)
- 二、無益なりし六億大衆……………(一四)
- 三、歐亞と東亞實は小東亞……………(一七)
- 四、大 東 亞……………(一〇)
- 五、大東亞主義……………(一五)
- 六、日本の東洋的世界的使命……………(一八)

七、大東亞的大陸大洋體制の布陣……………(一五三)

八、大東亞主義の擔任者としての東亞聯合組織要綱……………(一五五)

第六章 小東亞裡の相剋より大東亞裡の解脱へ……………(一五六)

第七章 新中國建設綱領……………(一五六)

一、昏迷状態の中國青年……………(一五六)

二、三民主義の素材……………(一五六)

三、民族主義……………(一七〇)

四、民主主義……………(一七一)

五、社會主義……………(一七三)

六、以上三主義の交渉、制約、救済……………(一七四)

七、三民主義寧ろ孫文主義と其の排撃……………(一七六)

八、新民主主義へ……………(一八五)

(イ) 東洋精神への復歸……………(一八六)

(ロ) 東洋中道全體國家主義の發揚……………(一八八)

(ハ) 東亞新秩序の創建……………(一九三)

九、東亞運命協同體に賦與すべき意味……………(一九六)

一〇、結 論……………(二〇〇)

第八章 東亞聯合の憲章……………(二〇三)

第九章 大陸大洋體制の布陣……………(二〇三)

一、雄邦日本と東亞復興……………(二〇三)

二、目的と方便……………(二二三)

三、勝利の降伏……………(二二六)

四、乾坤第一邦……………(二三一)

五、大陸大洋大空體制の確立……………(二三三)

六、賭戰地域と長期建設……………(二三九)

七、殻を脱げ……………(二四一)

第十章 我が世界政策と列強

一、序

二、蔣政

三、米

四、英

五、佛

六、蘇聯

七、包圍政策

第十一章 時局を見透す

第十二章 身命の國有化

第十三章 現地に視る

一、序

二、オーコン・ロイ

三、北京城と云ふ都市國家

四、居留民と民兵制度

五、大陸政策擔任機關の移駐

六、正氣時に光を放つ

七、國內思想戦を克服せよ

八、何ぞ鵬翼を扶搖に搏たざる

第十四章 結

新東亞建設の綱領

作用反作用の定則、因果律の鐵鎖の循環に依つて滿洲事變が勃發して以來最早七周年に垂んとして居る。當時近眼者流は之を半夜に突發したる作爲せられたる事件と見たこともあつた様であり、周章狼狽手の置き足の踏む所を知らない當局者もあつた様であるが、今や國民の健全な常識一般が個々の出來事を超越して右の定則右の因果律を等しく是認する様になつた事は慶賀に堪へない。加之斯様な深遠な認識は今や外國人間にも徹底せむとして居る。一例を擧ぐれば最近「ヤング」は「強大合衆國」^{ペリフルアメリカ}に於て世界大戰の反動として巴里平和會議以降一種の國際主義機構が採用さるるに至つたが、其の國際主義機構が一方に於ては飽和國戰勝國に不退轉の自己保存慾、現状化石の妄執を抱かしめ、英佛等の國家主義的帝國主義的高等政治機關となり終はり、戰敗國後進國から全然甦生の希望を奪つて之等をして白熱の民族主義的反撃に出でしめ、他方に於ては右國際主義的霧圍氣の下に枯木死灰に垂んとして居た老廢民族主義に鞭つて、支那、「エチオピア」等を盲動せしめたばかりでなく、之を「シヨウヴィニズム」「ジン

第一章 世界大維新の黎明

「ゴイズム」將又排外主義にまで増長せしめ、遂に滿洲事變を勃發せしむるに至つたのであるが、若し國際聯盟や九國條約や不戰條約の僞瞞的保障支援なかりせば支那は夙に日本に對し合理的協調政策に出で、滿洲國の獨立、日支大事變の勃發に導かなかつたであらうと云ふて居る。此の認識こそ筆者が舊著「國際軍備縮小問題」及「極東外交論策」に於て一切の平和機構軍縮秩序は國際主義的、民族主義の所産に過ぎずと主張し堅持し來つた認識であつて、唯異なる所は其の把握せらるるに十有餘年の先後があつた點だけである。

されば此の事變は決して孤立せる一突發事件ではなくして、二十世紀中葉に於ける世界大潮流の激成する所であつて、殆んど端倪すべからざる遠大の意義を有する。第一に國內的に見て本事變が五・一五事件、二・二六事件の如き國內革新運動の口惜しくも奔逸せる流の淵源と同時に勃發せることに着眼する必要がある。滿洲事變の勃發に依つて我國既定の外政方針は全部的に崩壊し、中央政府は國策の手綱を全く掌中より逸脱せしむるに至つた。此の缺陷が大部分矯正せらるゝ迄には二・二六事件の後を受けて、著明なる革新政策を標榜せる廣田内閣を経て、最近の近衛内閣、現時の平沼内閣の出現を必要としたのである。其の過程に於て所謂上層支配階級の一部に各種の有爲轉變のあつたことは人の知る所の如くである。之に伴ふて日本主義精神

の高調せられ、歐米依存、歐米崇拜の排撃せられ、一方自由主義他方社會主義共產主義に對する批判の尖鋭化され、伊太利の「ファシズム」獨逸の國家社會主義特に全體主義に倣ふて我が國體の本義に合する如く政治機構の改新が企圖せられ、今日漸く緒に着かむとして居るのは自然の傾向と云はねばならぬ。斯の如きは東亞を匡さむと欲して先ず自ら匡さむとするものと云ふべき日本の自己覺醒自己復活の過程であつた。之が實に滿洲事變の第一義たる國內的意義である。

×

×

×

×

滿洲事變は國民黨に歸依せる張學良の大膽なる排日蠢動に對する反撃であつたに相違ないが、夫にも拘はらず帝國陸軍は全滿洲の綏靖工作に積極的、指導的、計畫的に従事し、一夜にして全部の組織的抵抗力を一掃し、錦州熱河の占領、馬占山掃蕩行の如きは後日物語に過ぎなかつたのである。賞讃すべき皇軍の萬全の事前の備に依り滿洲國誕生てふ偉業の比較的少許の犠牲を以つて完成されたことは、皇天皇土の國運興隆を見そなはせ給ふ所以と思はれて感激に堪へない。

此の滿洲事變は巧妙に國際主義の假面を被つた既成老廢帝國主義國の多分に酸化鐵になり終

つてゐる一般及極東集團安全保障の鐵柵に對する萌出づる青年雄邦日本の反逆罪の外觀を呈するに至つたから滿洲事變を廻る外交戰は「リットン」報告の作成を中心として脅威的なる暗雲低迷を偲ばせ、一般知識人を畏縮せしむるに充分であつた。併し蒐積せる水蒸氣に過ぎない黒雲は間もなく晴れ、我が擁護國たる滿洲國は帝國と不可分關係に立ち、帝國を盟主とする東亞恒久平和聯盟の礎石として嚴然たる存在を示す様になつた。誠に百性昭明協和萬邦するてふ昭和聖代の盛事と云はなければならぬ。斯て帝國は英、米や聯盟から賦與された產着にも比すべき程過小となつた卑屈な安全の殻を破つた。萬邦無比の國體を有し、八紘一字の理想に燃え、到底世界に於て第二位に下ることを甘受し得ない日本帝國として、將又英、米等にも決して頭を屈し得ない雄邦日本として誕生するの肇國の約束は茲に果されたのである。帝國は日清日露日獨戰爭を通じて明に東洋的東亞保全に邁進して來たのであるが、此の使命の達成と雄邦日本の完成とは同時且併行の大和民族の一大課題であつて、吾人は此の課題から逃避することを許されない。想ふに吾人は此の課題から逃避する必要は毫頭ない、夫は達成せられむとする順路上を推進されて居るからである。筆者が時局記念號とも云ふべき拙著「雄邦日本の東亞復興」を上梓した所以は茲に在る。之が滿洲事變の第二義たる東亞的意義である。東亞と云ひ雄邦と

云ひ時節柄殆んど愛稱に近い柔弾な用語であるが之は理想、利益、目的の共通なる他國を發見せむが爲めの用意を藏する所から來てゐるのである。

×

×

×

×

偕て五族三千萬の民衆を抱容する滿洲國が「世界革命を東方に於て決せむ」とする蘇聯と聯露容共、歐米依存、歐米傀儡熱の惡鬼に取附かれ、抗日に邁進し來る國民黨政權との馬蹄形包圍陣に晒し置かれることは到底不可能である。從て冀東防共自治政府の外流産に終はれる北支政權獨立工作、北支緩衝地帯設置工作、大元帝國再興工作等の試みられたる後、日支全面的衝突の大活劇の幕は切つて落された。本來吾人の世界觀に立てば此の發展は拙著「雄邦日本の東亞復興」第二編各章の立證する通り事前から指點出來たことである。吾人の抱懷する一刀一心流國策より云へば、敵國を認定すると、刀が鞘を脱すると、敵を切つて棄てると、血を拭つて寶刀を鞘に納めると、扇子を開いて風を襟元に容れるとは全く一貫せる唯一個の所作でなければならぬ。然るに何事ぞ、職業意識を以て地方的部分的末梢的任務に服する役人の部分的認識と部分的判斷としか無く、其の上に大局を描摩して肯綮に當る天才政治家無かりしが故に惠

まれたる環境に在りながら最悪の事態に當面し、智略抜きを追隨戦争の爲に萬を超ゆるの貌を胡塵に失ふに至つた。日本の大陸に臨むや大英帝國建設の昔と異なり、概して最大の犠牲を以て最少の効果を收むるに終始して居る。或は聖戦と云ひ、或は仁義あるのみと云ふて、此の東洋倫理觀を以て經濟的敗戦主義を正當化し、時局を水に描きし文字に等しからしめむとするならば、夫は君人の決して與する能はざる所である。獨伊を指導者國家とせば日本は今迄は尠くも之を月給取り國家、部分ありて全部なき國家と命名し得る。支離滅裂幸に暗礁に乗上げないのは乗組員に拘はらず神風號が安全の航海を續けて居るからではあるまいか。

此の昏迷の裡に在りて吾人の眼に映するものは所謂 *iron ring* の包圍陣を突破して乾坤第一邦として其の眞姿を顯現せむとする日本の姿である。作用が強ければ反作用も強からざるを得ない。遠方に獨伊の友邦あるも「ヒマラヤ」山の東、印度洋の東に在りて我國は四面全く鐵柵の内に在る。蔣政權の粘着力ある抵抗に加ふるに北邊よりする蘇聯の脅威は尖鋭化して張鼓峰沙草峰の挑戦となり、南方よりする英佛の露骨なる妨害あり、米國が其の威信と權力とを何人に對して發揮せむとするかは、識者を待つて後知るべきではなく、外交上の星座は *le Japon contre le Monde* と云ふ書が示す如く既に全く定まつて居る。此の事態の下に於ては怯者が

何を云はうと日本は大陸封鎖と大洋封鎖とを併せ斷行せざるを得ない。前者は大「ナポレオン」も未だ全く完成するに至らなかつた。後者は一時英國が大西洋に於て實行し得た所である。雄渾なる島帝國日本は環境に對する反作用として否應なしに大陸大洋封鎖、大陸大洋體制、東亞總力戰體制に邁進せざるを得ない。之は世界歴史上の最大の創造である。茲に發展し來つた所に滿洲事變の第三義たる世界史的意義がある。

X X X X

人々は此の世界史的創造の大偉業の前に戰慄するかも知れぬ。併し之は嘗て一人の鬼才あらば鏗一文も餘分に使はず、一刀にも餘分に血ぬらずして完全に成就され得たことである。日本の東亞的使命から云ふて青島を一九一四年に攻略したのはよい。併し何故に俗吏の墮性生活より覺醒して、直に支那に大陸封鎖を布き、有害なる歐米の權益を蹂躪し、無人の西伯利亞出兵の儘臂をまくつて蟠居して、一舉に大陸大洋體制を最終的に斷行し去らなかつたのであるか。此の一舉手一投足の勞を斷行し得ない位であるから其の反對が實現された。夫は二十一ヶ條條約を始め繰返す不徹底大陸政策の土崩瓦解である。而て今度の事變すら追隨戦争、間歇的

曠日彌久戰、廣東海南島への進軍躊躇、勝利の降伏を意味する妥協工作、頻繁なる忍従叩頭に多分に右土崩瓦壊の痕跡を留めて居ることは吾人の牢記せねばならぬ點である。併し今や歴史の齒車は進むべき所まで進んだ。

乾坤第一邦たるべき帝國の大陸大洋封鎖の運動は他の世界大維新[○]てふ併行的運動を伴ふものである。瞬時の偶然の特恵の下に或は世界地表の大部分、或は世界人口の大部分、或は世界富源の大部分を僅少の犠牲を以て壟斷し得て之を封鎖領有せる既成老廢帝國主義は、よしや彼等が全部酸化鐵の鐵柵に爲り終つても、聯盟規約の如き集團保障に依り、其の存在を永遠に續けなければならぬのか、夫れとも新しい萌出づる力が新しき世界史の創造の爲に右の酸化鐵の鐵柵を打破し、青年雄邦をして脚光を浴びて坤輿上に登場し飛躍し得せしめねばならないかと云ふ世界最大の問題に答へむとする運動が夫である。世界は英米と云ふ資本的帝國主義、蘇聯と云ふ唯物的階級闘争主義の下に壓殺されようとしてゐる。二億足らずの人間が世界を全く我物顔に他の十八億の人間を支配してゐる。六十餘國の内四ヶ國が他を壓倒してゐる。天地は廣いけれど人間の創造力を働かせる餘地はない。世界の二、三の貴族國が遊獵して得た土地に繩張りして、狐や兎を養ふて居る。其處へは天地の化育を助け様と望む人も排入る事が出来な

い。此の繩張りは蹂躪せられねばならぬ。一九一四年の獨逸は武勇の缺乏よりも智力の缺乏の爲に右大維新の成就に失敗した。滿洲事變以前の二十世紀史は全然無意義である。蓋し酸化鐵が萌出づる力に辛くも打克つて創造なからしめたるが故である。一九一四年に一度挫折したる世界歴史上の大維新の最後の曉鐘は實に滿洲事變に依り響き渡つたのである。茲に滿洲事變の最後の世界史的意義がある。記せよ、獨伊を國際的に起たしめたものは實に此の日本の撞いた曉鐘であつたことを。

以上は決して議論ではなくして單に深く廣く遠く把握されたる有り難き客觀的事實に過ぎない。唯天の命として之に順行する外人間の行くべき道はない。吾人は滿洲事變七周年を過ぎて日支事變第二周年を近く迎ふるに當り、重ねて其の意義を闡明し、天命を抱いて晏如として「眞直に」天業恢宏翼賛のために前進せむことを誓ふものである。

第二章 羽搏く新乾坤

一、文章報國の來し方

昭和十一年の年頭に於て、筆者は『軍縮秩序の解消』を論じたる一節に於て、『非常時の全貌と歸趨』と題し、次の様に述べて置いた。(拙著、雄邦日本の東亞復興、第一七五乃至一七八頁參照)

倫敦會議には直接關係はないが、我國現下の情勢は露國との關係を特に重大視せなければならぬものゝ如くである。滿洲事變に次いで我國が聯盟を脱退した際、當時孤立状態にありし露國より、世界に反きての日露提携と、不侵略條約の提議ありしは怪むを須ひない。當時本邦朝野の論は分れたものゝ如くであるが、本邦の孤立の形勢に鑑みて、之に賛意を表する者も必ずしも尠くなかつた。而して余輩も舊著極東外交論策第二編第七章に於て、『日露支關係と不可侵條約』と題し、賛否の論點を検討して右提議は(純粹の謀略として)

之を受諾するを可とするとの説を立てたのであるが、事實上我が政府は北鐵問題、國境問題等の懸案解決を先決問題なりとなして荏苒今日に及んで居る。爾來我國の横議する處士等と露國責任政治家との間に強い言葉が交換せられ、其の後一寸の間に極東には三十萬と籌せらるゝ大軍が極めて多數の飛行機、「タンク」等の新式武器を携帯して集中せられ、滿洲國の東方に於て露兵自身、其の西方に於て十五萬と籌せらるゝ外蒙兵の一部の越境をさへ時としては見る様になつた。同時に露國は全然不可能事と信ぜられた百八十度の轉身を實行して、多くの西歐諸國と不侵略條約、次いで仲裁條約、侵略國定義條約を結び、聯盟に加入し、佛國致須國と同盟し、米國等と通商條約を復して頗る西方の孤立より脱却した。是を數年前の西伯利亞出兵當時や、赤露に對する統一戰線の話題に上つた當時に比すると實に隔世の感がある。恐らく斯様な蘇聯の軍擴は國內の敵に對する『スターリン』政權の強化にも役立つて居ることであらう。

支那紅軍が四川、甘肅より陝西、山西に擴がり、益々外蒙、新疆等に赤露の勢力が加はり、我國が北支よりは是を支へようとする際に、外蒙兵及び露兵の滿洲邊疆に於て活潑に行動する趣の報道は眞に憂ふべき何事かを暗示するものであるかも知れぬ。吾人は日露戰爭

の末期のこと等を考へ、若し方今露兵の挑發があつた際に輕々に應ずるなれば其の結果孤立下の持久戦となり、大關の四ツに取組んだ角力の如くならざるやを頗る慮れるものである。

勿論何れの國たるを問はず、先方が生命線を公然と攻撃し來る様な場合は自ら別問題である。大陸の嵐は大洋の津浪を伴ひ易く、東洋安定力としての日本の自己確立は多難にして遼遠である。

筆者の日露不可侵條約締結の主張は滿洲事變の翌日のことであり、右に引用の一節は約三年前のことである。今日露國の極東軍備は益々其の脅威の程度を加重し、近代裝備兵三十萬或は四十萬と籌せられ、莫須有の日支長期戦を前に控へ、戦局の前途は猶一段の擴大を豫想せられ、國民黨政府の組織的抵抗力の何時崩壊すべきやも豫見し得ざるに際し各個擊破が特に望まじきものとされ、さてこそ昨年七月十一日以降の張鼓峰、沙草峰事件に關し同八月七日の新聞は重光・リ外相折衝に於て我方が『現地の敵對行爲を直ちに中止し、事件解決を外交交渉に移

さむこと』を提議し、蘇聯外相に於て先決問題として日本側が蘇聯の所謂琿春界約並に附屬地圖に依り決定せられた國境の不可侵を確保されたいと述べたる旨公表せられ、一元的國策として尠くも日支長期戦を前にして露國空軍の或は二十機或は四十機の敵對行動に拘らず尙日蘇衝突を避くべしとの方針確立せられたることを明證してゐる。本事件は其の後我方に八百、敵に其の四倍の死傷者を出し、峰頭を奪還死守後の我方の最大限の陰忍自重により七月十一日以前の状態に復する事により結末を結んだ。今や舞臺は滿蒙國境の上空に移つた。

然らば吾人の八年來の主張は全く肯綮に當つて居り、三年有半以前の主張は今日其の儘政府の訓令と同様に有効であり、吾人の提説が全く完璧の豫言であつたことを裏書して居るのである。筆者は尙前掲拙著に語を繼いで次の様に述べて置いた。

支那の對日外交が本質的に排日二重外交でなければ誠に幸である。露國の勢力が追々外蒙、新疆等に加はり來るに伴れ、支那の共産軍が奥地を迂回して四川、甘肅より陝西、山西等に展開して之と連絡を取る様になり、蔣介石の政權に對して最早共匪討伐の目標がなくなつて來たに際し、所謂北支工作に辛うじて一段落を附けた帝國が極東安定力の使命より北方に進出して赤化防止の第一線に立つとなれば、南京政權に何等かの計畫を抱かしめ

ないものでもあるまい。

日支の關係は日本對歐米關係で制約せらるゝことに昔からなつて居るから、吾人は問題の中心を取違へない様にして焦躁に陥ることを避くべきであらう。而して當局は勿論萬全の用意を藏するものと了解せられる。

最後に聯盟國と云ふが如き交際や、不戰條約、四國協約の締結國と云ふが如き交際は、結局多くの意味を持つものでなく、今の様な非常時は歐洲大戰前にも似て『グレー』卿の例に倣ひ、同盟國、中立國、假想敵國の一覽表を作成すべき時期である。本邦に同盟國が一つもないことは何人も容認する所であらう。中立國は果して幾つあらうか。前二者にあらざるもの果して幾つあらうか。觀じ來れば余輩が壽府海軍會議以前舊著『國際軍備縮少問題』に於て憂へたるが如き、日本の國際的地位の獨逸化は幾分顯著となつて來たと認められる様である。外交時報の二月一日號中に於ても既に多くの論者は、日本對露、支、米の對立を憂ひ、加之此の後に英、和等の加擔する場合を虞れて居る始末である。斯くの如き日露戰役當時とは全く顛倒せるが如き外交關係の下に於て一強國と終期を計り得ざる孤立の持久戦に入ること、好んで死地に投ずるものであつて、大禁物であると申さねばならぬ。

我國の積極健全財政が許す範圍の國防力は、是非とも賢明なる假想敵國整調策と結合して考へられなければならない。海陸よりの包圍は獨逸の死地であつた、二國を敵として内戦作戰に出づることは既に軍略上不可である。

假想敵は若しあるとして一國に整理されることが有益であらねばならぬ。彼の北鐵讓渡の如き右整理の方策として最も有意義のものであつたが、不侵略條約の締結と結付かない爲に、全幅の效用を發揮し得ず、同時に國境劃定委員會設置問題も、中立地帶設定問題も裁兵問題も、漁業問題も停頓の有様となつて居るのは明朗を缺くものと云はねばならぬ。

吾人は憂ふる、今日の非常時ですら、永續せば健全財政を放れて赤字財政より豫め破産を考慮に入れた破産財政學に轉換するを餘儀なくせらるゝの虞なきやを。露國極東軍備強化の結果は極東に『平和を欲せば戦争に對して用意せよ』との格言を想起せしむる事態を誘致し、不侵略條約を結ばずして、之を結びたると略同一の結果に到達せしめた様でもある。何時でも焦躁は事を破るの起因である。

極東安定力政策の擔任者として夫れに相應しき様に自己を確立しなければならず、且又極

東安定力としての勢威を外蒙等より南下し来る赤露に對して示す必要に迫られてゐる我國は、長い呼吸を以て漸くにして成就すべき大任を負擔したものと云はねばならぬ。歐洲に於て其の内部的矛盾を植民地の授受に依つて緩和せむとし、其の重壓が阿弗利加や亞細亞に及び、赤露が逆に亞細亞人解放の十字軍を以て任じ、其の先頭に立つて進み來ることも可能である。

今の場合に於ては、吾人の行動は勿論一層慎重を要するが如くである。而して多分我國は禍を負へる虎の如く、其の地理的地位を利用して所謂未發之中の待機の姿勢で半永久的に世界の大勢が次第に流轉し、遂に一廻轉又は幾廻轉するのをちつと待たされるのではなからうか。損であるが由來我國は米國が西部六州を合せ、羅馬尼が「トブルヂヤ」を合せた如才なさと異つて、多くの場合一尺伸びるにも常に多大の犠牲を拂ふ傾向を有する。而して此の期間は、若し必要あれば我國に於て各種の内政改革を行ひ、國內を鞏固にし、所謂昭和維新を實現さすに貴重な時間を供するものであらう。日本發展の限界を示すことは何人にも出來ぬ。唯孤立下の持久戦を戒むのみ。

筆者の舊著國際軍備縮少問題は、滿洲問題の必至を示唆するものであつたから、其の場合に日本の困難なる國際的地位に置かるべきを信じた筆者は、普魯西軍閥が餘りに善く國家を愛したるも賢明に愛せなかつたことを指摘して前車の覆轍を以て後車の殷鑑となして置いた。

三民主義は暫く措き民族主義の國民動員力の恐るべきものあるを筆者は知るが故に支那の統一と排日教育の動向には最大の注意を拂ひ、龔德柏著征倭論等を眞先に朝野に紹介したこともあつた。當時の警世の文章は收めて舊著極東外交論策に在る。

前掲引用文の示す如く筆者は『南京政權に何等かの計畫を抱かしめないものでもあるまい』と云ひ、『當局は萬全の用意を藏するものと了解せられる』と述べて善く戦ふ者の勝つや、勝ちて而して後に戦を求むべき所以を示唆して置いたし、又『雄邦日本の東亞復興』第二編が示す如く『雄邦日本の苦業林』を説き、所謂對支新認識が『ベネローブ』の機に過ぎざる所以を説いて置いたのであるから筆者に取つて意外な出來事は一つもない。

唯豫見された如く南京政府が日本排撃に邁進し來るに際し、當局は百パーセント萬全の用意を藏せず、一部當局が或は鎧袖一觸と云ふが如き言葉を用ひ、或は蔣政權の須臾にして潰ゆべ

きを豫言したに拘らず、莫須有の此の世に又とあるまじき孤立下の長期戦を可能ならしめ、今日漢口廣東海南島が既に陥ちてゐるのに、支那側組織的抵抗力の崩壊の日の何れにあるかをさへ揣摩し得ないのは實に遺恨事であつて、聊か裏切られた感を抱かざるを得ない。

事の茲に至つたのは我が從來の爲政治家の餘りにもだらしなく、和平統一を云つて而も其の統一は英國の手に依りて成就せられ、分裂して支配せむと欲して反て統一を促進し、支那には歴史上先例なき民族戦争を可能ならしめたに起因する。

今日北京臨時政府は保安隊に銃器を携帯せしめ、某種の學校を開きて將兵を急造せむとしつゝあり、督軍の利用が如何に必要でありしかを立證して居る。而して爲政者は無爲でなければ逆効果を持つことばかりやつて來た。國民が助からぬのも無理はない。或る外國の外交官が日本國民は偉いが政府はひどいものだと言ふたさうであるが、此の過去の當局の一部に横はる何等かの疾患は實に長大息に値する。さてこそ筆者は前記引用文が示す如く實に孤立下の持久戦を戒むと云ふ言葉を三度繰返して置いたのである。

筆者は大乗的對露防禦戦よりも大乗的對支防禦戦が先に來るべきを豫斷し、日露不可侵條約（露國の提案は五箇年の有効期間を有した）を採用せむことを提議して置いたのであるから、

時局の見透しに於ては、全く及第して居つたと自負せざるを得ない。以上が筆者の文章報國戦線の經過の一端である。

二、遊獵から出來た世界

今日の世界は何時形成されたものであるか。蒸汽機關の發明を切掛けにして、機械化文明を招來し、産業革命を成就した英國が其の文明の利器を利用して、先づ先進國西班牙、葡萄牙、和蘭を壓倒し、次いで短時間に波濤を越えて海外の未開の先住民族を嬰兒の腕をひねる様にならせ、世界の四分の一を領有し、日不没國を築き上げ、之と前後して佛、露、米等が夫々或は世界の七分の一、或は一大大陸を我ものとなして、獨占封鎖し去つた其の現状の惰性的繼續に過ぎない。國際法上の正義とは過去の不正を擁護する爲の盜賊共の世迷ひ言である。國際聯盟規約特に其の第十條とか集團保障とか云ふ平和機構は悉く此の盜賊の既成不正義防禦の手段に外ならぬ。

此の事實を指して余輩は國際平和機構や軍縮秩序は一切既成帝國主義國の國際主義的民族主義の所産であると述べて置いたのである。一九一四年の獨逸が未成年帝國主義國として挑戦し

たのは實に此の錆び附きたる世界に對してであつた。

併し残念なことには此の獨逸の萌出づる力は叡智の缺乏、物資の缺乏の爲に中途にして挫折し、萌出づる力は錆びたる酸化鐵の力の爲に枯死させられたのである。我國が當時の獨逸から山東を奪回したことは東洋的東亞保全の使命將又日清、日露戦争、滿洲事變等の當然の歸結であつたが、山東攻略後の日本は全く世界の酸化鐵となり終れる老衰帝國主義、*Tottering de Democracy* に對して挑戦すべき立場に置かれたのである。

此の事實を認識出来ない昨日の大和民族に未だ大陸經營の氣魄が宿る筈はなく、二十一ヶ條條約の運命や西伯利亞出兵の運命は人々の知る所の如くである。斯て二十世紀の前三分の一は酸化鐵が萌出づる力を壓倒した何等の流轉創造なき無意義の歴史と爲り終つたのである。

三、停頓退嬰の世界

文明の進歩文化の向上と云ふ事は天地の間に人が適當に介在する事に依りて達成せらるるのである。天地人三者の和からこそ始めて神意に合する隆なる創造が出来るのである。今株屋成金が來て桑畑や青田の續く一村を買つて之を遊獵地にしたらどうなるか。此の成金は其の熟柿

の様な赭顔に資本主義への陶醉を滿喫するであらうが、貴重な一村は村人の從て一國の生活資料の淵源から失はれてしまふのである。此の意味に於て世界の分配は餘りにも不公平である。今人口一億に近く世界の人口の二十分の一を擁する日本は地表の二百分の一の内に壓縮されてゐる。獨逸も伊太利も之に近い。之では如何に人間が優秀で創造力に富んで居ても價値の生産は出來ぬ。之に反し英・米・佛・露は人口三億七千で地表の四分の三を占めてゐる。彼等は老衰し、女は子供を産む意なく人口は減少せむとしてゐる。併も彼等は國境を閉鎖して異民族を入れない。雜草は茂り、狐狸ははびこる一方である。斯る國がある爲に天地は用を成さず、人道は蹂躪されてゐる。「サンガー」夫人とやらが來て日本の液狀人間を溺死させむとしたのは其の結果である。見るべし超大既成帝國主義は天地の創造を妨げ、文化の向上を不可能ならしめることを。農業價値にも比して植民地産業價値の安いのは之が爲である。國內的に民權だ民生だと云ふた所で夫は民族全體主義へ持つて行かなければ解決出來ない。否此の問題は一國で解決出來る問題ではない。自由貿易なんか云ふて見ても貧亡國は救はれぬ。領土富源の餘りにも不平等なる分配の爲めに停頓退嬰の世界が現出してゐる。生きた國際政治經濟問題は唯一つある。夫は文明の進歩一般人類の向上の爲めに超大帝國主義は打倒されねばならぬと云ふ事

ある。

四、萌え出づる力

筆者は嘗て大阪に遊んで電氣科學館を參觀し、世界にも數少い天象館で星座の配置を見、且つ萌出づる力と云ふ獨逸植物學者の製作した映畫を見た。

此の映畫は自然の内に宿る生命力が如何に強いものであるかを證明する爲に植物纖維特に南瓜の莖等が針金に比しても驚くばかりの力を持つて居ること、萌出づる若草の双葉が掩ひ被さつてゐる土壤や玻璃の蓋を押し退けて葉を擴げること、豌豆を入れた瓶に水を注ぎて之を日光に曝し置けば追々發芽の氣運が動き、やがて『ガラス』瓶を破壊し去ること等を目撃した。筆者が國際軍備縮少問題に於て盛岡の石割櫻や、地下室から窓の外に枝を出した『ブラタナス』の力に特別の注意を拂ふた所以は實に茲にあるのであつて、大地の太陽熱に對する反動が即ち人類の創造的歴史であるのである。之が有意味將又有目的であるか否かを検討するは哲學者の閑事業であつて、經世家の立場に立つ吾人は唯此の事實を確認すればよいので、其の事實から意思力としての天業復興が生れて來るのである。

此の萌出づる生命の力に對して既存秩序と云ふ軌範がある。而して人類の歴史は常に此の軌範と新生命との葛藤老衰の正義と生れ出づる正義との衝突として顯現する。

此の葛藤に於て軌範が新生命を破壊し去る場合は保守的反動時代であつて、之に反する場合に新生命の創造時代である。此の葛藤を國際的に表現するものが現状維持派英・佛・露・米・和蘭等と現状打破派たる日・獨・伊・波蘭等との對立である。筆者が一九三〇年迄の第二十二世紀の歴史は無意義であると云ふのは、人類が情性の内に生きた保守反動時代であつたからである。右の反動時代を表徴するものに『ヴェルサイユ』條約其他の平和條約特に國際聯盟、九國條約、不戰條約、海軍諸條約等があつた。之等の條約は筆者の所謂國際主義的民族主義の所産であつて現状維持派の國策の具に外ならない。

中野正剛氏著『眞直に行け』に述べられた用語を用ふるならば、勃興し行く日本の全身に枠を入れて動けなくしたものは、巴里平和會議、國際聯盟諸會議、華府會議、倫敦會議に現れた既存秩序の支配力であつて、世界の對立は第一義に於て現状維持派と現状打破派との對立であり、人民戰線に對する防共聯盟は其の派生物たるに過ぎない。帝國が斷乎として支那を膺懲せざるを得ないのは彼が日本に枠を入れた支配力の傀儡となり終つて居るからである。

五、世界改造の曉鐘

停頓退嬰の世界、酸化鐵の世界に對する新生命の創造的革命的曉鐘を撞いたものは實に一九三一年の帝國の無意識の發作たる滿洲事變である。此の事變が組織されたる帝國の意思の意識的行動として始まつて居らない點に吾人は最大の興味を拂ふべきである。此の全世界を震撼した大事變が昭和六年以來の我國の内部的甦生又は若返りの運動と併行して居ることは兎に角注目すべきことであつて、此の事變の勃發に伴ひ日本主義精神が高揚され、自由主義共產主義等猶太主義的思想が排撃され、革新風潮の昂まると共に、形式的に丈け高い位置を保ち來つた人々に有爲轉變のあつたことは吾人の記憶に新なる所である。而も教外別傳不立文字の原則に反して假に吾人が命名した『日本中道全體國家主義』は堂々と進軍を續け、議會制度、教育制度、經濟機構等に劃期的の大轉換を招來せむとして居るのは慶賀すべきことである。世界何れの國に於ても新人が立上つて、其の創造力を働かして國運に貢獻せむとして居る時に、枯木死灰に等しい老人達が惰性的消極的官職保持者として無言に居眠つて居られたのでは國家は時世に取殘されざるを得ないのであつて、最早維新の時も熟してゐる日本は之等錆にも等しい要素

を一掃する必要がある。加之改革に徹せむと欲すれば、現在の上層役人を稍多數自己の創造力に依りてのみ衣食しつゝある分子と容れ換へて見るが面白い。萬一今日の大陸政策進展の程度に於て、大陸遷都論を云ふことが尙早なりとすれば、大陸政策に専ら關係ある機關を全部大陸に移し、以て最大の過誤たる大陸に於ける不在地主國家たるの謗を免かるべきである。最近陸相が師團を多く大陸に移駐し、國防工業をも多く大陸に移し、現地調辨主義を取る旨を聲明されたのは吾人の期待に反かない。朝鮮の鐵道は單線であるし、關釜連絡線一本に依つて居たらば將來の混亂が思ひやられる。何故に我が當局は日本海を日本海として大陸と日本とを大幅に太く繋がないのであるか、吾人の了解に苦しむ所である。吾人は斷言する、時局は之に引摺らるることに依りて決して解決はせない。

改革の火の手は、昨日まで主として荒木文相の大學自治に對する封印として揚げられて居たが、之は一層燎原の火の如き勢を以て沈滞久しき割據的の各部局を焼き盡さねばならぬ。其の結果今や東京帝大經濟學部の再建を見るに至つたのは方法の善惡は別として結構なことであつた。

帝國は蒙古來の當時より、日本の保全に従ひ、朝鮮支那保全の爲に日清戰爭、日露戰爭、日

獨戰爭を戦ふた。其の過程に於て歐米等の勢力に依存せむとする朝鮮人や支那人の事大主義が、右帝國の神聖なる使命を裏切るものがあるが故に、或は大陸の一部を我が羽翼下に收め、或は他の一部を我が擁護國と爲した。

之が爲に帝國の使命は東洋的東亞保全と云ふ、東亞に於て自他の區別を立てざる東亞復興運動に代つて行つた。此の帝國の抛棄せむとしても抛棄することの出来ない使命に倒行逆施し來つたものは實に蔣政權の排日抗日中國統一策で、夫は過たず巴里會議、聯盟諸會議、華府會議、倫敦會議に現れた現狀維持派の勢力の傀儡となり、赤露の勢力の傀儡となつた。蔣政權、聯盟、赤露の三者は一團の火の玉となつて我國を焼かむとした。其の反動が前掲の滿洲事變で、滿洲事變は實に東洋的東亞保全の貫徹、東洋に於ける聯盟的、赤露的勢力擊攘の烽火であつたのである。

此の聖業を達成せむが爲には我國は是非共『世界に於て第二位と下らざる雄邦』とは虚なる外交辭令で、實は『乾坤第一邦』とならねばならぬ。然らざれば如何にして我國は北より公然と挑發し來る露國を遠く歐露に驅逐し、南方より牽制する英佛を壓へ、東の方微笑せる中立國米國を御することが出來よう。

之は世界歴史上未曾有の巨人の仕事たる大陸大洋封鎖を極東に布かむとするものに外ならぬ。帝國の運命は此の仕事に成功して肇國以來の八紘一字の理想を完成するか、夫れとも徳川幕府時代の島國に顛落するか、全有か皆無か、吾人は決して其の中間の解決案は無いと信ずるものである。此の明日の乾坤第一邦の大陸大洋封鎖令發布が滿洲事變の東亞的意義、世界史的意義である。

六、世界史よ、廻れ右

併し滿洲事變は一層重要な世界史的意義を持つて居る。夫は酸化鐵の世界に對する若き創造的生命の挑戦である。老衰せる正義に對する青年の正義の挑戦の雄叫びである。既成秩序は各種の偽瞞的平和機構を彼等の道具に使ひ思想の奸計を看破する力のない無智者流を支配階級に持つ國々を欺き、獨逸、伊太利等には『ヴェルサイユ』平和條約と云ふ枠を嵌め、日本には聯盟規約、九國條約、不戰條約、軍縮條約と云ふ四重の枠を嵌め、身動きの出来ない塚にしたのである。我等の怯懦なる政府に未だ九國條約すらも之を形式上破棄し得ないのであるが、生きた歴史眼よりすれば、九國條約ばかりでなく、四重の枠は否一切の桎梏は柳條溝の一撃に遭

ひて一舉に悉く紛碎され終つたのである。夫はやがて現状維持派の支配する惰性の世界に向つて帝國が下したる廻れ右の號令であつたのである。

千古の英雄兒に導かれて『ルール』より徐々に『ラインランド』の撤兵に到達し、卑屈なる忍従よりも實力ある反抗こそ甦生の活路なりと看破して、徐々に新興の意氣に燃えて居つた『ヒットラー』の獨逸が、此の滿洲事變を契機として帝國に依り發せられたる世界史に對する廻れ右の號令を聞き洩らす筈はない。我國の死學問を擔ぐ學者達が條約の神聖論をやつて祖國を論難して居るときに、我が『ヒットラー』は一舉にして『ラインランド』に進軍し、獨逸の最終の桎梏たる軍備制限條約、『ロカルノ』條約等を蹂躪し去つた。『ヒットラー』は暫くにして聯盟規約や『サンゼルマン』條約の鐵鎖を破つて埃太利を併合し去り、『ビスマルク』すら善く實現せざりし大獨逸を實現して中歐に雄飛するに至つた。茲に於て捷克國を始め全歐は此の萌出づる力の前に震へて居たのであるが、右の力は宇宙法則に従つて青天白日の下に先づ「ズデーテン」地方を併せ、序で「カルバート・ウクライナ」を除ける「チェツコスロヴァキア」を其の保護下に置いた。獨逸の歐羅巴制覇は既成事實となり、洪牙利の擴大強化、「ルーマニア」の經濟的支配は云はずもがな、「メメル」「ダンチヒ」、獨逸系波蘭は獨逸に歸還すべ

く獨逸の東方策は最早之を遮る何物をも持たないのである。唯新世界史の完成に缺くものは露西亞の分割舊獨領植民地恢復等のみとなつた。吾人の豫言の完成は近く、世界は面白くなつて來た。此の獨逸は前章に述べたるが如く實に滿洲事變の曉鐘に依つて覺醒せしめられたのである。

伊太利も、英、佛特に後者の利己主義に制せられて巴里會議では乞食扱ひにされたが國內が自由主義、共產主義、『サンヂカリズム』の跋扈に苦んで、何等の反動を示し得なかつたが、『ムツソリニ』一度『ファシズム』の旗幟を翻して起つや、一舉にして大國並の發言權を得たのみならず、更に虎視耽々伊太利は膨脹せざらむか爆發あるのみと疾呼して居た。一度滿洲事變起りて聯盟機構の何物たるやが全世界に曝露せらるゝや、彼は叱咤して大軍を進め、劣勢艦隊と無敵決死空軍とを以て英國地中海艦隊を愕伏せしめ、『エチオピア』併合の大事業を世界の反對を前にして完成して仕舞つた。目下は回教徒の保護者を以て任じ、コルシカ、チュニス

を要求してゐる。此の現状打破陣の進軍「ラツパ」は悉く是れ滿洲事變が撞いた世界歴史轉換の曉鐘の響に應じて起つたに過ぎない。獨伊の素質は素よりであるが、實に之に活を入れ之を推進したものは

乾坤第一邦たるべき帝國夫れ自身であつたのである。

此の獨、伊兩國は自ら現状打破國として、伯林羅馬樞軸に依り繋がり互に其の大を爲すことに支障なく、世界史上の革命兒として提携し得る立場に在る。伊太利は、我國の俗論黨が「エチオピア」援助を策したに拘らず、過去を過去に葬り去り、大乘の見地から英國の地中海艦隊を壓へ、印度洋と大西洋との連絡を絶ち、遠く我國の印度洋に對する威壓に呼應して居るのである。獨逸も亦ソ聯を牽制し、其の分割「ウクライナ」の獨立を策するのみならず、日、滿、獨經濟提携を策し、支那に於ける經濟的利益を棄て、帝國に好意を示し、夙に軍事顧問すら引揚ぐるに至つた。日、獨、伊は將に世界大維新同盟を形成すべきであるが、目下は防共同盟に止まつて居る。併し其の應用は廣く、若し百尺竿頭一步を進めて獨、伊が歐露を分割し去らむとするに於ては帝國は飽迄も之に策應すべきである。現状では人間の爲し得る最善の偉業は露國を分解して其の一億七千萬の奴隸を解放してやることである。日本は此の點では孰れの國にも遅れを取つてはならない。ソ聯が漁業問題、樺太嶺山問題で横車を押すのは日本に右偉業を押し付けむとするものと解して間違ひない。次に唯一つの出來事で雑多な可能性を約束し、世界の文化を向上させるに最も役立つ事は英帝國の分解である。此の事は東亞以外の事であつて、

獨、伊其の他が之に當るべきである。併し英國が支那に於て吾人の進路を阻むならば勢の赴く所我等は右の分解に合作するを餘儀なくせらるるに至らむ事を虞るものである。

筆者が「雄邦日本の東亞復興」第三編第三章「領土再分割とや」に記述した如く、領土の分合が平和裡に解決さるゝことは、稀有の例外であるべきが故に、世界の維新は新生命の創造過程に於ける酸化鐵機構の破碎工作として顯現すべく、旁々吾人は頗る多く叡智を取合はせるにせよ鐵血の犠牲を辭すべきではあるまい。

前述の如く、大乘的に滿洲事變の意義を掴むことが出來たならば、筆者が「極東外交論策」に述べたるが如き、一貫して左右前後相救ふ國策將又機略は自ら把握され得たのであるが、斯様な深い認識がないから、往々支離滅裂、時には目的と倒行逆施する様なことをやつて、果ては吾人が二頁を書く間に三度戒めたる孤立下の長期戰に落ちて行つた。長大息せさらむとするも豈得んやである。

事の茲に至る迄に無限の方策を遊ばす餘地があり、吾人は及ばずながら系統ある全部の方策を提言して置いたのであるが、大聲は俚耳に入り難く、遺憾千萬にも現在あるが儘の停頓と云ふ事態に逢着した。吾人は最早撰擇の餘地を持たない。

目下の最悪の事態を孟子の所謂、天の我國に大任を下さむと欲して天の吾人の爲に用意したる大試練として、卒直に張膽明目之を受け容るゝ外はない。「雄邦日本の東亞復興」を世に贈りたる後の筆者の指導精神は大體斯の如きものであつて、吾人は勇往邁進斷々乎として強氣に徹せむとするものである。

七、跳梁する敗戦主義

此の見地に立つて前途を眺むる時、慨嘆すべきは各般の敗戦主義の跳梁である。由來社會主義や自由主義を抱く知識階級一般が敗戦主義者であることは論理の歸結である。斯の如き徒輩に對しては唯所謂戰時體制の強化特に其の思想的方面に於ける戒嚴を以て臨まねばならぬ。過去二十年間の思想的無政府状態は到處に帝國主義がどうの、軍國主義がどうのと云つた様な思想を普及せしめて居ることに深甚の注意が拂はねばならぬ。又今後防諜運動と同時に敗戦主義者の潜行運動に十全の注意が拂はねばならぬ。緊張は本質的に短期間である。此の事が即戦即決を必要とするのに莫須有の長期戦となつた今日は愈々以て敗戦主義者の蠢動に注意せなければならぬ。

次に慨嘆すべきは經濟的敗戦主義である。物事を無限の距離から見ず、始めより戦争は止むせざる出来事と斷じ、聖戦なりと稱し、仁義あるのみと稱し、今次の事變が始めより救ふべからざる浪費に終ることを國民をして承服せしめむとする運動である。之は經濟的敗戦主義と稱して筆者の斷然排撃せむとする所のものである。今次の事變が肇國の理想に基礎を置く皇道宣布の聖戦であるとしても決して夫は實利實益を排斥するものでなく、目下の如き長期戦に入るに於ては、古來殺戮、強姦、略奪、奴婢取得、滅敵併合が最高の國際法であつた事に鑑みても、糧を敵に取ることが聖戦に善處する最大の要件である。滿洲國でも、北支、中支新政權でも我が東亞綏靖の事業費を分擔し得るものには分擔せしめて決して差支ないのみならず、是非さうせねばならぬ。

筆者と雖も現下の莫大なる戦費が直に支那から賠償金なり、物資なりの形に於て回收されるとは夢にも思はない。併し準軍政下に於て糧を敵に取ることとは千古の戦争の鐵則であつて、島國から大陸に永久に輸血出来ぬ以上能ふ限り吾人は之に準據せなければならぬ。北支中支を壓へて其の富源を徐々に開發するならば、戦費の利子、秩録公債、恩給金の一部位は支拂はれないことはあるまい。夫すら出来ないといふ連中は出来る連中を求めて之に地位を譲つて見ては

どうか。一體日本の得べき賠償は永劫の間に東亞新秩序か世界新秩序に依りて支拂はるることとなるのだ。今度の仕事は夫程波及する處が遠大であるのである。吾等は領土慾なんかよりも、もつと大きな野心を持つてゐるのである。

尙蔣介石を敵手として支那國民を敵手と見ずと云ふ道理ある文句も、今日の民族戦争を否認する丈けならまだしも、經濟的敗戦主義を合理化せむとする口實なれば、吾人は之をも斷々乎として排撃するものである。北支の有識者にして東洋的東亞保全の共通目的を把握する者は、日本の駐屯軍の費用を支那が負擔するを當然と考へて居るのである。

最後に最も遺憾とすべきは改造近衛内閣、即ち第二次近衛内閣以前の政府當局の無意識の敗戦主義である。領土的野心もなく主權も犯さないと云ふ様な聲明は悪いことではないかも知れぬが、滿洲事變以來死文となれる九國條約に對し降参するものでないのか一考の餘地がある。

南京陥落の前後に於ける英國大使の負傷事件にしても、『パネー』號事件にしても、『レデーボード』號事件にしても、帝國は餘りにも鮮かに謝ることに過ぎて、我方の云ふべきことを尠しも云ふて居らない。彼等は何故に故意に交戦地域に立入るのであるか。若し滿洲事變より、今次の事變に至る極東禍亂の全幅の意味を把握するに於ては苟且にも斯様な恐英病患者、

恐米病患者等の爲す如き醜き態度は採れぬ筈である。

威嚇が效けば效く程先方は面白くなつて来る。海南島の占領は止めてくれと英佛から先手を打たれ、西沙島が佛國に依り占領せられたのは當然の成行である。斯様なことを續けるならば日清戦争の際にも上海に付て例があつた様に、廣東を中立地帯とせよと云ふが如き干渉に接しないものでもない。戦争の處理には唯戦争の原則を用ふべきである。

南方現状維持派の反日運動に呼應してか、ソ鮮國境に於てソ聯は攻勢的態度に出で、越境事件を起し、我が新中國綏靖を牽制せむとして居る。張鼓峰、沙草峰事件を外交交渉に譲り戦闘を中止せしむる我方の方針は吾人の七年前より抱きし國策に一致して居る。併し我方は露國空軍の編隊爆撃を袖手傍觀し、『リトヴィノフ』をして事態を二十九日以前の現狀に復し、日本軍が琿春界約の國境線以内に全部撤退するにあらざれば攻撃を中止する能はずと空嘯かしめて居たのは、先方に進撃日ソ全面衝突を賭する意なき丈けに實に我方の内情を見透かさるゝ様な氣がして遺憾であつた。

此の交渉に於て残念ながら其の強を敵に奪はれて居るのは帝國の大使命に背き、親日支那人等を失望させ、東亞及世界をして我方を輕視せしめ、惹いて帝國海軍の有せざる短所が何處か

に伏在するにあらざるやを聊か憂へしむるものあるを遺憾とする。

今日に至つては時局の多難なるに腰を抜かし、現在の危局が滿洲事變の延長に過ぎざるに鑑み、張學良の進攻に對して反撃を加へたことを以て違算なりとする論者をさへ目撃するに至つた。斯の如き説を爲す者は官僚の一部にさへ見受けられる。余輩は之を遡及的敗戦主義者と名付けむと欲する。此の論者の説に従ふも滿洲事變は必ず起り、其の結果は早くも長期戦に入つたと自分は推定する。兎に角早くも滿洲事變以前の沒我追隨外交がよかつたのだと告白する者あるに至つては、敗戦主義の跳梁實に茲に至るかと思嘆せざるを得ない。

『ムツソリニ』は國際聯盟との速度競争に克つて『エチオピア』を征服し、大伊太利の基礎を築いたが、我方の戦闘は既に餘りにも間歇的であつた。此の間歇的戦争を驅使して奏功して居る間に、又間歇的に妥協の申込を行ひ、勝利の降伏を實行して居たと傳へらるゝことの眞實ならむには、或は之を外交的敗戦主義と名付け得るであらう。妥協工作の最も公然にして勇壯なりしものは昨冬十二月二十二日發表せられた近衛首相談に頗る大乘的の見解を盛り、東亞新秩序、善隣防共、經濟提携、滿洲國への拘泥の放棄、防共駐屯、特殊防共地區、居住營業の自由、北支内蒙の資源利益、治外法權租界の撤廢を國交調整條件として提示したるに對し、汪精衛

氏が一部駐兵を認めて之に呼應した事件である。近視眼者流は之を以て成功の如く見たが歴史の方向と反して居るので依然物にならなかつた。帝國は國としては獨、伊を導きながら、政府としては今迄では兎に角其の存在することすら明確でなかつた。之は固有の『イデオロギ』、信念、熱情、術策に依つて國を率ゆる者ある政府と、至誠勤勉であるとは云へ、小乗的役人しかなき政府との差異である。

夫でも我國は急テンポに統制經濟に進み、遅蒔きに戦時體制を整へむとして居る。筆者は日本の全體國家主義が、否應なしに我國を彈丸國家の形式に改めて行く過程に於て、各般の敗戦主義が焼き盡されむことを希望して止まぬ。

八、結 言

怯懦なる人々が、正視することすら欲せない歴史の大齒車に乗つた我國の姿は、實に吾人が上述した通りである。日本の國內的現状維持派が如何に外國の現状維持派達の聯盟規約とか九國條約とか不戦條約とか、軍縮條約とか云ふ子守歌に陶醉して居た小日本の昔を戀しがらうとも、既に滿洲事變及び其の延長たる日支事變に依り、雄邦日本が世界歴史に向つて下した廻れ

右の號令に従つて世界歴史の大車輪は動き出して居る。

其の嚮ふ所は大陸大洋封鎖を敢行する乾坤第一邦たる日本の完成であり、之と併行して進む現状打破に依る世界大維新の創造である。唯由來我國は鬼才ある政治家を缺き、凡庸事を誤り、大陸に寸地を獲得するにも繰返し多大の犠牲を拂ふたのみならず、世界中の微笑せる中立國、現状維持的勢力、國際聯盟的勢力等に翻弄せられて、武威發揚の果實を失はしめられて居る。其の殷鑑は遠からず、三國干涉、華盛頓會議に在る。故に懦夫の戰慄する眼前の世界的大運動が蹉跎を齎すことなしと誰が敢て斷言し得よう。特に日本の識者が眞先に考へ、海外の友人達が等しく要望する様な『國力を消耗せずして時艱を克服して立ち揚る』ことが莫須有の長期戦の爲に著しく困難とされて居るに於てをやである。夫にも拘らず、失敗にあらず、卑屈なる志望こそ罪惡なれと信ずる吾人は、日本中道全體國家主義の大旆を翳して、歴史の齒車が前述の敗戦主義者を焼き盡すまで、乾坤第一邦の理想と、世界大維新の宿命とに向つて勇往邁進せむとするものである。

第三章 東亞新秩序

一、世界秩序、準世界秩序、大陸秩序

筆者は舊著に於て軍縮秩序等の文字を度々用ひて來たので、斯る場合に秩序オードラなる文字が大體何を意味するかを承知して居る。此の場合の秩序は唯に「公の秩序」と云ふ様な狭い限られた意味ではなく、寧ろ體制テイツと云ふ方が遙に適切かも知れない。最近帝國政府の聲明に於て「帝國の冀求する所は、東亞永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り」と述べられてから東亞新秩序を云はない者はなくなつた。其の内で平沼首相がある機會に東亞新秩序體制と云ふて居るのを見れば前述の言の誤りなきことが知れよう。

國際政治の見地から國際秩序を論ずる時に注意すべきは、或る秩序には其の秩序の擔當者又は宿主と云ふものがあることである。實は此の顯然又は陰然の宿主こそが本體であつて、其の描く生活軌道が即ち秩序なのである。杉原正己氏は「東亞協同體の原理」に於て（イ）資本主

義先進國に依る現状靜止的な非發展的な國際資本主義的な世界秩序、(ロ)國際共產主義秩序、(ハ)之に代はるべき第三秩序即ち東亞協同體説と云ふ様な三秩序を想定したが、此の分類は聊か不十分であるのみならず只今の宿主の問題を充分考慮に入れてないと云ふ缺點を持つてゐるやに思はれる。

筆者の見解に従へば世界秩序、準世界秩序、大陸秩序を區別し得る。而て眞に世界秩序と云ひ得るものは、先づ二つ位であらう。第一は現在の歐洲的世界秩序である。歐洲の大小諸民族が他の五大洲に汎濫して其の全部(唯一の列外は危かりし日本)を彼等の支配下に置いた状態である。此の状態は北米合衆國から「アルゼンチン」迄が獨立しても決して根本的に變改されて居らない。此の秩序の宿主は全體としての白人である。併し餘りにも無産國である獨、伊は現在此の體制に反旗を翻して居る。其の第二は顛落前の國際聯盟である。一時は六十餘ヶ國を抱擁して世界秩序の名に耻ぢないものであつた。併し其の宿主は一見六十餘ヶ國でありながら實は驚くなかれ世界大戦争に於ける同盟聯合側で、「ヴェルサイユ」條約體制を永續せしめむと欲した英佛等であつた。従て中心原理は時間、に於ける先順位、の神聖化、即ち聯盟規約第十條の現状維持であつたのである。之等の秩序に於ける伊太利の地位は乞食の如く、日本の夫は刑事

被告人の如く、獨逸の夫は終身懲役囚の如く、英、米、佛等の夫は以上と反對のものであつた。吾人は斯る世界舊秩序の中に生活するを耻辱とし、之を拒否せむとするものである。吼えろ「ムツソリニ」、嘯け「ヒットラー」、世界大維新を叫ぶ大東亞主義の行者達が茲に在る。

次に準世界秩序と呼び得るものがある。第一は聯盟規約にも織込まれた米國の「モンロー主義」である。米國人は言ふ、「自分達は唯世界の三分の一即ち兩米大陸で満足する、他の世界のことには係はらない。汝等も南北兩米大陸のことに係はることなかれ」と。其の顯現として汎米會議がある。此の行詰つた世界に於てよくもそんな寢言が云はれたものである。勿論南米にも氣魄ある國民が居つて之に反抗する。併し米國は其の財力と武力とに物を云はせて近來益々大軍擴をやり、兩米大陸に吾人が後章に述ぶる大陸大洋天空體制を布かむとして居る。吾人は今世界の二十分の一の人口を持つ一國が世界の三分の一を支配することを世界新秩序の名に於て不承認して置く。第二は阿弗利加、濠洲、印度、加奈陀に本國を結ぶ大英帝國である。之は早く産業革命をやり遂げた英國が西班牙、葡萄牙、和蘭、佛蘭西等の植民事業の全果實を海賊的に奪取した上之に多少の創造を加へた結果出來たものである。是も亦不完全で所謂脆弱性をもつものではあるが、大陸大洋體制を布いて居る。余輩は世界新秩序の名に於て唯の四千萬人が世

界地表及人口の約四分の一を兼併することを否認する。西班牙の無敵艦隊、和蘭の強力艦隊、大奈翁の大艦隊の爲めの復讐戦が戦はれ、英艦隊も一度位沈没するのでなければ世界歴史の勸善懲惡は完成されなむと思ふ。第三は英米佛を中心とし之に巢喰ふ猶太系財閥其の他群小の先進資本主義國を集めた國際産業金融資本主義である。之は歐洲的世界體制と或る程度表裏をなして居て、前者の政治的支配を打倒するにあらざれば、後者の經濟的支配を打倒することは出来ぬ。此の支配の網は支那にまはり、之を半植民地として膏血を搾つて居る。吾人は世界新秩序の名に於て此の資本主義が世界の後進民族から年數百億圓、支那から年十二億圓を奪つて行くのに對し抗議して置く。所謂民主主義戰線と云ふものが之に従屬する。第四は所謂太平洋關係である。前述の諸々の準世界秩序を背景として米國を中心として結成されたもので、明確な存在となつたのは華盛頓會議以降のことである。此の秩序は興邦興亞を志す日本に枠をはめ、完全に縛り付け、其の上で治外法權、租界、租借地の據點から買辦資本の手を出して半植民地支那の搾取を続け様と云ふのである。海軍軍縮秩序、四國協約及び九國條約等は此の秩序の副産物であつた。日本海軍が此の軍縮秩序を破り、(拙著、雄邦日本の東亞復興第三編第一章、軍縮秩序の解消参照)日本陸軍が滿洲を此の九國條約秩序から引抜いた時に此の秩序は殆

んど壊滅に歸した。吾人は太平洋關係に對し世界新秩序の名に於て最早抗議するの必要を認めない。第五は蘇聯邦を宿主とする國際共產黨である。之に従屬するものに人民戰線がある。露國が歐亞に跨り、共產黨細胞を世界の六十ヶ國中に有し、西班牙、支那に於てはあれ文けの侵透力を示して來たのであるから、準世界秩序の内最も恐るべき潛勢力を持つものである。孫文の聯露容共、蔣介石の容共抗日、其の結果たる今度の日支大事變等は皆な國際共產黨の攻撃目標を、日、獨へ集中せよと云ふ志向から發して來て居るのであつて、此の秩序は最早日本の不俱載天の必然的想定敵と看做すべきものである。第六に其の反動が國民戰線に屬する列強の防共協定であることは何人も知つて居る所である。之は世界舊秩序を破る世界新秩序の宿主であるのである。興亞は是非國際共產黨の擊滅から始められねばならぬ。

最後に目下空想に屬する世界協同社會の出現に追つては基礎を供する大陸秩序がある。其の先例は「ナポレオン」一世帝の大陸體制で非道の英帝國主義と戦ふ爲に餘儀なくされたものである。現在に於ては第一に歐洲聯合を擧げることが出来る。吾人は之に反對する理由を持たないが、一方に英佛、他方に獨伊と云ふ不俱載天の新秩序と舊秩序と對立して居つては其の實現は頗る困難である。もつと公正な秩序が生れ直した後でなければ、そして大陸に等しく仰がるゝ

大盟主が現はれた後でなければ此の聯合は出来ないだらう。第二は拉典亞米利加の「パンラチニズム」である。其の出現は米帝國主義に對する反動で、其の獨立なる成長活躍は最も世界新秩序の爲に望ましい。第三は大亞細亞主義である。勿論亞細亞には十一億世界過半の人口があるので、世界の半分尠くも四分の一位の發言權を有すべきであるが、到處死屍累々、唯自由なのは日本一ヶ國で、全體として餘りに無力である。爲に大亞細亞主義は大東亞主義の實現後でなければ問題とならない。第四は東亞新秩序にして日本を盟主（之は日本から云ひ出さぬ方がよい道理ではあるが國際政治界にては自立するより外方法はあるまい。）として今や生れ出でむとして居る所のものである。亞細亞の半分を抱擁するから之も一つの大體制と云ふを妨げない。阿弗利加の土人に自立する能力あり、濠洲の土人に自立する能力あらば尙二つの大體制を認め得るのであるが遺憾ながら執れも現在は全く歐洲的秩序の内に没して居る。

此の外にもつと小さい地方的集團がある。「スカンデナヴィア」主義、汎「バルカン」主義、「バルト」海集團、泡沫と消へた小協商等が之である。之等は無力であつて、世界改革の遂行上で研究の對象となるものではないのである。

二、東亞舊秩序否東亞無秩序

以上の次第であるから、今迄東亞には東亞を主體とし、其の主體から自然に流露した東亞秩序と云ふものはなかつたのである。今後支那事變を契機として誕生するものが東亞新秩序である。即ち前述の種々の世界舊秩序及び準世界舊秩序の入會地として其の描き出す混亂狀態が東亞の舊秩序であり、寧ろ東亞無秩序と云はるべきものであつた。此の無秩序を織出す経緯となつたものは聯盟秩序、歐化秩序、英米的國際資本主義的秩序、太平洋關係秩序、國際共產主義秩序等である。此の事實は日本や支那の知識人達が知つてか知らずにか世界的猶太的諸思想の捕虜、被搾取者であつたことの事實と吻合する。此の東亞無秩序の内に於て右の諸秩序は横行濶歩し、其の支配權を擴張し、經濟的利益を掌中に握むことが出来たのである。其の反面に於て日本と支那とは彼等に善い様に翻弄され、其の明示黙示の領導の下に日支兩國は何時の間にか不俱載天の敵として對峙する様になり、今次の支那大事變に漕ぎ附けたのである。其の結果は東亞内の内戦である。東亞の内には「バミール」高原の東には尠くも六億の人間がある。其の六億の人間は地獄に於ける盲目の如くに觀客が笑つて居るのも覺らずに殺し合つて、筆者を

して東亞の六億の大衆は結局零に等しいとの嘆聲を漏らさしむるに至つて居る。

聯盟秩序が如何に支那人の骨髓迄腐蝕させたかは嘗て顧維鈞が巴里の講和會議に於て「支那には亞細亞は亞細亞人の亞細亞なりとて日本との緊密なる協力を求めて居る少數の人士もある。併し支那政府の立場は西歐の正義を信じ、又支那の將來は西歐に懸つて居ると信ずる」と揚言したことに徴して明らかである。聯盟總會、理事會、聯盟規約改正委員會等に至るまで日本人と支那人との原被兩造として對立する法庭でないものは無かつた。滿洲事變が起つてからは特に然りであつた。聯盟の對支技術援助と云ふことが聯盟事務局で支那人と親交のある波蘭系猶太人等に依りて計畫された。余の見解では技術こそ最高の政治である。然るに日本の爲政家は技術だからとて之を全く雲煙過眼視した。支那の所謂經濟復興が何を意味するかは今度の大事變に打當つて解つたらうが、そんなことで八紘一字の皇道を宣布出来るものか、吾人は無限大の疑問を有する。

英を首將とし、米佛を副將とする國際資本主義秩序は日支間に起る旋風の中心無風帶を狙つた。彼等は海港諸都市に資本主義的支配の據點租界を据へ、足らざれば商業的軍事的前衛陣地、租借地を割取し、政治的地盤を築き、門戸たる海關を支配し、借款に依り財政管理の魔手

を伸ばし、鐵道、内水沿岸航路を管理し、賠償金や借款利子受取りの爲に外國銀行を設立して金融を支配し、最後には抜く手も見せず法幣の死命まで制するに至り、資本的企業、例へば鑛山、煙草、紡績、鹽、茶等の事業を起し、買辨を利用して農産を買集め、漠大な商利を博した。門戸開放主義に關し世人は最も必要な唯一の點を忘れて居る。夫は此の主義が奥地大陸面からする赤露や英國の侵略には尠しも障碍とならず、右侵略に對して立向ひ大陸へと志向する日本の運動、支けを阻止すると云ふことである。其の結果は前記の中心無風帶を擴大して此の英米資本主義の發展に利すると云ふことである。

國際共產主義に至つてはソ聯一國を宿主とし、世界革命を標榜した。事の成らざるを見て一國社會主義に轉向し聯盟にも加入したが、之では立場が困る。そこへ持つて來いの世界革命演習場が半植民地支那である。若し日本がもう少し強く敏くさへあれば此の力を英米佛資本主義の方へそらせてやることは一擧手の勞であつたのだが島國の群小政治家にそんな雄略は望むべくもない。日露不可侵條約案の否定された頃から、北鐵移讓問題の圓滿解決に拘はらず、ソ滿國境の軍擴競争は白熾熱化して今日の事態を産むに至つた。「コンミンテルン」の集中的日、獨攻撃の指令と併行的に人民戦線が産まれて行つた。支那共產黨の抗日救國宣言から反蔣内戦の

停止、先進資本主義國との衝突緩和、聯露容共運動の全國的展開、抗日統一戦線の結成となり、西安事變となり、遂に支那大事變に漕付けた。

最後に孫文主義の中國なればソ聯と提携することは確定的である。其の上人民戦線の戦術が採用された以上英、米、佛資本主義が支那とソ聯とに容れらるゝは當然で、日本が唯一の假裝敵國に撰まるゝのは不可避である。支那が自立的民族主義を持つてゐたのであるならば其の適用上聯日排ソ排英に向ふことも出来たのである。現に國民黨は一時英帝國主義、紅軍と戦つて來たのである。併し日本の力が足らない様に見える、經濟上弱く見える、之を先きに片付けようとするのは人情でもある。侵入者が侵入する程對抗上止むなく日本も支那に侵入して行き、冀東自治政府、冀察政務委員會なる獨立政權の擁立、北支綏衝地帯の設置、滿洲國馬蹄形包圍陣の打破等を策すれば策する程、世界の眼に日本が侵略的帝國主義なるかに映する様になり、自由意思で國民黨政權は日本を假想敵とすることに斷然決意したのである。

尙太平洋關係に至りては最も有害なる影響を日支問題に及ぼしたのであるが、滿洲事變に際し其の主要なる宿主米國が日支大事變に際し中立政策不承認主義で一部手を退いたから今度の事變の背後には動いて居らないが、矢張り九國條約の殘滓は蠢動を續けて居るのである。

以上の如き東亞舊秩序否寧ろ東亞無秩序に對し日本は斷然干戈を取つて起つたのである。東亞安定勢力を以て任ずる以上は全有か皆無か、乾坤一擲の大聖戦に乗出さざるを得ない。舊秩序下に置ける北支五省の支配と云ふ中間案は最早間に合はない。筆者は夙に此の形勢を看取して舊著に於て彈丸國家の陶鑄を提唱して置いた。今は否應なしに總力戦體制の確立をやらねばならぬではないか。日本は世界及び東亞の舊秩序下に於ける二流國が新世界東亞新秩序下の乾坤第一邦か、其の一を撰めと強制されて居るのである。「日露戦争はもう始まつて居る」と云ふ様な見方すら吾人を欺かないのである。斯様な大きな問題が日本政治家に夙に直ぐに擱める筈はない。聖戦の進行に伴れ、不擴大から徹底膺懲に、妥協策から蔣政權を相手とせずと云ふ所まで進み、今度の事變が世界舊秩序の全體特に東亞舊秩序の全體に對する大維新だと認識するゝには一年有半を要した次第である。そして右の認識から東亞新秩序と云ふ抽象漠然に過ぐる言葉が生れて來たのである。日本の正義、日本の平和、日本の秩序は高揚されねばならぬ。日本國內の現状維持派達が如何に戦慄しようと今日の課題が世界の舊秩序其の延長たる東亞舊秩序の抹殺であり、之と併行的に東亞新秩序即ち日本的東亞秩序の創建であると云ふ事實を蔽ふことは出来ない。

三、東亞新秩序又は日滿支互助連環の關係

聖戰一年有半に恆り支那大事變の含む意義が充分知れ渡つた時に東亞新秩序即ち日滿支互助連環の關係なる言葉が我が當局に依りて發せられた。當局も此の言葉の漠然に過ぐることを認め、其の發展を將來に期待して居る様であるが、吾人の縷述し來りたる言葉の全幅の意味が把握されるれば政府の聲明の内容と合はせて東亞新秩序なる言葉の意味は分明となる。此の新秩序の根幹は消極的に舊秩序の潰滅を招徠するか、又は夫より東亞を引抜くことかである。夫と併行的に積極的に日本の秩序を布くことである。

先づ消極的方面に於て第一に新中國は日支兩國の直接交渉を阻却する國際聯盟から脱退することを要請せらるゝ。日本が聯盟から脱退するや否や露國が之に加入したと云ふことは聯盟と日本との不兩立性を語るものである。近衛首相が「實に現下の世界に必要なは眞に公正なる均衡の上に平和を築くことであります、過去の諸原則が事實上不均衡なる原狀の維持を鐵則化し、固定化することにあつたことは否むべくもありません。聯盟規約の如き國際條約が其の權威を失墜したことは實にこの不合理に其の根本原因があるのであります」と述べたるは、東亞

新秩序内に聯盟の介入を許すべからざるの確證である。第二に新中國は太平洋關係から脱退することを要請せらるゝ。夫は結局九國條約の破棄と云ふことになるのであるが、此の點に關しては帝國政府の聲明は過去の原則が其の儘適用出來ぬと云ふ丈で、問題の周圍を彷徨して居る。併し東亞安定勢力、日滿支經濟「ブロック」、日滿支互助連環の關係と云ひ、「將來支那に於ける第三國の經濟活動は新體制に依て結合せらるゝ三國の國防及び經濟的自主達成に必要な制限を受け、且つ政治的特權を伴ふものならざることを必要とす」と云へるに鑑みて帝國政府の九國條約に對する明確なる否定的態度を看取することが出来る。第三に英、米、佛等の政治的、金融資本主義的帝國主義の否定さるべきこと即ち支那植民地化の阻止に關しては帝國政府當局が「支那の民族的情熱を認識し、支那の獨立國家としての完成を必要とすることに於て日本程切實なるものはないのであります」と述べ、尙其の實踐として正義に基く東亞の新平和體制を確立する爲め治外法權を撤廢し、且つ租界の返還に關して歐米各國を指導して積極的な考慮を加ふるの用意ありと述べあるに徴して明瞭である。第四に國際共產主義に關しては當局が繰返し共同防共の文字を用ひ、尙「東亞の天地には『コミンテルン』勢力の存在を許すべからざるが故に日本は日獨伊防共協定の精神に則り、日支防共協定の締結を以て日支國交調整上

喫緊の要件とするものである」と述べて居るに徴して明瞭である。第五に支那自身の共產化聯露容共、歐米依存、以夷征夷、遠交近攻、毎日抗日に關しては帝國政府が「蔣政權を相手とせず」、「抗日國民政府の徹底的武力掃蕩を期す」、「之が潰滅を見る迄帝國は斷じて矛を收むることなし」と云へるに見て最も明瞭である。

次に東亞新秩序の積極的建設的方面に關しては、次の事項が要請される。

(イ) 政府當局が「日滿支三國相携へ、政治、經濟、文化等各般に互り互助連環の關係を樹立するを以て根幹とし、東亞に於ける國際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、經濟結合の實現を期するにあり」と云ひ、「日滿支三國は東亞新秩序の建設を共同の目的として結合し、相互に善隣友好、共同防共、經濟提携の實を擧げむとするものである」と説き、「日本は東洋人としての自覺に醒めたる支那國民と俱に相携へて眞に安定せる東亞の天地を築かむことを欲するものであります」と述べて居るのを見て政府の意圖する「道義的自主的連環の新組織」が如何なるものなるかを確知することが出来る。此の見地から區々たる領土や戰費の賠償は全く問題外に置かれる。以上に依りて想ふに帝國政府の云ふ東亞は日、滿、支即ち小東亞である。吾人は本然の固有の東亞に東力東漸せんことを要望し、大東亞主義を提唱するものであ

るが詳細は後章に至りて明確にされるであらう。夫は兎に角茲に日、滿、支、關係、優位、の、原則が要請される。

(ロ) 以上の連帶關係は支那に現存する實情に鑑み、日支防共協定の繼續する期間中特定地點に日本軍が防共駐屯すること、內蒙古地方を特殊防共地域とすることを要請する。日支防共軍事同盟が即ち之である。

(ハ) 新秩序の經濟的方面は世界に自給自足の強大なる經濟單位の存するに對應して日滿支の三國が經濟的方面に於ける相互連環關係を結成し、密接なる經濟的協力に依り經濟單位を強化せんとするに在る。之が爲め支那は帝國臣民に支那内地に於ける居住、營業の自由を容認して、日支兩國の經濟的利益を促進し、且つ日支間の歴史的經濟的關係に鑑み、北支、內蒙に於て其の資源の開發利用上日本に對し積極的に便宜を與ふべく要請される。以上は門戶閉鎖を意味するものにあらずも、資源の尠き日本、市場を國內に持たざる日本、又經濟的に力弱き支那としては相倚り相助けて物資の自給自足政策に必要な生産の確保を計り、萬一の場合に於ける市場の確保を期することは、其の存立上不可缺と認められ、其の範圍に於て東亞以外の各國の經濟活動は制限されなければならぬ。

日本には國防五ヶ年計畫に附帶する軍需産業五ヶ年計畫がある。之は東亞國防計畫經濟の根幹を爲すもので、當局の説明に依れば一九一六年度迄に次の自給率を得る豫定である。

昭和十三年度を基準と致しまして十六年度においてこの計畫が完成した場合にどのくらいの割合で増産を見るかといふ大體の割合を申し上げます。

鋼材において普通鋼が約六割の増産になります、特殊鋼および鍛鋼約二倍近くの増産、鋼塊約六割増、鉄鐵が約二倍、鐵礦石二倍五割、石炭は三割強いづれも増産の割合であります。なほ念のため申しますが輕金屬につきましてはさきほど申上げた重要資源なる性質が一層強いのでありますのでアルミニウムにつきましては十倍近くの増産と御諒承願ひます。銅八割強、鉛約九割、亞鉛約七割、錫約倍額程度の増産となります。石油および代用燃料につきましては自動車の揮發油は天然三割強増で人造石油約三十倍、重油天然の分が約四割増、人造の分が約九倍、無水酒精は十三倍強、曹達灰二割強、苛性曹達四割強、工業鹽六倍半、硫酸アンモニア約四割、パルプは製紙用約二割、人絹用が三倍二割強、金二割強、工作機械が二倍六割強、機關車約三割、客車七割強、貨車約五割、自動車五倍強、羊毛三倍四割、大體この程度と御諒承願ひます。

なほ日滿支を通じて昭和十六年度末までに自給自足出来る品目は鐵礦、石炭、輕金屬、亞鉛、曹達、硫安、パルプ、鐵道車輛、船舶、自動車などであります。

以上を補ふものに滿洲産業開發五ヶ年計畫がある。昭和十二年より實行に入り、鐵類は三倍、石炭は二倍強、液體燃料は約十倍、電力は約三倍等に夫々増産されねばならない。加ふるに北中支開發計畫があり、詳細は略するが鐵、石炭、鹽、棉花の増産が期待されてゐる。結局に於て東亞は普通鋼材、綱片、鉄、低磷鉄、鉛鐵、「アルミニウム」、石炭、「モーターベンゾール」、硫安、「ヒマシ」、玉蜀黍、高粱、麩、飼料、豆類、豆粕等を充分自給し、大東亞總力戰體制の支柱たり得るに至る見込である。一九二〇年には乾坤第一邦は經濟的に完成する。

(三) 滿洲國は從來の帝國の歐米追隨政策を清算し、日滿不可分關係の設定に依り國防の共同と經濟の一體化とを招來し、暗かりし日本に未來の光明を與へた。想ふに東亞新秩序の儀表は世界及び東亞舊秩序から完全に引抜かれ、獨伊から認められた滿洲國であつて、東亞舊秩序の儀表は無政府の上海である。上海に於て帝國政府の手古摺るは故ある哉である。此の滿洲國につき帝國政府は支那が滿洲國に對する在來の拘泥の情を一擲せんことを要請して居るのである。

(ホ) 全體國家主義戰線に關しては、帝國政府は防共の盟邦獨逸、伊太利が日本の東亞に於ける意圖に共鳴し、帝國に精神的援助を寄せたのに對し深く感謝すると共に、盟約を強化緊密にするの必要を痛感し、進んで共通の世界觀の下に世界新秩序の再建に協力せんとして居るのである。此の準世界新秩序とも云ふべき全體國家主義戰線は新東亞秩序及び新世界秩序の宿主として大なる歴史的使命を有する。日、獨、伊軍事同盟の考慮に上る決して故なしとせない。日本の動向は決して居る、獨伊と相救はずば、英米から憐まれたくても憐まれない日本は何處へ行くか寒心すべきものがある。

以上東亞の新秩序は聯日興邦、剿共滅黨を標榜する臨時、維新兩政府の無留保に支持する所であるが、其の押し詰めた内容は日本的東亞秩序以外の何ものであり得ない。特に目下の準軍政下に於ては特に然りとす。帝國政府が「平等の立場に於ける協力」と云ふのは日滿支渾然一體となり、東洋人としての自覺に醒めたる支那國民の内部から流露する意慾に依り眞の提携の實を擧げ得る時を待望して斯く云ふものと解せらるゝ。

四、東亞協同體說

近時我國に於て東亞協同體の説が流行して居る。其の基く所は、(イ)日支人の同類意識、(ロ)政治地理學上の單一性、(ハ)文化の共通、(ニ)明日に期待せらるゝ經濟の一體性等に在る。併し之等の説は客觀的妥當性を有せないし、現在の所支那國民から共鳴を買へる何物をも持たない。想ふに之等の説は一端の事實に過大な意義を帯びしむるの誤りに陥入つて居る。利益社會ベネフィットに對する意義の協同社會コオパティヴは個人を超越した先天的有機的生命體とされる。聖戰の進行中に急造された東亞協同體と云ふ文字が其の實を存せないことは議論の餘地はない。觀念上も東亞協同體なる高次の全部を立て、其の部分として其の表現人として日本が在ると云ふ風に考ふることは不當である。加之吾人は何人も異議のない日本協同體の内に巢喰ふ利益社會の多いらしいことを苦々しく思ふものである。

筆者は協同體と云ふよりも聯盟(幻滅の名残)と云ふ方が寧ろ優つて居り、夫よりも聯合アソシエーションと云ふ方がもつと外交的であると思ふものである。所で大陸政策派と認めらるゝ此の種の説を爲す人々の言説は一面無理からぬ考慮を含むと同時に亦頗る警戒すべき或るものを含んでゐる。例へば「東亞協同體の原理」の著者は「事變解決の端緒は日本の主觀的條件の中にあるのである。日本の支那に對する建前の變更が日支の事變を解決する唯一の條件となるのである。

この中のみ事變解決の鍵は握られてゐると云へよう」と云ひ、「支那は日本に向つて國際資本の秩序の中にあつてそのまゝ大陸に發展せんとした日本の侵略者の残滓を清算し、新しき秩序の建設的指導者たらんことを要求して居る。日本に向つてそのための思想と政治とを要求して居るのである」と云ふて居る。又東亞聯盟論の著者は「日本は自己の立場に還るべきである。東洋の先達たる位置に還るべきである。而して其の爲には我國朝野に尙見らるゝ帝國主義的思想の残滓を斷乎一掃することが必要である。日本の斯る態度が前提とならざる限り、東亞聯盟の企圖は東洋人の間に於てすら理解されることが困難であらうし、又其の政策は道義的迫力を伴はないであらう」と力説して居る。

大陸派の人々に附纏ふ此の思想の方向の正しいことは滿洲國が産れてから治外法權鐵道附屬地が撤廢されたこと、新中國の爲に租界治外法權の撤廢が考慮されてゐることに徴して明瞭である。併し滿洲に於てすら租借地は未だ撤廢さるゝに至らず、治外法權撤廢の成績は之を後日に徴さなければならぬ。又滿洲國創建が西歐帝國主義追隨より脱して自主的大陸政策に入るの面影を多分に持つて居ることは疑ひない。併し夫すら百八十度の方向轉換と見るが正しいか、「タクチック」の轉換と見るが正しいか、宇宙法則に照してよく研究し確認する必要がある。

論者の説を聞いて居ると「シルレル」劇の「オルレアン」の少女を想起させられる。彼女は救國の使命に添へて天帝から魔力を授けられてゐたが、敵の英將と地上の愛に落ちた爲に魔力を失ひ、敵將の捕虜となると云ふ筋になつてゐる。大陸を抱くの情熱に驅られて自己を其の内に解消して行くと云ふのは此の「オルレアン」の少女の過失を繰返すものでないだらうか。飛行機が提起する一切の問題から超越する爲めには飛行機を空中解體させて大氣と融合させて仕舞ふことが思想上都合がよい。併し飛行機は役立つ爲めには其の肢體と推進力とを強大にして風雲を叱咤することを要求されて居るのである。吾人は日支問題の解決の鍵が日本の主觀、日本の建前の變更の中に在ると云ふ「マルクス」思想の残滓に皇道主義を鍍金したる如き論を危険に感じ、東亞新秩序は日本的東亞新秩序であり、八紘一宇の皇道宣布であると見る方が宇宙法則に合する客觀的妥當性に富める考へ方ではないかと思ふものである。日本政府の聲明が「日滿支三國が各自獨立を維持し、各自の個性を充分に生かしつゝ東亞保全の共同使命の下に固き結合をなす」と云へるは東亞協同體の觀念を採用せなかつた結果と見らるゝのである。事實上蔣政權は東亞新秩序を侵略の別名だとなし、一般支那人は協同體と云ふ様なことは考へて居らないのである。

事の序に一つの歴史上の教訓を引用したい。一八七一年統一前の獨逸は立派な一民族でありながら二十五邦に分れてゐた。之を統一に持ち來す爲には普魯西が全人口及び全面積の約三分の二を持ち、他の二十四邦が合して唯の三分の一しか持たなかつたと云ふ事實、(一九一四年の獨逸帝國の全面積は二十萬八千方哩、全人口は六千五百萬人で、其の内普魯西の人口は四千二十萬、面積は十三萬四千方哩であつた) 夫にも拘はらず普魯西が舊秩序の宿主たる塊と佛とを徹底的に破り、普魯西の威信が天に冲すると云ふ事實を必要とした。獨逸帝國は普魯西が創造したのだ。武徳で出來ないことを此の際思想の技巧でやらうと思つても出來るものではない。筆者は東亞協同體説に餘り大なる價値を認めないものである。

尙滿洲國に於て嘗て資本家入るべからずの標札が掲げられ、新京「イデオロギー」とやらが行はれたこともあるが、今は滿洲重工業が起らんとして居る。此の關係に於て矢張東亞協同體の理念が日本を全體主義的の革新に持つて行く爲めの大前提として掲げられて居る様である。併し筆者は主體が客體に働きかけるときに、其の反作用で主體が解體するの必要を認め得ない。余輩は死せる孔明が生ける仲達を走らせたるが如く、蔣の中國が皇道日本を走らすと云ふ様なことを考へたくない。日本の國內的革新は東亞協同體説を掲げずとも、時局の重壓下に宇

宙法則、日本皇道精神の開展に依り必ずや成就されて行く。當局は「惟ふに東亞に於ける新秩序の建設は、我が肇國の精神に淵源し、之を完成するは、現代日本國民に課せられたる光榮ある責務なり。帝國は必要なる國內諸般の改新を斷行して愈々國家總力の擴充を圖り萬難を排して斯業の達成に邁進せざるべからず」と述べて居るのであつて、此の革新は時局が之を必要とし、身命の國有化を推進力として必ず行はれて行くのである。自身の跌き石となるかも知れぬ様な高襟の觀念的遊戯は害ありて益ないものではあるまいか。

五、世界新秩序

筆者は約十五年前次の如く記述して置いた。

要するに之等論者の所説は皆國家の生存權を認め、紛争の平和的處理よりも、寧ろ紛争の豫防即ち其の禍因を剪除するの必要を説くものにあらざるはなし。國民經濟及び世界經濟の發達が經濟問題を併せて、國の死活問題たらしめ、生物學上及び史的唯物論の見地よりすれば、戦争が一面竊取又は強制的分配干涉に外ならざるの事實に鑑み、第五回聯盟總會に於て、佛國側勞働代表が國際政治問題を處理すべき聯盟理事會と對立し、國際經濟問題

を審査すべき經濟理事會の設置を提唱し、神川教授が最高經濟理事會の必要を承認したる又此の精神に出づ。眞正の平和は正義の世界に君臨する平和ならざるべからず、斯の如き平和を地上に齎らさんには姑息の現状維持に満足せず、積極的に正義を樹立し、人類全般の福祉を増進し、國際紛争の政治的及び經濟的原因を除去せんが爲め、現状打破をも辭せざるの覺悟なかるべからず。而て如上の高遠なる理想的平和を國際組織に依り維持せんが爲には現状を固定することに依り平和を確立せんとしたる平和議定書に含まれたる紛争の平和的處理、狹義の安全の保障（相互援助）及び軍備縮小の三原則に配するに國際政治及び經濟關係の調整即ち擴充強化せられたる規約第十九條の精神を以てせざるべからず。：

然るに現状維持を目的とする法的平和組織と、現状變更を追及する平和運動とは、互に倒行逆施せんとするものにして、現状の神聖化と國家の將來に於ける發展の自由とを同時に調和的に存在せしめて、間然する所なき國際平和組織案を作成し、以て有意義なる軍縮の前提となすことは、近世國家に於ける法治主義と革命的勢力とを調和すると等しく全然不可能なり。（拙著國際軍備縮小問題、八二二—八二四頁）

以上の豫言は聯盟の顛落、滿洲國、「エチオピア」、「チエツコ・スロヴァキア」の興亡に依り

て其の眞實なることが完全に立證された。彼の「ハウス」大佐が世界の平和の爲には領土の再分配が必要であつて、英、佛、露、米の四ヶ國が相當の犠牲を拂ふの覺悟がなくては出来ないことだと喝破したのは遙に後年のことである。筆者の「領土再分割とや」の一篇（拙著雄邦日本の東亞復興、第三編第三章）は此の問題に答へて其の國際革命的方法に依るにあらざれば解決し難きことを示唆したものである。今や獨逸は豫言者「ヒットラー」に率いられて駈々として東方に氾濫して居る。此の勢は勿論續くであらうし、尙植民地返還の要求は夙に提起されて居る。伊太利の東部地中海への氾濫、「チュニス」、「コルシカ」島等の割讓の要求は議題に上つて來た。日本の東亞新秩序も亦同様の要請を含むものである。世界に唯一つの問題がある。夫に較ぶれば民族主義、民主主義、社會主義などの提起する問題は小さくて殆んど問題ではあり得ない。此の唯一最大の問題の解決の擔任者は獨、伊、日である。

唯一最大の問題とは何か。現在世界に於ては往時の遊獵の結果として人口四千萬人の英人が世界の人口及面積の四分の一を支配し、佛國が本國の十五倍の面積を支配し、露國が世界地表の七分の一を支配し、米國が南北兩米大陸を勝手にして居り、四國合はせて人口面積共世界の四分の三世界資源の八割五分を支配して居る。民族主義、民主主義、社會主義など云ふても到

底話しにならぬ。斯様な兼併は天地と人との間に絶縁状態を生ずる。英本國の生産價值と植民地の生産價值との間に巨大の差を生ずる。資本主義は横暴にも物價政策の犠牲として鑛山や適地産業を壓殺する。巨大な領土には勝手に門戸閉鎖主義を適用し、入會地には勝手に門戸開放主義を適用する。其の反面には亞細亞に十一億の浮浪人が居り、小數者の高度文化生活の爲に大多數者が永久飢饉に生きると云ふことになる。植民地搾取と歐米の賭博淫蕩都市とは表裏を爲すものだ。餘りに不平等なる地表の分配は資本主義の飽和状態、生産の不増進を招來し、一般文化の向上に對する障碍となる。天地人の三才は正しく配列されて神の化育を助くべきに全く遊離して居る。かくても神の憤り神の革命が此の地上に下らなかつたら不思議である。東亞新秩序建設の彼岸は神意に依る世界新秩序の建設でなければならぬ。

大獨逸の領導者が獨逸の未來は東に在ると云ふとき、夫は實を含むと同時に虚を藏して居る。其の裏は即ち英國攻撃である。一九一八年に獨逸を破り、其の海上進路を遮斷した者は英國である。「ナチス」の青年は實に獨逸の敵が英國であつたことを知り抜いて居り、如何にして之を破るべきかを夢寐忘れないのである。思ふに四千萬の人間が本土人口の十二倍の人口、本土面積の百倍以上の地表を支配すると云ふ人工的機構の脆弱性は是を破碎せしむるの轉機を

充分に藏して居る。西班牙、無敵艦隊、和蘭艦隊、佛國艦隊の弔合戦は大西洋、地中海、西印度洋に於て獨伊に依り戦はれねばならぬ。英國艦隊が撃滅せらるゝならば世界新秩序は一朝にして成就せらるゝ。日本は米國艦隊を中立化し、英國海軍が東亞新秩序の創建を妨害するとき之を西太平洋から撃攘し、要すれば獨伊に呼應せねばならぬ。海南島は既に其の體制への第一歩である。東漸する獨伊と西漸する大東亞主義と相呼應せば二十世紀の大病人ソ聯の分解作用を招來することは容易である。露國の分割は世界平和に對する最大の貢獻である。東亞新秩序を通して世界新秩序へ。吾人は此の神意に依る世界大維新後の世界に於てのみ生き甲斐を感じる事が出来るのである。

此の世界新秩序の下に於ては歐洲大陸は創造力に富める獨伊の指導の下に調和的協力と共存共榮とを見出すであらう。汎歐洲會議の席上に於て阿弗利加は土人の發達し成長する迄、獨伊をも加はへたる列強に公平に分配せられ、其の委任統治に附せらるべきである。英國は本國の面積と人口とに鑑み加奈陀を以て満足する様招請せらるゝかも知れぬ。西方亞細亞は獨伊の國際的指導の惠澤に浴し、中央亞細亞及び印度は解放せられ、濠洲は爾餘の諸群島と共に亞細亞地域諸民族の創造的開發に委せらるべきである。米國は固有の大陸を以て満足し、「モンロー」

主義と云ふが如き準世界秩序網は抹殺され、拉典亞米利加は眞に平等の地位を享有することになるであらう。明敏達識の政治家「ハウス」大佐の提案を演繹するときは大體以上の如き結論に達すると思はれる。此の世界新秩序の下に於ては天地人三才は始めて調和的互助連環の關係に置かれ、諸民族の創造力は到處に高揚されて神の榮を現はし、一般の文化と生活水準とは限りなく高められ、安定せる平和を樂しむ大同の世界は茲に黎明を告ぐるのである。之が東亞新秩序の發展的世界史的意義である。

第四章 宿命の東亞聯合

一、序 說

支那問題の様に日本の眼前に半世紀間一日の如くぶら下つて居る問題に就ては日支協力の公式も大體一定して中國人の首肯する力強きものがあつて然るべきであるが、今迄は日支親善とか共存共榮とか和平統一とか東亞安定力とか云ふ言葉が如何にも浮いた印象しか與へず今日に至つて居る。自由主義的政黨と資本主義的財閥とが合體して歐米の金融資本主義に迎合するを有利なりとなし、歐米の指導權に服し、巴里平和會議から華盛頓會議、聯盟諸會議、倫敦會議へと迎る過程に於ては如上の缺陷も止むを得ない次第であつた。然るに世界歴史に「廻れ右」を合圖した滿洲事變以後に於ても依然追隨外交、自由主義外交の殘滓を多分に保存し、日滿不可分關係、東洋平和位の聲しか聞えなかつたのは頗る遺憾であつた。

此の缺陷を補ふ爲には夙に大亞細亞主義の説があり、皇亞細亞の著者鹿子木員信博士其の他

多數の先覺が此の人種主義、政治地理學に立脚する説を祖述して居る。之は現實政治よりも寧ろ理念に走つた日本世界政策の基礎附であるが、西洋に黃禍論や東洋移民排斥運動あり、孫文も此の説を提唱した點に於て棄つべきものではない。藤澤親雄教授は全體主義を國際政治に適用し、東亞を東亞運命協同體と認識することに依て東亞再建の「イデオロギー」確立を期して居る。此の説は北支に於ける多數の聯日興邦を志す識者の共鳴を得て居ると云ふ長所があり、加ふるに同文同種てふ近親民族關係上、經濟地理學上、將又政治地理學上の背景もあり、首肯するに足りて居る。此の頃東亞主義、新東亞主義等の言葉を聞くのは前二者の部分的又は素朴的表現と見ることが出来る、之には外交上の思慮分別も含まれ、希臘を始め下りては回教國に依りて歐洲化された印度と東洋的なる緬甸とは之を區別すべきであると云ふ點に於て決して棄つべき言葉ではない。更に最近に至つては東亞聯盟、東亞新秩序、東亞盟邦、日滿支互助連環關係等の文字も廣く使用され出した。併し筆者は之等の説と何等扞格せず併行して併しなからより實證的に現實的に實利主義の大衆にも解る様に日支提携の公式を發見せむと努力するの必要に迫られて之を試むることとした。吾人が若し此の事業に失敗するならば一時武威に依る強制的日支提携は出來ても文に依る永續的任意の日支提携は不可能となり、日本の大陸政策は

破滅の危險に晒されるであらう。故に今此の未熟の文を發表して大方の叱正を乞ふ必要が痛感されるのである。

支那の聯盟、歐米、特に英米、蘇聯等の勢力に依存するは既に久しきものがある。聯盟其他から派遣された顧問、西安事變に活躍した「ドナルド」氏英大使等は國民黨治下の支那に於ける歐米派の擡頭と終始して居る。今試に手近に在る鮑君の支那の涉外關係論を取つて見れば其の第百十八頁に次の様に書いてある。

支那に於ける佛蘭西の政策は支那問題を米國が領導するか日本が領導するかに依つて決する、若し米國が領導者である場合には佛國は米國に追隨し、門戶開放國際協力の政策を支持するであらう。若し夫が日本であつたならば佛國は門戶閉鎖擡取の政策に戻るであらう。併し望むらくは新借款團が成功を收め、米國が極東の領導者となり佛國が英米と協力するに至らむことを。

以上の考が支那の大勢を支配して居た。さればこそ日本の領導で支那が關稅自主權を得た後に於て、日支衝突の子滿洲國が東洋的東亞保全の礎石として生れ、滿洲に於ける強制的提携が任意的提携に推移を始め、治外法權鐵道附屬地行政が撤廢される時期に至つて此の日支大事變

となつたのであつて、日本の蘇秦張儀達は孰れも遺憾ながら零敗を喫して居る。之を匡救するのは決して容易のことではない。寧ろ一見其の方略は見附からず、慌てた妥協工作の如きは反對の結果を産み、何人も途方に暮れて居る有様である。余が試に奮起して秃筆を柯する所以である。

二、抗爭と協力

「ダーウイン」が生物生活の基調をなすものとして認めたる生存競争は驚くばかり人間生活の内にも織込まれて居る。高尚な紳士二人の間でも生活軌道が一致すると安心出来ない現象が起り、家庭内さへ時に之が例外を構成せない。一人の成年者は嘗て血を以て其の手を汚さざりし者と雖も植物の胚種から動物に至る迄無限の生命を犠牲として成長して來て居る。時には明確に意識して鬭争をやり、權謀術數至らざるなく、其の反動から來る苛責に對しては悪しき良心を以て戦ひ之を克服さへして居る。併し其の精神的葛藤の果ては時として熊谷直實の様な心境にさへ達するのである。斯様な事實と同時に不可分に併行して協力とか同盟とか云ふ現象が人の行動を支配する。人間が三人集まれば政治があると云ふ理由は茲に在るのである。國際政治

に於ても我々は戦争的戦争又は平和的戦争即ち國際無政府状態の内に生活し、蓋然的或は可能的假想敵國を認定し、之に對する備をなし、昨今特に流行して居る通りに軍備を擴張し、同時に同盟關係、相互援助關係を結んで居る。社會生活に於ける競争は團體競争派閥競争になる必然の傾向を持ち、同盟を否認し、秘密外交を否認せむが爲に國際聯盟を組織すれば、夫れと同時に亦同盟が生れ、平和議定書に同盟が織込まれ、今日は歐亞大陸の兩端を結ぶ防共協定が成立して居る有様である。だから外交とは時間空間を背景として假想敵國と同盟國との最も妥當するものを選択し、調整して行く術であると呼ぶ事が出来る。此の見地に立つとき國內に動く個人主義即ち自由主義や國際的社會主義が如何に無力であり、社會主義的競争と云ふ様な文字の如何に欺瞞的であるかが了解される。同時に國際政治に於ては大勢順應と云ふ様なことは原則として許し得ざることとなり、嘗日の支那と歐米追隨を競ふかと見へた様な遣り方が行詰りに逢着する所以を瞭解することが出来る。

偕て國內政治に於ては徴兵制度が身命の國有化であり、租税や統制經濟が贅澤費、必要費又は生産手段の準國有化である如く、個人は不斷に全體國家の祭壇に其の自己の抹殺を要求されて居るのであるが、國際政治に於てはとかく民族主義が優位を占め、爾餘のものを之に従屬せし

め様とする傾向が強く、國際政治の主體は聯盟や國際會議ではなくして大體民族國家である。今日でも、獨、洪、波等を動かして「チエコ」を脅威して居るものは之等の國の民族主義であつて、人々は之を以て自然の最終の實在體であると爲す程である。筆者は一面此の最終と云ふ言葉には明確に留保を附したのであるが、他面國際協力は民族主義と合はせて既に其の實を存せなかつた民權民生をも抹殺する様では生命がない。唯現實の問題として世界到處に擴張したる積極民族主義と收縮したる消極民族主義との存在を認めざるを得ないから、國際協力は前者のものを妥當或は安固ならしめ、後者のものを匡救或は補強するものであらねばならぬ。協力同盟と云ふ字を國際主義と云ふ字で置き換へるならば國際政治の統一原理は妥當する具體的國際主義的民族主義の發見であらねばならぬ。人類は家族と民族と云ふ先天的の兩結合だけでは需要を充し得ず、其の上に一方先天的環境、他方後天的撰擇意思の嚮ふ所に従ひ最も生々發展に適する、從て準先天的とも云ふべき一つの國際的結合を要求して居ると見ねばならぬ。拙著國際軍備縮少問題は最も此の理を明にして居るのである。

「ピスマーク」は神出鬼没の外交家であつたから露國を狙ふ獨逸同盟に對し再保險を附する様露帝に勸説して成功したが、斯程な無理は前記の統一原理に餘りにも合せないのであるから

久しからずして無効となり佛露協商の成立を見た。今次の事變中日支大會戰を好まざる日本側より繰返して英國との了解が試みられ、初め國民黨權との協調も試みられた様であるが、何時も成功を収め得なかつたのは、日本の國際主義的民族主義を充分尊重せなければならぬ必然の要求に基因するのである。觀じ來れば中日提携の成否は東亞に屬する彼我雙方の國際主義的民族主義を兩立させ得るか否かに依つて決せられる。今迄は夫が出来ない相談の様に見えた、又百方試みられたけれども成功せなかつた、餘りにも不兩立で縱令冀東防共自治政府位犧牲に供しても支那側で毫も相談に乗れない話の様に見えた。そこから日支事變が生れた。此の出來事を前にして今では夫は一層至難な話となつて居る。併し今の機會に出來なければ夫は永遠に出來ない。今迄は吾人は中國人に解らせるに徹底的に努めなかつたし、其の準備も充分でなかつたし中國人は解らうと欲しなかつた。今は行詰りの轉開から吾人の武德主義の餘儀なき確立となり、我方は解らせねばならない時代となり、對手は汪兆銘を始め解りたいとし、一部には解つた風を装ひたい者もある時代に入つて居る。中日雙方に於て國家有用の材なりと思ふ智識人の立つべき秋は來た。

余は茲に東洋的聖智の最高峰とも云ふべき大學の一句を引照して置きたい。物有本來、事有

始終、知所先後、近道矣。又曰はく、其本亂而未治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚末之有也、此謂知本、此謂知之至也。余の所謂具體的國際主義的民族主義は既に大學の中に完全に説かれて居るのである。

三、國際聯盟の黄昏

各民族國家の協力同盟の一般的抽象的要求に應じて世界大戰後の戦争に對する反動期に出来たものが國際聯盟である。出来る時から既に理想の幽霊になつて居た。深酷な實相を掴むものには夫は初から不存在であつた。何故かと云へば余の所謂國際主義的民族主義に立脚せず漫然たる空氣中の國際主義を推進力として居たからである。夫にも拘はらず出来上つた聯盟は普遍性を缺いて居た、斯様な畸形兒が生存し創造する筈はない。一枚看板の軍縮問題に關し何事も出来なかつた。其の間に大國の重役會議、戰前の歐洲協調、「チエツコ」問題に於ける四國協調の如きものに依り海軍制限は一時立派に出来た。而て聯盟は之に與らない。一面同盟であるかの如く装ひながら規約第十六條は絶対に効力を發生せず、他面聯盟は何でもないものだと言明された。一面規約第十條の現状維持と云ふ原則を中心として左右に軍縮と仲裁裁判とを配

しから、他面規約第十九條の現状變更調整の原則を立て、其の矛盾に苦しみ、「ハウス」大佐の所謂平和的變更が出来なかつたばかりでなく、「我が佛尊し」の規約第十條さへ擁護出来なかつた。滿洲、「エチオピア」、「チエツコ・スロヴァキア」を見れば事柄は全く明瞭である。

中國は此の聯盟に今も全く打込んで居る。山東問題で「ヴェルサイユ」條約を拒否し「サンゼルマン」條約を批准して聯盟國となつたが故に既に十八年前から日本に謀反して聯盟に加入した。聯盟の會費は拂はなかつたが極東の問題を大風呂敷に包んで山の様に壽府に携帯した。「レニン」が共産主義傳播の温床として支那に着眼する位であるから、聯盟の國際的鼠小僧波蘭系猶太人「ライヒマン」君等が之を喰物にしようとしてやつて来るのは見え透いたことである。其の喜劇の筋書が日本人にさへ讀めない位であるから中國人に讀める筈はなく、幕をあけて見れば此の大事變で支那は焦土となつて居る。之を壽府で遠見の見物をやりながら賢こさうな顧維鈞君達は滑稽にも聯盟の骸骨と抱擁して舞踏をやつて居るのである。

遺憾ながら中國の民族主義の完全性は外交關係の出發點から損はれて居た。過去現在將來に亘り日本無かりせばより多く完全性を保ち得たかどうか絶大の疑問である。此の點が本論の中心課題で、其の點には直ぐ論及するが、兎に角孫文は三民主義の筆頭に唯平面的に淺薄に此の

主義を掲げて努力して来た。此の支那の平面的抽象的民族主義に直に超越的國際主義即ち聯盟を繋ぎ、聯露容共を繋ぎ、歐米依存を繋ぐことが眞實の民族主義と矛盾せないかどうか、民族主義を大きく生かす所以かどうか考へねばならぬ點は其處だが、孫文は落第した。さてこそ蔣政權も歐米依存と抗日との間を彷徨し、日支事變の焦土政策に出づる迄になるには西安事變と云ふ「クーデター」を必要とし、爾後の蔣介石は阿蒙となり、鐵火の洗禮の下に於て支那の民族主義は極度に退嬰を餘儀なくせられようとして居る。中國の爲に悲まざらんと欲するも豈得べけんやである。新中國は深酷なる實相への悟入に依り最大限に妥當する具體的國際主義的民族主義の統一原理の上に建てられねばならぬ。

中國を茲に到らしめた一半の責任は日本にもある。自ら聯盟勢力、太平洋關係列國、歐米の領導權に三跪九叩して之に追隨して来た日本に中國の追隨を笑ふ完全な資格があるであらうか。日本は中國を笑ふ前に自己の眼の上の梁を見なければならぬではないでなからうか。筆者が多年筆陣を張り來つた所以は右の梁を認識せしめんが爲であつた。歐米を恐いと思つたり、歐米を恐れ憚る様な風をしたり、又さう誤解される様な風をすることは滿洲事變以後の日本の國策を全く裏切るものである。目下の情勢に於ては英、米、佛、露は云ふに及ばず、友好國獨、伊

に頼つて妥協を夢みることすらも東亞に於ける日本の自負を裏切り、支那を歐米に走らすもので、其の結果の恐るべきものあることを吾人は斷言して憚からぬ。進め最大限軍擴へ、乾坤第一邦の創建へ、大陸大洋大空體制の確立へ。

四、成年帝國主義の濶歩

「ハウス」大佐は若し世界平和の爲に領土の再分配が行はれるとすれば夫は英、佛、露、米の多少の犠牲に於てせられねばならないと説いて居る。之等の國は「ビスマーク」の呼んで飽和國となし、余輩の呼んで成年帝國主義國と爲す所のものである。此の四大帝國主義は今日濶刺として坤輿上を横行濶歩して居る。佛國の「クレマンソー」は「フェリー」内閣の作りつゝある第二植民大帝國を非議したが、其の獲物を一つだつて拋棄せなかつた。英國勞働黨内閣と雖も同一である。蘇聯は「カラハン」宣言では對東亞自由主義を宣明したが目下は寸地も之を失ふべからずとなしゐる計りでなく、其の赤色帝國主義は新疆外蒙古を越えて四川、陝西、甘肅、寧夏、山西に及んで居るのである。

偕て「フイリップ」の地理書に依れば大英帝國は過去四世紀間に膨脹して一切の大陸大洋に

及び、一切の歐洲植民企業の大集成者となり、世界の地表の四ノ一、人口の四ノ一を抱容する大帝國となつた。其の人口は本國の十倍で面積は本國の百何倍かに當つて居り、凡百の人種民族凡百の制度文明を取入れて居る。其の資源は緊要資源二十五種の内殆んど全部を持つて居る。佛蘭西は世界第二の植民帝國で、其の人口稀薄な植民地は阿弗利加、印度洋、亞細亞、南米に散在し、本國の四分ノ三の人口を容るゝ本國の十四倍大の面積を持つて居り、資源は英米に劣るも露と共に之に次ぐのである。露國はと云へば其の面積は世界の六分ノ一で人口は其の十分の一弱である。歐洲列強は一括して露西亞の西に突出した半島であり、蘇聯の十一聯邦に新疆外蒙を加ふるときは其の赤色帝國主義を以て掩ふ地域は亞細亞大陸の屋根をなし、「アラビア」、印度、支那等は之に懸垂した乳房にも似て居る。其の資源は又豊富であつて佛國と列んで英米の次ぎにある。米國に至りては又其の人口は世界人口の十二分ノ一面積は其の十四分ノ一である上に其の本土の四ノ一に近き墨西哥より「パナマ」運河に至る地域を「カリビアン」海政策等で抱擁し、其の富源は「ゴム」の外殆んど全部自給自足出来る程の恵まれたる地位にある。此の四つの國は不届至極にも歐洲の世界的膨脹又は世界の歐洲化を表徴するもので此の四國を合算するときは地表の三分の二、世界人口の三分ノ二、世界資源の八割五分を占めて居るのである。

ある。國家の平等と云ふが如きことは國際法學者の弄する全くの空辭である。

此の四つの餘りにも巨大なる分前を壟斷して居る大成年帝國主義國は大陸から大陸へ、大洋から大洋へ連續し、地球上を潤歩する丈けでなく、日本を近く取捲く太平洋岸に夫々其の侵略の鋭鋒を突出して居るのである。近々四世紀間に（イ）秩序、繁榮、奢侈の衝動の爲に、（ロ）土耳其の膨脹の爲に他の通商路を求むる必要に迫られた爲に、（ハ）文藝復興「ヒューマニズム」の更生、諸大學の勃興に因り地球の圓球なることが知れ渡り東方及西方に進路を開拓し得たる爲に、（ニ）機械文明の進歩特に汽船、羅針盤、火藥の發明の爲に、（ホ）十字軍的將又國民主義的の熱情を以て大西洋上の西班牙、葡萄牙、和蘭、佛蘭西、英國が征服に乗出したるが爲に、阿弗利加、南北亞米利加、濠洲、西亞細亞が次々に全部歐洲化されて行つた。一八九〇年代に至りては支那も亦分割されんとし、其の大勢は既に決して居たのである。此の全世界の歐洲化の鐵濤の如き迫力を理解する者のみ始てよく日露戰爭の深甚なる世界史的意義を把握することが出来る。日本の山東奪取に就ても同一に論ずることが出来る。此の世界の歐洲化と征露聖戰の世界史的意義を解する者のみが唯一眞正獨立黃色人國日本の東洋的使命を日本の東亞大陸に於ける目的を理解することが出来るのである。巴里平和會議、華盛頓會議、國際聯盟諸會

議に於ける支那は、而て又國民黨政權下の支那は毫も此の日本の目的を理解して居らなかつたのである。彼等焉ぞよく我が今次支那事變に於ける聖戦の目的を理解し得よう。特に記憶せなければならぬことは前述の四大帝國主義が常に同時に相も變らず日本の周囲を徘徊して吾人の隙を窺ふて居ることである。此の飽和老成帝國主義を前にして日本は其の聖業を抛擲して歐米勢力の太平洋東亞細亞克服策の結晶たる九國條約の下敷となり、第二流國に顛落するか、夫とも此の既成帝國主義に拮抗し得る爲に世界に於て第二位に下らざる雄邦を狙ふ雄邦主義に乗出すか其の二途の内一途を是非とも選まざるを得なかつた。而て日本の宿命的聖業とも云ふべき世界的東洋的使命が日本に後者の雄邦主義を選ましめたのである。舊き帝國主義と雄邦主義との差は滿洲國に明らかである。

五、東亞又は支那の失地及び準失地

支那は國內を先づ外國貿易に向つて開放することを餘儀なくせらるゝと同時に其の邊疆屬領を徐々に失つて行つた。一八六〇年代に伊犁、「カシユガル」地方に叛亂あり、左宗棠が之を平定する間に露軍の侵入に遭ひ「リヴァヂア」條約に依り豊饒なる伊犁の西部地方を失ひ、五

百萬「ルーヴル」を支拂はしめられた。尤も其の後償金を九百萬「ルーブル」に増して一部の土地を回收することはあつた。安南は漢時代からの朝貢國であつて、明時代には再度完全に征服されて支那に併合されて居た。其の後清朝の威令が徹底せなくなつても依然支那から封冊を受け、朝貢を續けて居た。然るに一八五八年英佛同盟軍が天津北京攻略に乗出した頃に安南に於て佛蘭西、西班牙の宣教師が殺され、兩國遠征軍が同時に侵入し、交戦は三ヶ年に及び柴棍條約で局を結んだ。此の時西班牙は償金を得て退いたが、佛蘭西は同市、交趾支那の三洲及び島嶼を得、後ちに安南と同盟條約を結び之を完全に獨立せしめて支那より引き放し、一八八四年に保護權を設定した。安南の支配は迅速に河内を中心とする東京へ延び、二回の戦争の後一八八五年支那は東京を完全に失ひ、夙に雲南、廣東、廣西を佛蘭西の商業上、鐵道企業上の勢力範圍と認むることを餘儀なくされた。緬甸は昔忽必烈汗の征服した朝貢國であつたが、英國は一八六二年に下緬甸を併はせ、一八八六年に上緬甸を併はせ、一八九〇年「シキム」に保護權を設定した。此の方面で支那が失ふた土地は支那本土の半分にも近い。特に注意すべきは今度の事變に乗じ英佛が蔣介石の弱氣に乗じ廣西、雲南經略を漁夫らんとして居ることである。西藏に對する英國の侵入は未だ其の初期に在るが、英人は之を“virtual protectorate”と呼

び倣し、支那の内亂に没頭して外藩を顧みざるの關係上此の廣大なる地域は累卵の危きにある。新疆外蒙古に至りては唯の“domination”位ではなくて、完全に蘇聯邦の一州に化せんとして居る。日支事變後露支間に相互援助條約が結ばれ、代償として支那は該地域に於ける宗主權を露國に譲つたとさへ傳へられて居る。加ふるに共産軍の占領地域が甘肅、陝西、山西等へ延びて來て居ることを無視するわけに行かぬ。之等の地域に就ては支那人は極めて其の蘇聯化に對し無關心で居るが支那本部の二倍に近き廣袤を有するのである。此の三外藩を合はせて吾人は之を支那の準失地と呼ぶであらう。

西伯利亞鐵道に乗つて「モスコ」から東すれば「オムスク」に着いたとき急に其の地方に蒙古人種が多數居住して居ることに氣附かれる。此の地點以東は支那の失地でない迄も尙之を東亞の失地と呼び得るのである。露西亞の亞細亞經路は一五八一年「コサツク」の移住に依り始められ、六十年間に太平洋岸迄達した。而て黒龍江左岸の地は一八五八年に、沿海州は一八六八年に支那から奪取された。其の中間に於て中央亞細亞の經路も始められ、「オムスク」より「アフガニスタン」に至る迄の一大圓塊は一七一六年より一八八五年迄に獲得された。其の間「ナポレオン」一世と「アレキサンダー」一世との協力に依り進路を「コーカサス」又は

「トルキスタン」に取る印度經路さへ企てられたのである。此の方面に於ける東亞の失地は殆んど支那全土に匹敵して居る。

澎湖島臺灣を支那の失地として掲げることには下關條約から見て無理からぬことである。併し臺灣に關しては和蘭人の占據、鄭成功の占據、分水嶺以東に對する支那支配權の自己否定、日本の臺灣征討と云ふ事實を無視することは不當である。琉球は支那への朝貢國でもあつたらうが、日本への朝貢國でもあつたことを閑却出來ない。朝鮮も亦支那の朝貢國であつたらうが、朝鮮の一部は常に獨立を保ち続け、日本も兩度朝鮮を征服し、時には任那府を置いたこともあり、朝貢を受けて居たことを閑却する理由にはいかぬ。東洋的東亞保全の大義に立つとき、露西亞の全滿洲占領を前に控へて若し朝鮮が全く支那の掌中にあつたならば結果は如何なりしや、誠に寒心に堪へない。日清戰爭後日本は京城に於て露國と勢力を争ひ、朝鮮兩分論や滿韓交換論さへ行はれたことを考ふれば、如何に日本が一葦帶水の半島の歐洲化に對し先手を打つたことが有意義であつたかが知れる。朝鮮は歐洲の一國か日本か其の孰れかに屬する宿命に置かれて居たのである。滿洲に就ても全く同一のことが謂はれ得る。一般支那學者特に國民黨系の人々が滿洲を失地に數ふことは一見論理ではあるかもしれぬ。併し此の地も日本の勢力範

國に入らなかつたら完全に歐洲化され、露西亞の有となり、新疆外蒙と共に赤色合衆國の一邦となつて居たに違ひない。朝鮮の足場があつたから日本は露國と戦ひ、世界史の潮流を一變した。併し日本は長春今の新京に於て露國と對立して睨み合つて居らねばならなかつた。露西亞に十月革命ありしとはいへ、張學良氏があの積弱の蘇聯と戦つて破れしを見れば支那に滿洲を恢復する力なきことは明瞭であり、萬一恢復したとしても外蒙の運命は必ずや此の地に及んで恢復を無意義にして居たであらう。滿洲を支那の失地と呼んで平氣で居ることは廉恥心なきものには出来る藝であらう。併し夫には東亞の大義、孫文が滿洲を日本に委するを以て東亞の秩序に有利なりとしたこと、鐵と血で耕した勞働奉仕者は何かの正權原を持つべきこと、滿洲建國精神の特異性を有して既に治外法權及鐵道附屬地の撤廢を見るに至れること、日本の植民政策の歐洲諸國と異なること、日本人が一切の有色人種と平等に立つ心構へで居ること等を全然無視せなければならぬ。此の點は頗る大事であるから今一度論及されるであらう。

香港、澳門、廣州灣、九龍、上海共同租界等の商業據點、租借地、居留地、勢力範圍等が如何に中國内の中國否中國内の歐洲を構成して、支那の諸都市を歐洲化して居るかは餘りにも顯著な事實であるから吾人は本稿に於ては之に論及せぬ。舊拙著支那の外交財政其の他の著述

に讓ることとして置く。何の道東洋的東亞保全は支那本部の之等の要地からも始められねばならぬ。而て吾人は日本が所謂幣原外交以來近衛聲明に及ぶ迄不平等條約、治外法權、租借地、居留地等につき是正を加ふるの用意を持つてゐたことを高調せざるを得ない。

以上東亞又は支那の失地及準失地に關して述べたことは若し日露戰爭に依り揚げられた世界史轉回の烽火が有意義に繼續すべきものとすれば支那は中南支、華僑多き南方、西方、又は西北方に極めて茫大なる民族主義復活の地盤を有し、日本は海軍力と工業力とを以て之を後援するに止むると同時に、自身は滿洲國との不可分關係を基點として其の東方又は北方に於て東亞の大義を布き、東亞の脅威を抜き、東洋的東亞保全の聖業を戦ひ續くべきである。余の抱懷する而て大學に豫言されて居る中國と日本と共に妥當する具體的國際主義的民族主義は實に斯の如きものである。唯實行の順序としては支那は國內の廓清を先きにすると同時に未だ命脈ある北方乃至西北方に進出し、廣大なる地域を未だ全く失はれざる内に回復し、露國解體の場合其の亞細亞的破片を接收するの體勢を整ふべきである。

以上の失地及び準失地の合計は現在吾人が呼んで東亞と做して居る日、滿、支合計の約二倍に當る面積を持つて居る。即ち現在吾人は小東亞（歐亞として盜取された殘餘の部分）のこと

を誤つて東亞と呼んで居るのであつて、吾人は本然の大東亞 (Greater East-Asia) に復歸せねばならぬ。此處から大東亞主義を導き出すことが出来る。

六、大陸別又は大地域主義の流行

世界の四大成年帝國主義が如何に地球上を濶歩し、世界の歐洲化が如何なる程度に於て實現されて居るかは既に述べた。東亞又は支那の各種の意義を有する大小雜多の失地に就ても既に述べた。民族自決主義と云ふことは久しく聲高く叫ばれ、最近も虎の威を借る狐にも比すべかりし「チエツコ・スロヴァキア」に適用されて同國を三方から削り、獨逸に依存する外最早存立の途なき小國たらしめ、獨、波、洪等の民族主義を稍生氣あらしめたが之等は眞に蝸牛角上の争に過ぎぬ。現實世界に於ては民族主義も地表の大部分に於て積極消極各種の變容を受けて到底圓滿に實施されて居ないのである。斯るが故に伊太利の「マヂニ」が民族主義と四海同胞主義とを併行させ、一國に結構な民族主義は萬邦に取りよい筈のものであるから之を普遍的に四海同胞主義的民族主義として適用すべきであるなど唱道して見ても全く顧みられるよすがはなかつたのである。此の認識の上に立つ吾人はもつと現實に即した協力關係即ち余輩の所謂具

體的國際主義的民族主義に吻合する共生共榮の結合方式を考へ出さねばならぬ。

斯る見地に立ちて吾人の周圍を見廻はす時吾人は其處に大陸別主義とか大地域別主義とか汎何々主義とか云ふ結合方式の廣く適用されて居るのを發見するのである。

南北亞米利加に米國を盟主とする汎米主義の存在し、既に八回の會議を重ねて來たことは人の知る所である。加奈陀は經濟的に從て又政治的に米國に朝宗して居る。擧げて有色人種の祖國への闖入者であるところの歐洲移民の子孫達の居住する此の兩大陸の全地域が感情や利害の共通を意識する様になり、歐洲から孤立して一樣に「モンロー」主義の傘下に立籠り、最近特に加奈陀の米國接近に依り一種の米洲聯盟を發達せしめんとして居ることは注意すべきことである。而て同時に又米國の制覇の徹底を厭ふ意味に於て汎「ラテン」主義の胎動するものあることも之を閑却してはならない。何の道茲に大陸別主義がある。聯盟は此の主義を嘗て相互援助條約案中に收容れ、兵力的相互援助の義務を大陸別に限定したことがある程である。夫は亞爾然丁が瑞典の救援に赴くと云ふ様なことは無理の注文であり、到底實行を期待し得ないからである。斯様な見方を“zoning system”と云ふてゐる様である。歐洲にも既に「ナポレオン」に依り歐羅巴聯合が考へられて居り、「クローデンホーフ・カレルヂー」、「ブリアン」等の歐洲

聯邦案がある。此の歐洲の地域は比較的狭いのであるが民族關係や利害關係が餘りに錯綜し、到底之を打つて一丸となすことが出来ない。夫故に一層細分されて、近親民族たる、瑞、諾、丁間に「スカンデナヴィズム」が起り、相互間を特殊の文化的經濟的最惠國條款にて結付けて居る。其の對岸には露國から獨立した諸國間の「バルト」海規約がある。西歐には佛、白對獨國境を中心として現實の共同自衛を組織化した「ロカルノ」條約加盟國があり、東南には巴爾幹聯合があり、中歐には伯林、羅馬樞軸に現狀不満足國を加へた結盟があり、其の間を人民戰線と國民戰線の分野が點綴して居るのである。以上の事實は如何に競争と協力が不可分にあざなわれて居るかを示すものである。

以上の傾向は各國の「オータルキー」の擴張とも云ふべき經濟「ブロック」の結成とも表裏して居る。既に述べたる四大成年帝國主義が夫々茫大にして鞏固なる經濟「ブロック」を形成し、更に軍擴の線に沿ふて其の資源及工業力を強度に利用せんとして居るのである。之に加ふるに先年の經濟恐慌以來世界の貿易は激減し、通商關係に深甚の影響を蒙り、最惠國條款は其の適用を停止され、割當制度、求償制度、相殺制度、物々交換、三國相殺も考案され、其の實施の成績は著しく政治的結合の線に沿ひ、經濟「ブロック」の政治的「ブロック」依存性を明

證して居るのである。東亞政治盟約なくして東亞經濟「ブロック」を考ふることは不可能である。

以上述べ來つた所に依り吾人は次の結論に到達し得ると思ふ。人間に最も自然的な血族結合は家であり、宿命的な社會的結合は民族國家——夫は事實上積極消極各種の變容を受けたもの——である。併し民族國家は辛ふじて最終的結合と稱し得るものであつて、國際社會が七十に近き國家及國家群より成り、其の葛藤の様を織出してゐることは必然的に超國家的政治結盟を發達せしむる。而して其の強弱は先天的好條件の有無將又後天的なる結盟紐帶の價値に關する認識の強弱に依存して居る。換言すれば國際生活は各國に何が最大の價値を持つ國際主義的、民族主義かと云ふことを思索又は修練に依り發見するの義務を押し附けて居るのである。超越的でなければ餘りにも西洋的な聯盟規約や九國條約や不戰條約に深入りして自繩自縛に陥つた國は國際政治の統一原理が負はせる右の義務を忘れたものである。歐米依存、聯露容共、抗日統一を口號として蔣政權が自國に眞に妥當する國際主義的民族主義を擱んで居たか、夫とも反對に戰略の心算の焦土政策が眞正の焦土政策と成り終はり、該政權も阿鼻叫喚の内に煙滅し去り、新東亞主義の東亞人に依り東亞人を通じて東亞人の爲の東亞と云ふ價値轉換將又新中國の

聯日興邦と云ふ價值轉換の内に臨時維新兩政權の先覺者に依り活路が見出されるか、活劇は今や興味^の絶頂に達して、併も其の歸趨は略明白であるのである。精神分析學者は「The best under the circumstances」と云ふことを云ふ。故に中國學者は中國の消極變容民族主義を如何にして最善に生かすかと云ふことを究明すべきである。而て新中國人の益友たらむことを期する筆者の本稿の目的は北京南京兩政權指導者の爲に日支聯合、日支の二人三脚の目標として如何なる共通最善のものを發見し得るかを探究するに在つて、吾人は今其の中途に在る。

七、雄邦日本の目的

(イ) 國策の意義

餘りにも淺薄で最早過去の存在として葬られようとして居る不戰條約中に國策なる文字があつたが、日本に於ては特に滿洲事變以來國策なる語が頻繁に使用せらるる様になつた。右の不戰條約中國策なる文字に關し佛蘭西の公文は「自己の内部より自ら發する獨立の政策」と云ふ言葉を使用して居るのを見る。余輩は勿論完全を期し得ないが、國策とは一國が國際社會に於て其の現在及び未來の存立を環境上最もよく全うせんが爲に執りたる種々なる措置の根本的指

導方針を云ふと定義したいと思ふ。佛蘭西學者の大政策、獨逸學者の世界政策、高等政策等の語は既に國策の概念に近いものである。再說すれば外交政策を前驅とし、國防政策を中堅とし、財政經濟文化政策を後陣として國際的無政府狀態を克服しつゝ將又國際社會に於ける自然的生存競争を整理し其の怒濤を蹴散らしつゝ前進せんとする民族國家の志向に國策が觀取せらるゝのである。

個人に一年一生の計があり、一家に家計ある如く、一國に國策なきを想像することは不可能である。運動性、感受性、生殖性、新陳代謝性に表現せらるゝ生命は個人にありても民族國家に在りても本質的に増大の法則に依りて支配せられ、此の法則に吻合する動向なしには何等の創造的威力を發揮し得ない。國策の妥當に把握せられないのは民衆が烏合の衆に墮したるの證左である。列強に斯の如き國策の認むべきものありやと云ふに、余輩は先づ第一に英國の歐洲大陸に對する分裂せしめて支配せよとふ傳統的政策を擧示したい。此の英國の國策は今日も尙現實政策の内に躍動して居つて時に「ロカルノ」條約を結ばしめ、時に獨、伊を擧げて佛國を抑へしめ、最近は又其の反對に出でて居る。第二に同國の二國標準と云へる海軍政策も歐洲に關する限り嚴重に維持せられて居る。第三に最大成年帝國主義國たる英國が平和運動軍縮運動

に熱中し、大英帝國の豫備的紐帶たる國際聯盟を支持し、歐洲大陸以外の領土を平穩裡に開發せんと欲し、英米不戦てふ「アングロ・サクソン」連帯に世界の四分ノ一を擁する大帝國の安全の鍵鑰を發見せんとして居るのは英國國策の中核である。米國國策の一面は對歐洲不干渉主義、「カリビアン」海政策、南北兩米大陸の植民地化排除政策を内容とする「モンロー」主義であつて、其の他面は卑見に依れば拉丁亞米利加に對する商業上の勢力範圍維持政策を極東に轉用した機會均等、門戶開放、領土不可侵の主義である。佛國の國策は一般的及び特殊的安全保障の結成に依る「ヴェルサイユ」體制の維持であつたが、其の悲惨なる顛落を前にして萊茵州以西の現状維持を中核とする英佛聯合に序で英と共に對獨包圍政策に轉換せんとして居るのである。英國の「ボルドウイン」は世界的強國は他國の軌道に捲込まれてはならぬと説いて居るが、國策の確立と云ふことは一面自國の安全の軌道を敷設すると同時に他面他國の安全の軌道に迷ひ込み、其の陥穽に陥らぬ用意を藏せねばならぬ。

(ロ) 國家鎮護の第一線は大陸に在り

偕て日本の國策は時として行衛不明になりかけたこともあるが、最近に至つて漸く闡明もされ確立もされた傳統的にして日本國家生活の需要に即し、國防上重大意義ある東亞大陸維持の

政策即ち余輩の所謂東洋的東亞保全の政策である。

日本の大陸に發展し、之を自國の鎮護となさんとすることは第一に傳統的である。仲哀天皇の九年神功皇后の新羅征伐があり、垂仁天皇の三年鹽乘津彦の巴汶に駐劄するあり、神功皇后の攝政四十九年に設置せられた任那府は欽明天皇の二十二年迄存続した。豊臣秀吉の朝鮮征伐は四百餘州をも同時に協和せんとする豪快なるものであつた。明治六年征韓論の否決は國內戰爭を誘致した。明治十五年朝鮮暴徒の爲日本公使館が襲撃されたことがあつた。明治十七年親支那派たる事大黨の日本居留民殺害、日本公使館焼打を契機として日支天津條約が締結せられ、東學黨の亂より日清戰爭を経て朝鮮の一部的指導權を得たが、直ぐに支那に代はりて露國の闖入するありて之れと半島に對峙せざるを得なかつた。

以上に依り朝鮮を單なる清國の附庸國となすの大なる認識不足である所以が了解されよう。加ふるに東洋の見地に立つとき若し清國が對抗者なき宗主權國であり、又は日本が日清戰爭に敗れて居たならば如何であつたらう。露國は勢に乗じて滿洲は勿論半島を席卷して釜山に達し、既に全亞細亞大陸は完全に歐洲化され、世界の歐洲化は完成され、勢の赴く所日本は大八洲に蟄居を餘儀なくされて第二流國として失念され、日露戰爭日獨戰爭もなく、清國は完全に

分割され終はり、世界歐洲化の一使徒に過ぎざる米國が南米への對策を支那に適用して之を商業的勢力範圍となさんと欲して其の極東政策を高調しても決して施す術はなかつたであらう。日清戰爭に於ける日本の勝利は歐洲的世界蹂躪より東亞を救ひ、支那を救つたのである。三國干涉が日本から遼東半島を奪還したのは決して清國の爲東洋平和の爲ではなく、之を日本的東洋的に失はしめて、全亞細亞歐洲化の祭壇に之を捧げんとしたものであつた。而て清廷は此の豺狼群中の領導者露國と日本を目標とする同盟「ロヴァノフ」條約を結んで居たのである。想うに中華民國の外交史は實に對日反逆の「ロヴァノフ」條約締結の連鎖である。吾人は今度こそきつぱりと之を清算せねばならぬ。

日露戰爭は歐洲の完全世界征服即ち東洋民族、東洋精神其の基礎の上に立つ政治制度、經濟組織將又文化の完全滅亡を一步手前に救ひ、最近獨伊に反映した東方の光明を萬古に存在せしめた世界歴史潮流大轉換の聖戰であつたのである。其を以て豆を煮る様な戰爭ではないから明治三十七年には日本の上下は奮起して犠牲を惜まず、幸に強敵を倒した次第であつた。夫でも日露は尙曩日の長春即ち今の新京を接觸點として對峙の形勢を續けた。日本が退いたならば聖戰の意義は失はれる。日本は其處に釘付けされざるを得なかつたと同時に東洋的使命に醒めて

國力培養の爲に畫策することを餘儀なくされ、南滿洲の資源企業は日本の經濟機構に織込まれ、滿洲は開發され、漢人は多數移住して高度の安全と生活とを享樂し得る様になつた。併し其の餘波は我國にも及び資本主義自由主義個人主義は羽翼を伸べ、爲に長くも戊辰詔書が煥發せられた程であつて、米國の滿洲に對する干涉もあり、大陸政策は稍もすれば閑却され見失はれんとし、滿蒙拋棄論さへ高唱された。

併し一貫して流るゝ我が傳統的大陸政策は其の東洋的東亞保全の基調に忠順であつて吾人をして國策の復興を叫ばしむるに充分である。第一に世界大戰の機會に乗じて山東を回復した。日本が東洋的に或は又東洋的東亞保全の見地より之を支那に返還せんとした時に中國は巴里平和會議に於て不正にも歐洲列強特に英米の手より之を受取り、西洋的に之を保全しようとした。茲に山東問題の衝突があつた。記せよ日支衝突は常に東洋的保全と西洋的保全との争であり、他から保全さるゝものに完全の主權は無いと云ふことを。さて巴里に於て英の約束違反、米の妨害と戦ひ、吾人は吾人の主張を通した。今日山東省が日支の自由に合意する儘に保存せらるゝ所以は東洋的東亞保全の空辭ならざるを立證するものである。兎に角山東回復後、未だ全く西洋流の所謂帝國主義より皇道的雄邦主義に轉換せざりし以前の所謂二十一ヶ條約に於て

我方は山東返還の主義を貫くと同時に、露國への對抗上我國の滿蒙に於ける權益を延長し、擴充し得たのみならず、尙英國の揚子江流域に於ける利權と交錯して之を牽制し得るの地歩を築き又は築かんとした。第二に石井「ランシング」協定は門戶開放主義と我が特殊權益及び勢力範圍とを平等の立場に置き、東亞歐洲化の前に不退轉の意氣を示した。第三に華盛頓會議に於て「ルート」決議案に賛同し、九國條約には加盟しながらも、既得權益勢力範圍の保持を聲明した。第四に不戰條約の締結に當りては英國の世界に於ける勢力範圍や米國の「モンロー」主義に關する留保と同一の默示留保を行つた。第五に西伯利亞出兵は徹底せる具體的目的なかりしが故に無効に歸したるも、田中政友會内閣は歐米追隨外交に反對して亞細亞に歸れと叫び、東方會議を起し、滿蒙積極政策に轉じ、鐵道問題に關する交渉を行つた。第六には民政黨内閣は寺内内閣の日支親善説の後を受けて、日支共存共榮、國際協調主義を力説したが、同時に一般權益と特殊權益とを區分し、前者は即ち治外法權や租界や不平等條約は之を時勢の進運に應じ率先整調するも、後者は完全に之を維持せんと欲すると聲明し、支那に對する西洋的把握を緩めると共に其の東洋的把握を強めて行つた。第七に張作霖が保疆安民の政策を拋棄した時に帝國政府は滿蒙治安維持の責任を執る旨を聲明した。傳統的大陸政策の一貫性は茲に立證され

たと信ずる。

夫にも拘らず嘗て日本の爲政者の一部には歐洲文明心醉病あり、英米崇拜の潜在意識あり、知名の一教授をして云はしむれば「我々は其の後餘りにも西洋を追ひかけた結果、我國は現實に東亞の一國であり西洋人と非常に異なつた世界觀を涵養して來たと云ふ重要な事實を忘れた。それが爲に日本は本來の運命的戰友とも云ふべき他の東洋民族から精神的に離れて了つたのである。今日我國の指導的知識階級は中國人、滿洲人、蒙古人に對しても、其の他の亞細亞民族に對しても同類意識を持たないに近からんとした。人種的關係に於ても、地理的關係に於ても、經濟的關係に於ても、政治的關係に於ても日本は東洋諸民族と深く結ぶべき運命的連帶性を持つて居るのであつて、吾人は今より之を明確に自覺せなければならぬ。現在の所では我が知識階級は血縁的に見て遙に遠い西歐に對して寧ろ親しきを持つて居るが、之はよく考へて見ると異常心理である。我等の考へて居る世界の新しい政治的、經濟的、文化的組織を創建する爲には人種的、民族的、文化的に近似する東洋諸民族間に親和關係を確立し、一つの文化的政治的「ブロック」を形成して行くべきである。之が皇道政治哲學の指示する方向である」と叫ばしめて居る程である。斯かる空氣の内に聯盟規約、九ヶ國條約、不戰條約、海軍軍縮條

約、四國協約等が結ばれ、日本も追々に歐米の成年帝國主義の國策の具たる平和運動の軌道に捲込まれ、自ら世界歐洲化の激浪に危く足を濡はれ様とした。されば華盛頓會議後支那關稅問題、治外法權撤廢問題に關する専門委員會に於て東洋的把握を強化する意味に於て我國は著しく對支進歩主義に出たのであるけれども、西洋的支那保全の大勢に捲込まれて、日本國策の眞髓を發揚することが出来なかつた。斯る際日英同盟のほとぼりも未だ全く醒めず、特に滿洲事變後の國際聯盟の會議に於て我國が外交退却戰を戦ふに當り英外相が日本を稍支持したこととて、日本側に於ても當面の外交上機宜の措置として調子を合はせて所謂白人重課を分擔すると云ふが如き論理を操つたのも致方なき次第であつた。併し此の風潮は滿洲國建國の進むに連れ迅速に徹底的に剪除されて行つた。

此の混沌の間に國民政府の成立強化となり、山東問題の後を受けて日支關係は益々險惡に赴き、排日教育は鬱勃として起つた。宋一家を始め、歐洲で生れたり、歐洲で學問したりして、歐米の思想は解つて居ても自國將又東洋の事情を深く認識せない歐米派が權力を握つた。資金僅に百萬圓と小銃何千挺かを赤露より得て廣東より南京に進軍する過程に於て専ら英國と衝突した國民黨の北伐軍は濟南以北に於ては日本と衝突し、果ては中南支の帝國主義を忘れ、滿洲

の沿革を忘れて一路抗日排日に盲進して來た。日本には拒否せられた顧問が聯盟、獨逸其の他からやつて來て、支那の所謂再建と抗日戰備とに助力した。成年帝國主義の結晶であり其の傀儡である聯盟規約、九國條約、不戰條約、軍縮諸條約等に鼓舞せられて最早完全に歐米勢力の傀儡となつた支那は張學良を易幟せしめた後滿洲に萬寶山事件、中村大尉事件等二百餘の案件を發生せしめ、大勢としては一見歐米の國際主義に追隨して滿洲の現状維持に餘念なかりし日本を總退却か反擊かの最後の關頭に追詰め、遂に一九三一年九月の滿洲事變を勃發せしめた。

(ハ) 雄邦日本、東洋的東亞保全

第二十世紀の黎明に於て世界の歐洲化は全支那より南下して京城に及び、日本にして一步退かなか歐洲化の波は釜山迄及び、其の重壓下に日本も土耳其古以東支那に至る列國同様の二流國となり、歐洲の世界蹂躪は完成したに相違ない。然るに今や蔣政權下の聯盟、蘇聯、華府會議等の英米國際主義の傀儡勢力は歐米的支那保全實は東洋的支那の滅亡を以て健全なる國際主義的民族主義なりと誤認し、上下三千年の傳統を守り、原始日本學、渾一東洋學即ち第二期日本學、西洋學を併せて渾一世界文化の學即ち第三期日本學を完成した東方の光明を抹殺し、世界の歐洲化に奉公せんと乗出し來つた。長髮賊の亂は島原の亂に似て歐洲化疾患の急性發作であ

つた。國民黨の東亞大局を亂すや廣東を發祥の地となし、客家の子弟を主役となし、歐米人を顧問となし、三民主義で、三個の歐米平面論理を指導原理となす。宜なり其の南京に來りて滅びんとすることや、彼等は聖教の書を焼き、廟を毀ち、男女共學のみならず、女子の斷髮裸體を獎勵した。東洋精神の彈壓も茲に至つて極まつた。亞細亞、阿弗利加、濠洲、兩米大陸先住民族の先覺にして且保護者たらんことを以て念願とする日本 “The onlygen ninely independent state not of European stock”, は全世界の歐洲化、歐洲白人の全世界克服の大勢を轉換すべく茲に再度敢然として起つたのである。滿洲國の創建が即ち其の結果である。余輩が「國策の復興」(拙著、極東外交論策第一編第一章)を絶叫したのは實に此の時であつたのである。茲に至つて我が日本の東亞的使命従つて又世界的使命は最も明確に且最終的に把握された。最も明白なる運命は我國をして滿洲國を創建して之と不可分關係を結び、日滿條欵優位の原則を樹立せしめた。余が雄邦日本又は雄邦主義を云ひて帝國主義を謂はざる所以は別に理由がある。日本の植民政策は決して禽獸視すべき基督が眼を掛けない異民族の上に加へられずして近親民族に加へられて居る。擄取は吾人の潔とせざる所であらねばならぬ。此の精神は先づ臺灣、朝鮮、樺太の統治に於て實踐に移され、次に吾人が張學良及び其の背後にある蔣政權の意思を全く挫

きたる後の滿洲國建國精神に現はれ、吾人は之を五族共榮の王道樂土たらしむるを期した。夫は赤化、歐洲化の激浪に對する盤石の塞であると同時に皇道精神を滿洲に序で東邦近親諸民族に光被せしめん爲の政治形態の儀表である。見よ日本は實力を以て滿洲を完全に把握し、自然法學上の主權(鹿子木博士は之を哲學的主權と云ふ)を掌中に收めながら、文化秩序發生の第一階梯に於て、嘗て滿洲を王冠植民地として有せられ正權原に近いものを持たるゝ宣統皇帝を御迎へして五族協和の獨立王道樂土としたではないか。今我が將士は赤魔の軍事的思想的脅威に對し胸壁を晒して之を擁護して居る。滿洲國は實に國際政治に於ける最新の創造物である。余輩が雄邦主義を云ふて帝國主義を云はざる所以は、日本がよしや仰がれて東亞全體主義協同體の主位に立つも、唯「フューラー」たるを期して唯物的所有者たるを欲せないが故である。今や滿洲國は康徳皇帝、張景惠總理の下に健全なる發達を遂げ、基礎を鞏固にし、其の經濟的繁榮の前途は洋々春の如くである。夫に連れ日本の武徳はソ聯に對する防備を保留する外文徳と置き換へられ、任意的協力は一時の強制の跡を留めず、迅速に鐵道附屬地や治外法權は撤廢されて行つた。日本なくして滿洲は決して支那のものにも東亞のものにもあらざる事、日本は過重な東洋的使命の達成に必要な氣力と雁行する物質力を放出す爲に滿洲國を經濟的に抱擁せ

ねばならぬこと、明白なる運命は日本の國家鎮護の第一線が黒龍江、興安嶺に置かるゝことを要求することを理解せぬ者は決して日本の良友たるを得ないのである。

其の間に國民黨政權の抗日戦備は進行し、抗日毎日には白熾熱に達し、支那の歐米化、ソ聯化は再度の聯露容共、露支相互援助締約、猶太人「リース・ロス」の幣制改革、銀資金の歐米現送に依て最後の絶頂に達した。此の支那がソ聯と共に滿洲國を馬蹄形に包圍して失地回復を叫ぶ以上衝突は來らざるを得ない。日本陸軍は豆柄を以て豆を煮る近視眼者たるの譏を免がれんと欲して躊躇逡巡し、爲に莫須有の追隨戦争に引込まれ、長期抗戦の矢表に立つに至つた。對支自由主義に邁進した幣原外交への謝禮が最大多數の抗日傳單であり、蘆溝橋事件前兩三年間の對支新認識論への謝禮が今日の大事變であること程此の聖戰の意義を明徴にするものはない。決戦は西洋的東亞保全即ち東亞滅亡と東洋的東亞保全との間に戦はれて居るのである。大和民族は明白なる運命の前には殉國を忘れない。我が將兵は赤化、歐洲化の大勢が支那の中原に築いた前進陣地に鐵濤の如く寄せて居る。外國將校の鬼才を以て築いた上海南京の砲壘も相次で陥り、漢口、廣東、海南島、南昌も我が掌中に歸した。

さはれ支那將兵の抗戰能力は聊か賞讃に値ひし、誤まれる方向に其の民族主義を昂揚して、

妥當する具體的國際主義的民族主義を選まず、何等の創造なき焦土戰略に之を消耗し去るは東亞全體の爲惜しみても尙餘りがある。*"not wisely but too well"*と嘆息するより外はない。日本は斷乎として國民黨政權を打倒し、北支臨時政府、中支維新政府等の同志の任意的協力を迎へ、明白なる運命の擔當に堪ふる雄邦日本の完成と東洋的東亞保全の聖業に向つて邁進して止まないであらう。其の方略一般は拙著雄邦日本の東亞復興第一編第三章等に詳しく述べて置いた。唯一言附言したいことは最も望ましいことは有難き實現至難な事柄である、智略が缺けて居れば特に然りと云ふことである。

八、日、英、米相合はず

世に蓋然的假想敵國關係の顯著なる日ソ關係の如きは稀である。國境に張られた鐵濤の如き軍備、乾盆子事件、張鼓峰事件、滿蒙國境事件等數百回に上る國境衝突事件、領事館閉鎖、樺太に於ける石炭石油利權開發に對する妨害等は其の標徴である。東亞の綏靖、東亞の復興には唯一つの絶對的先決條件が必要である。夫は政治學原理が約束するソ聯の再革命を契機とするソ聯の解體であり、極東闖入者「コサツク」兵達の東歸である。余の東洋的東亞保全は支那全

域の赤魔一掃は云ふに及ばず、ソ聯に依る東亞擾亂の禍源を斷つことを要求して止まぬ。

世界の平和には聯盟の如き空想的組織を以てして、海軍問題に「チエツコ・スロヴァキア」を介入せしむる如き滑稽を演ずるよりも、單刀直入重役會議、巨頭會議を開く方が増した。戦前の歐洲協調は歐洲重役會議であつた。故に「ムツソリニ」が聯盟を尻目にかけて英、佛、獨伊の四國協定を提唱したのは道理あることであつた。今度「チエツコ」問題に關し「ヒットラー」の招請で四國會議が開かれ、問題が平和裡に解決されたのは現實主義の勝利を語るものである。（拙著、極東外交論策第三編第十三章歐洲の危機と列國首領の大計畫參照）余輩は伊太利首相の提案より一年以前に同様の根據から太平洋國際帝國主義を提唱して置いた。之は小乘的ではあるが太平洋印度洋の三大海軍國たる日、英、米が「*live and let live*」の原則を承認するならば太平洋の平和は保持せらるべしと説いたものである。（極東外交論第一編第九章）實際此の提案だに容れられたら必ずや今次の如き不幸なる事變の爆發を見ずに平和的變更も或は可能であつたかも知れぬ。然るに英國は日英同盟を解消し、英米關係至上主義に傾き、滿洲事變の時は帝政露國に對し不干涉を約束した因縁もあり、聯盟に依る外日本の行動を掣肘はせなかつたが、南京事件後の十年間に日英の一方が笛を吹くときは他方が踊らず、覆水は盆に歸ら

ざることを立證した。日支大事變に當つては英國は讓歩を以て誘ひ、利を啖はして支那を愈々自己權益擁護伸長的手段となし、廣東を策源地となし、我方の犠牲に於て自己藥籠中の支那政權を擁護せんとするものゝ如くである。吾人は差當り英國に向つて世界四分の一の大英帝國經濟「ブロック」で満足せよと云ふの決して無理ならざるを信ずるものである。先般英首相は大國は小國の爲し得ざることを爲し得ると云つた。願はくは英國が世界の一層の英國化、歐洲化特に支那の政治的、經濟的、文化的勢力範圍化を願はずして、今より道義世界の實現に協力し、「ハウス」大佐の最少限の平和的變更に同意せんことを。

義和團事變に際しては日本は歐米と清國との間に狭まり、慈眼衆生を視る底の態度を以て清廷の感謝を買ふた。當時日米の政策は完全に一致し、日本が干戈を取りて滿洲朝鮮に占據した露國に宣戰したる際米國は日本に對し援助を惜しまなかつた。當時「ルーズヴェルト」大統領は我が使節に對し世界の進運に依り取殘されんとする亞細亞諸民族の爲に日本が指導者又は保護者たらんことを要望し、日本「モンロー」主義が印度、安南、「フィリッピン」、香港其の他歐米植民地を除ける全亞細亞大陸に對する歐洲の蠶食的氣運を除去し、亞細亞民族の橋となり、同時に機會均等、門戶開放主義を維持せんことを要望した。之は東亞に於ける日米の目的が大

乘的に一致して居ることを立證して居る。然るに右の大乗的一致は實際上の適用に當つては小乘的の不一致として發現せざるを得なかつた。夫は米國が世界を一週して變容されて來たと云へ、矢張り世界の歐洲化、亞細亞の白人商業經濟植民地化の代理人に過ぎざるものであり、右米大統領の聲明が決して日本最良の爲ではなく、亞米利加最良即ち開明的利己主義肯定の爲なりしが故である。さればこそ米國は「ポーツマス」會議斡旋の代償として日本が滿洲に於て門戸開放、機會均等主義に把住し、右地域を支那に還附せんことを期待する旨を開陳し、小村全權の承認を得るに垂んとした程である。併し此の米國の要求こそは極東の現實に對し全く目を掩ふものであつて、米國に對し其の墨西哥より「パナマ」運河迄に適用しつゝある「カリビアン」海政策を、從て又「モンロー」主義を拋棄せよと云ふよりも何倍か無理の要求であつて、全く出來ない相談である。蓋し日露戰爭は露國の徹底的敗北に依つて局を結んだものでなく、露國は依然として長春以北の北滿に蟠居して居り、日本が退くならば、日露戰爭の結果は全然抹殺されるからである。從て「ポーツマス」條約締結及び其の善後措置としての北京條約締結直前迄は日本は米國の所謂開明的利己主義の忠實なる使徒であり得た。併し其の以後に於ては日本が支那に於ける最大の侵略者たりし露國の權益の一半を相續して其處に居据はらねばなら

なくなつたから米國の極東政策は茲に矛を逆にして専ら日本攻撃に向つて來た。遠方の米國人が滿洲に古來主がなく、夫が諸民族の衝突地點であり、今や殘された東亞の歐洲化即ち東洋滅亡と東洋的東亞保全の決勝點になつて居ることを解せないのは是非もないことだ。尙又以上の如くに大乗的一致の下に小乗的の不一致を招徠した實際的原因は何處に在るかと云へば、彼の米國が太平洋彼岸の國である關係上太平洋沿岸の海港の問題としてのみ門戸開放主義を提唱し、所謂太平洋關係と云ふ一面將又沿岸商業勢力範圍と云ふ一面のみを見て、東亞大陸に對する歐洲列強の陸上背面から來る政治的、文化的、經濟的侵略には殆んど風馬牛相關せざるの態度に出でたるに反し、日本は大陸に足場を有する隣接國として此の大陸背面より來る運動特に露國が北滿外蒙新疆等に於て、又英國が中支以南及び西藏に於て支那を危殆ならしめんとする運動に對し絶大の關心を示し、之に對して備へざるを得なかつたからである。一九〇六年に於ける英國の西藏侵蝕、一九一三—一九一五年露國の外蒙侵入、一九一四年佛蘭西の鐵道鑛山利權取得に對し米國が何等の措置に出でざりしことは餘りにも米國の日本抑制の熱意と不調和な對照をなして居る。此の觀點將又利害關係の差異は滿洲事變を経て今日の日支大事變に及ぶまで終始一貫爾後の日米葛藤の背景となつて居る。

白人と異なり亞細亞人が人種平等權を認められず、日本の人種案が聯盟で否定され、世界全部より閉出しを喰ひ、東亞は東亞内部で人と經濟との調和を得なければならぬ時に結局世界歐州化の代理人たる米國は白人の侵入は満足をして迎ふるか、さもなくば雲煙過眼視し、右侵入を迎へ撃たんとする我國を掣肘するに専らである。其の結果は世界の歐州化に拍車を掛けるに過ぎざること火を暗るよりも明である。凡そ利害關係なき者の贅澤なる介入は世界平和に有害なること“*Young, Powerful America*”の記述する通りである。我國の大陸國策は東亞の平和に有害なる米國の領導權を斷乎拒否し、西太平洋を甲鐵艦で埋めるに決した時に始めて確立した。吾人は米國が「カリビアン」海政策と「モンロー」主義の羽翼下に收められた兩米大陸即ち世界の三分の一で満足せんことを世界道義の名に於て要求する。九國條約と六割海軍と併行したとすれば、復興せられたる大陸國策と十割海軍とは又併行するのである。不屈の意思は是非とも鐵の支柱を持たねばならぬ。

夫は兎に角吾人が滿洲事變直後に以て機宜の現實外交策として提唱した太平洋國際帝國主義——勿論日本は未だ帝國主義などとは云へぬ子供であつた——は顧みられなかつた。日本が東洋的東亞保全の明白なる運命に向つて進んで行くとき英米は吾人と動向を異にする立場にあつ

て、可能的敵國でない迄も味方でないことは之を認識せざるを得ない。吾人が祖國の彈丸國家化を叫ぶは之が爲である。尙吾人には大陸國際雄邦主義の用ふべきものが残されて居る様である。

九、大陸國際雄邦主義

東亞を除く世界歐州化の一分子たるやも知れざるも、合はせて世界の四分の三を所有し之を閉鎖する英、米、佛、露と全く立場を異にし、全く又は殆んど無一物に近い雄邦があつて、よく我國を理解して呉れて居る。夫は伯林羅馬樞軸に繋がる獨逸と伊太利とである。前者は露國と前後して山東省に據つたけれども、世界大戰の際東洋的東亞保全の祭壇に之を捧げて退却した。伊太利は利權競争時代三門灣の租借を希望して容れられず、過度に強くないと云ふ理由で太平洋から閉出しを喰つて居る。若し今迄に阿弗利加、濠洲、西亞細亞、南北兩米大陸で恵まれず、従て萬一東亞が歐州化し分割されて仕舞ふべき場合に此の東亞に於て代償を得べき國は衡平に見て獨、伊兩國であらねばならぬ。併し夫が日本の根本國策と相容れぬとすれば他に何等かの善き方法を考へねばならぬ。

世界に於て獨、伊程我國の立場をよく諒解して居る國はない、又吾人は獨、伊の立場を眞に諒解し、之に同情する事が出来る。蓋し三者は共に持たざる又は殆んど持たざる國であるからである。滿洲事變は「ヴェルサイユ」體制、聯盟體制に致命傷を與へ、世界歴史に方向轉換をものがあつた。忽ち聯盟は醜き屍となり、「エチオピア」は伊太利に併合され、「ヴェルサイユ」條約、「ロカルノ」條約等は紙屑と化し、軍縮秩序は解消され、墺地利、「ズデーテン」は獨逸に併合された。滿洲國は獨、伊之を承認し、「エチオピア」は日、獨之を承認した。

支那事變に當りては獨、伊は最も我國に好意を寄せ、獨逸は軍事顧問を支那より召還し、支那に於て得つゝある商業上の利益の一部を犠牲に供して惜しまず、我國の爲に斡旋さへして居る。伊太利も大體同様で我國に最大の好意を寄せ、日本が國力を消耗せずして此の事變より立ち揚らんことを要望して居る。此の二國の態度はソ聯は云ふに及ばず、英佛の蔣政權援助と全く對蹠を爲して居る。斯る情勢の裡に日、獨、伊、滿防共協定が結ばれたことは決して不思議ではない。一見之は防共警察陣の協力に過ぎないが、露國の操る人民戦線の活躍を前にして意義頗る重大で、軍事協力に迄發展し得る等多大の可能性を含んで居る。國民戦線將又全體主義

國家の國際結盟は人民戦線の脅威に對抗の必要上生れたものではあるが、其の量の小なるに拘はらず、質の點に於て歐亞大陸の四隅に其の威力を感じしめて居る。

余輩が舊著國際軍備縮小問題に於て取つた立場は、軍備が生命躍進の標徴で、世界歴史を創造する第一原因であると云ふこと、軍備や戦争を論ずるには量よりも質の方面、心理學の方面が重要であると云ふこと、米國は門戶開放主義の爲に戦ふことは出来ないと云ふこと等であつた。全體主義を通して歐洲の強國になつた獨逸、伊太利樞軸の前に現状維持國英佛の山と積まれた軍備が何を爲し得たか。見よ現状維持國の國策の具たる聯盟、「ヴェルサイユ」體制、「ロカルノ」條約、相互援助條約は潰え、英佛は萊因河と「アルプス」の西に於て將又海洋の彼岸に於て其の所有財産を保持出来るかも知れぬが、彼等は其の東に於ては最早發言權を持たない。伊太利には二十萬弱の混血獨逸人があるだけだから獨伊は提携出来る。建國元勳の聲に聞き聯邦組織を採用し得なかつた「チェツコ」は此の既成事實の前に戦はずして敗れ、兵を解いて窮鳥として獨逸の懷中に飛込まざるを得なくなつた。巴爾幹より「バルト」海に及ぶ大小十三の民族は獨伊樞軸に靡き、國民戦線一團の熱火は歐亞に跨る世界六分の一の巨軀を擁する二十世紀の大病人に殺到するより外行き所はない。最近四國協定の結果獨伊が英佛に餘りに接近

して其の新世界歐洲化の形勢が日本に不利な影響を及ぼすかも知れぬと案する人もある。併し英佛が意義ある犠牲を甘受せない限り彼等は獨、伊に向つて明白なる運命に従つて東進せよと云ふ外なく、獨伊は多少立場を異にすれど望むらくは波蘭以下を誘導して六十四餘種の異民族を世界六分の一の地域に幽閉した生地獄に汜濫咆哮する外はない。獨逸は「バルト」海に、波蘭は大波蘭の遺跡に、伊太利は「アラビア」民族に接する地域に雄邦主義を布き、「ヒツトラ」總統の豫言人類救済の悲願を成就すべきである。目前の現實世界は畜生界に墮ちた露西亞の解體のみが道義世界、真正平和の建設の捷徑であることを指示して居る。

余は教外別傳不立文字の原則に反して日本中道全體國家主義を説いたが日本こそ全體主義の祖國である。王道が聖智の指示する經世濟民治國平天下の道であるならば、皇道は沒我を實踐しうる家族國家に於ける本質的な家長政治である。歴代御詔勅に民を視ること子の如く、義は君臣にして情は即ち父子の如しと仰せられてある所以であり、仁徳天皇の民の富めるは朕の富めるなりとの御聖諭ある所以である。日本は實に萬世一系の組織化せられたる「Fuehlerstaat」であるのである。吾人は歐洲に於ける吾人の子弟を見捨てるわけに行かぬ、加之若し東亞をも分割して歐洲化の祭壇に供すべしとすれば道義上其處に日南の地を得べき權利者は獨伊であ

る。而て我が東亞復興の國是將又小東亞より大東亞への運動が之を許さないとすれば吾人は獨伊其他と國民戦線の提携を強化し、世界の最大病人の屍が分解するのを促し、無理はあるが獨伊の雄邦主義を成就せしめねばならぬ。東亞の脅威剪除、東亞復興の契機と東邦聯合の使命とは近く其處に發見されるであらう。改めて大陸國際雄邦主義を提唱する所以である。さりながら日本は獨力を以て其の東洋的使命から負はされた大偉業を完成するの覺悟と方略とを持たねばならないこと勿論である。

一〇、東亞聯合の妥當性

以上吾人は抗争と協力とが併行する現象にして吾人は平和と繁榮との爲には最も妥當する具體的國際主義的民族主義を選まねばならぬこと、超越的抽象的國際主義を具體化した聯盟は成年帝國主義の傀儡にあらざれば即ち無用のものたること、四大成年帝國主義が世界の三分の二を掩ひ、世界歐洲化の波は最早東亞の一部即ち小東亞を剩すのみとなり、土耳其、波斯、「アフガニスタン」、支那等が等しく不完全獨立國となり、東亞又は支那の失地が累々として到處に横はり今や外蒙、新疆、西藏等の準失地、加之廣西、雲南等も亦危からんとして居ること、

大地域別主義起り、經濟「ブロック」が政治「ブロック」の線に沿ふて流行して居ること、有色人種の希望たる日本の目的が東洋的東亞保全の柱としての雄邦日本を完成し、世界歐洲化、東洋抹殺の潮を退くるに在ること、滿洲は諸民族の“conflicting point”としてのみ存在し來り、十九世紀末葉より世界二大潮流の衝突の巷となつたが、此處に滿洲國が生れて日本の東洋的使命達成の保障となり、礎石となるに至つたこと、日本が自然法學上の主權を自己否定して康徳帝を戴く五族協和の王道國家を創建し、東亞諸民族結合體の縮圖となしたること、吾人が漸く東邦の相剋解脫を實現し得て、大東亞の黎明を望み得るに至りたること、大洋國際帝國主義が東洋平和に妥當せず、反つて、大陸國際雄邦主義が吾人の支柱となれることを説いて來た。以上に依て吾人が世界地表の十二分の一、世界人口の四分の一を占むる支那が日本を假裝敵となし、世界歐洲化の走狗となるを容認し得ない所以、將又四大成年帝國主義國や國民黨政權の考へて居る西洋的東亞保全と云ふ矛盾語を容認し得ない所以が明瞭となつたと思ふ。

卑見に依れば後章に述ぶる所の如く新民主主義とは復古的創造的進歩と云ふことである。進歩發達が有意義な創造である爲には常に根源に遡つて反省せなければならぬ。伊太利の「ピサ」の塔は土臺を逸れて居るから更に幾層かを築いたら倒れるに違ひない。國民黨政權の倒れる所

以も近く其處にある。だから國際政治の領域に於て明德を明らかにすると云ふことは東洋本然の意識に立戻つて眞に妥當する具體的國際主義的民族主義を共に把握することである。日本の政治は家族國家に相應はしき萬世一系の組織化せられたる總帥の皇道實踐の過程である。日本の經濟は日本中道全體國家主義であつて百年一日の如く戰爭に堪ゆることが出来る。日本の文化は渾一東洋學、渾一世界文化の學と一致する日本學である。此の日本は犠牲に犠牲を重ね修練に修練を重ねたる上滿洲國と云ふ圓覺に到達したのであつて、此の上とも明德を磨かねばならぬことは勿論だが、最早根源に遡つて反省すべき何物をも剩さず、唯中國に力強く働き掛け、國民黨政權打倒に邁進し、今や南支を突き、臨時維新兩政權等の強化融合に依る新中國の創造を期するのみである。然らば吾人が獲得し得たる勳共、滅黨、聯日興邦を目指す新政權の協力者は勿論之より吾人が獲得し得べき同志の把握すべき具體的國際主義的民族主義の覺信も滿洲國と云ふ儀表以外に行く處はなく、其處で我々を待つて居る復古的創造は東亞近親諸民族の聯合以外の何物でもあり得ない。左傳に親仁善隣國之寶也とある。國が東洋抹殺の迷路より出でて東亞共榮の大義に立つに至るならば民は今迄とは似てもつかない發展的大東亞の希望に輝く新民たらざるを得ない。東洋意識を失はない限り何人も希望する東洋の恒久的平和、東亞

の復興期して待つことが出来る。東亞の諸邦は民族として人種の近き點、文化の共通なる點に於て近親民族である。加ふるに其處に地理的單一性があり、經濟的單一性があり、日本の需要する八億圓の綿、二億圓の羊毛等を大陸から入れ、日本製品を輸入する文だけでも東洋民族の生活は飛躍的に向上出来る。大地域別主義、經濟「ブロック」横行の世の中に於て小東亞に一體性を發揚して、大東亞を戦ひ取るほか方略の用ふべきものは斷じてない。國際政治に於ける全體主義は今後生るべく約束せらるゝ東亞宿命協同體に之を適用する外決して用ひ様はないのである。但世人の時に唱道する東亞聯邦は、右協同體の文字と等しく過度に單一性を發揮し、内政の混淆を來す虞あり、任意的協力の全支の内部より流露するに至らざる際未だ之を説くべきでない。

筆者は東亞聯合又は東邦聯合 (association) の約法の如きものを起草することを後章に譲るであらう。併し二三の喫緊の綱領に丈け觸るゝならば東邦聯合は一切の東亞諸民族の獨立又は高度自治を有するものの團結より成り、首相會議又は最高政治會議と經濟理事會と文教理事會とを設け、東亞政策大東亞政策及世界政策、經濟提携特に東亞計畫經濟の樹立、文化提携を夫々の任務とすべきである。國境は之を民族、經濟、文化の超ゆべからざる金城鐵壁とはなさず

して之を精神化し、規約第十條の現状維持と第十九條の現状調整とを共に生々發展さす様に工夫し、關稅同盟でなき迄も特惠關稅を布き、經濟單一體たることを發揚し、大東亞防禦經濟を組織化せねばならぬ。國防に關しては自衛の國際化と行かざる迄も、自衛の聯合を計り、共通國境の兵備は之を節約し、東亞聯合の他と接觸する地帯に國防の重點を置き、中國は西南、西北の邊境を固め、第二十世紀中葉の課題としては國內の廓清及び準失地の奪回を以て主眼となし、日本は滿洲國と共に其の東方及び北方を固むべく、其の中間に防共合作地帯を設くべきである。此の體制はソ聯の脅威を撃退し、萬一此の二十世紀の大病人の解體の場合は亞細亞的破片を接收するに資すべきものである。海軍に關しては現在の實狀に則し東亞聯合の西太平洋上の海防を日本に委任する方式を採用し、爾餘の國々が軍艦又は資金を以て之に協力することが經濟的且効果的であると考へる。勿論關稅監視や、海上警察隊の組織等は内政問題として別個に處理せらるべきである。大陸大洋體制の完成と大東亞の實現と乾坤第一邦たる日本の黎明とは同時不可分の逃避し難き大試練であらう。其の後に於ては豆箕相煮るの今日と異なり、大東亞の威信は八紘に振ひ、内部の抗争は絶へ、經濟は殷盛に、文化は向上し、東亞の黄金時代を現出するに相違ない。之が東亞的治國平天下、東亞的經世濟民策の最高峰でなくて何であら

う。其の彼岸は世界新秩序之である。

東方諸邦は其の迂濶なるが爲に、世界に何事が進行しつゝあるかの實相を掴むことが出来ず、世界歐洲化の道具に使はれ、其の外來勢力の爲に分割され、搾取され、國際政治の客體として取扱はれて今日に至つた。其の最後の悲劇が今日の日支大事變である。鐵血の洗禮、上下三千年の歴史に比疇なき憂患に遭逢した日本は愈々天命を覺り、今や東洋的東亞保全、東亞復興、國際政治の主體としての東亞又は東邦聯合の結成、其の支柱としての雄邦否寧る乾坤第一邦日本の完成に邁進して居るのである。吾人は大陸の同志からの理解ある協力を望む資格あるを信じて疑はない。

第五章 大東亞主義宣言

一、世界の歐洲化

今日吾人の眼前に展開して居る極東の出來事の眞意義を把握する爲には今日の世界が現在如何なる環境に在るかを確知する必要がある。而て其の際吾人が是非共認識せなければならぬことは世界の歐洲化と云ふことである。"europization of the world"と云ふことである。

植民史を知る者は何人も熟知する如く新大陸發見を始め濠洲、印度、西太平洋への海路等皆な西班牙人、葡萄牙人に依つて先鞭を附けられ、西班牙の無敵艦隊が後進國たる英國の艦隊に破れた一五八八年迄は歐洲を除いた世界は羅馬法王の判決に依り二分されて西班牙か葡萄牙に尠くも觀念上屬して居たのである。歐洲人口の約五倍、歐洲面積の約十倍は觀念上歐洲化されたのである。海賊事業から着手して行つて前二者と競争して其の開拓した地域を相續したものが即ち和蘭、佛蘭西、英國であつて、英國は此の和、佛兩海軍をも破つて世界植民事業の集大

成されたものゝ相續人となり、世界人口の四分の一面積の四分の一を含む超大飽和既成帝國主義を建設したのである。其の傍に北歐大陸から亞細亞大陸の北半を横斷して太平洋に到達して行つた阿爾然丁に至る迄の地域がある。此の北米以南の米洲を全世界から引去つた残り即ち歐洲化された世界の貌である。長髮賊の亂の背後にも島原の亂の背後にも賊徒を思想的にも經濟的にも操縱する西力があつたのは怪しむに足らない。今國民黨の政權は此の世界大運動史の見地から見ると全く長髮賊と同一立場に在る。孫文一派の客家連中が廣東より歐米精神を抱いて其の傀儡勢力として起り南京に於て亡びんとするは歴史は繰返すものと云ふべきである。知らずして歐米外來勢力の傀儡たる蔣政權既に然りとせば、二度英佛軍に一度日本に破れたる日露戰爭直前に於ける清國が最早完全なる歐洲國際政治の客體と爲り終はり、觀念上の植民地と爲して其處に阿弗利加に於て發明せられたる門戶開放主義が適用せらるゝに至りたる全く故ある哉と云はねばならぬ。併も中國知識人は此の主義を以て救世主となし、日本は其の下敷となりて懊惱す。余輩は東洋人本然の意識より此の事態に對し戦はざるを得ないのである。日本も亦以上に近い雰圍氣の内に生存して居た。西力東漸史の著者は右雰圍氣を反映して我

國に於ける尊王攘夷前後の事情に關し實に次の様に述べて居るのである。

日本が鎖國主義を執りしより雄大なる航海事業、盛大なる海外貿易は衰微し剛健なる航海者、大膽なる冒險家其の跡を絶ち、世界的生活、世界的交通、世界的知識は茲に截斷せられ、桃源洞裡に醉生夢死するもの茲に二百餘年。起て四境を見れば即ち英、米、露、佛の軍艦日本海上に游弋して來る、二百年鎖國の夢、攪一攪して國を開きし日は既に是れ世界強國に於ける一戰卒と爲りし也。

されば日本が駭々たる西力東漸の前に累卵の危きに在つたことは何人も肯定し得る所であつて、實際日本が最初に外國と締結した條約は不平等條項を含み、治外法權を容認したものであつた。其處で我國は尊王攘夷より開國進取に轉じ、其の結果たる變法自強は充分成功して既に日清戰爭前に平等條約の締結に成功したのであつた。斯て六大洲中唯一の例外として唯一眞正獨立黄色人國家たる日本が坤輿上に登場したのである。世界歐洲化の風潮と此の日本の特異性と夫から生れて來る問題と日本民族が自覺して把持し來つた東洋的使命を解する者のみが現段階に於ける日支事變の意義を知ることが出来る。

二、無益なりし六億大衆

九分九厘迄歐洲化された世界から北米合衆國乃至亞爾然丁迄の獨立的舊植民地を差引いたものが即ち今日の歐洲支配力の限界を示すものである。従て國際政治の領域に於て歐洲の世界指導力は絶對であるとも云ひ得る。米國の「モンロー」主義は此の支配力から賢明に逃避する爲の信號と考へることに依て正解されるのではあるまいか。さてこそ米國は國際聯盟には加入せず、汎米會議を牛耳つて満足して居る次第である。

實際英國を始め其の他の歐洲列強が外交場裡に馳驅するや過去三千年間の生ける歴史の經驗を總動員して虚々實々、生馬の目を抜く様な働きをやる。「ナボレオン」や「ピスマーク」や「ベルンハルディー」が外面に紳士らしさを装ふて巧に我利を擁護する英人の老獪さを指摘して居るのは既に世人の熟知せる所である。

其の一表現として國際平和運動を擧げることが出来る。海牙平和軍縮會議は日露戰爭と西伯利亞鐵道建設に疲れた露國が獨塊の軍擴特に新式大砲採用を阻止せんが爲に仕組んだ芝居であつた。英國が之に賛成したのは既に飽和状態に達せる世界地表の四分の一を蔽ふ新開地を開拓

する時間の餘裕を得んが爲めであり、米國が之に賛成したのは以て「モンロー」主義徹底化の機會を掴まんと欲したのである。國際會議の如きものは比々皆然りである。

日本政府は「チエツコ」兵の本國歸還を助けると正直に揚言して西伯利亞に出兵したのであるが、其の際聯合國たるの理由を以て米國も日本海を越へて西伯利亞に共同出兵した。彼等の意圖は明瞭に豫め日本の野心を挫き、西伯利亞出兵を無意義に終はらしめ、牽て日本を脅威する極東露領に彼等の傳統的極東政策たる不可侵と門戸開放とを適用せんとしたものであつて、彼等は華盛頓會議等に於て此の趣旨を聲明して居るのである。其の狙ひ所の適確なることは到底日本政治家の比ではない。

此種の國際會議に平和だの、人道だのと云ふて狩り出されて出て行く有色人種の行刑悲慘なる滑稽事はないのだが、關係者は至極眞面目で戦々兢兢々として居るのが常である。巴里平和會議以後には所謂二十一箇條條約の後を受けて、支那と日本とが地頭の前に出た百姓の如くに相争ふたのである。勿論支那は原告を氣取り、日本は仇役の被告として被告席に着いた。腕節の強い者の常として立派な理屈があつても口はきけないのが常である。而て其の際大岡越前守又は大法官の席に着くのが英米等である。此の訴訟事件は實に巴里會議に始まり、華盛頓會議

に於て高潮に達し、聯盟の諸會議を経て滿洲事變後の日本の聯盟脱退の日に至つて漸く終息した。國際聯盟關係、太平洋關係、第二「インターナショナル」關係等に於て、日、支は常に特殊性を滅却され、世界一般即ち歐洲化された世界の普遍抽象原則他律秩序の下敷になつて苦悶を續けて來たのである。

世界的發明家「エヂソン」は其の座右の銘として何故幾百萬の大衆は零に等しくして、唯一人のみ顯はるゝかと云ふにそは前者が毫も思索せざるが故であると云ふ一旬を書留めて居たと云ふことである。然らば國際政治の客體に成り終つて自から覺らず、何時も普遍原則の中に自決主義自己肯定を沈没させて來た、東亞六億の大衆と云ふものは零にも等しい存在でなかつたか、吾人は頗る疑なきを得ない。門戶開放主義は阿弗利加植民地に適用せられた主義である。其の主義を太平洋彼岸の米國から押附けられて唯々諾々之に降伏し、過去四十年間之が爲に塵芥の如く翻弄されて、今日に至るも尙息まないと何事であるか。門戶開放主義は東亞六億の大衆が零であつたことの最高の記念碑である。聞くが如くんば日本外務省は今度こそ米國の質問に答へて此の記念碑に又も貢物を納むることを罷めんとして居るのである。

三、歐亞と東亞實は小東亞

亞細亞と歐洲とは一大陸塊を構成して居るのであるが、如上の亞細亞歐洲化の結果として歐亞「ブロック」が生れて來た。外務省にも歐亞局があつて、東亞局と對立し、香港、印度支那以西及び西伯利亞を歐洲の延長即ち歐亞として取扱ひ、其の殘餘を東亞と云ふて居るのである。實際印度は文化的には明瞭に東洋的であり、従て大乘佛敎は日本にのみ其の跡を垂れて居ると云ふ有様ではあるが、政治的經濟的には西北から侵入する希臘、波斯、回々敎、「アフガニスタン」等の影響を蒙つて西洋史の延長になり切つて居る始末である。歐亞に跨る蘇聯の屋根の下、土耳其より支那に及ぶ迄満足な獨立國は一つもないのである。

斯る狀勢の下に於て吾人は極東とか、東亞とか呼び、最近は流行語として、新東亞、東亞の新秩序、東亞再建等の言葉を聞くのである。而て右は孰れも漠然支那以東を呼んで斯く云ふものゝ、實は日本、滿洲國、支那本部を意味するに過ぎない。即ち世人の誇りを以て斯く呼ぶ東亞は實は小東亞に過ぎないのである。

此の小東亞は地圖を一見して解る通りに露西亞に完全に抱きかゝへられて居る。而て蘇聯は

其の構成要素たる一邦として最早完全に赤化された新疆外蒙を取込み、其の勢力は支那共産軍と合體して支那本部に氾濫して來てゐる。西藏も英人の認めて以て事實上の保護國と爲す所のものである。斯の如く支那の不可侵、支那の門戶開放と叫びながら奥地からの侵略が駭々として支那に延び、併も夫が全く不問に附せらるゝ所以は何か。蓋し米國と雖も世界歐洲化の殘滓としての存在に過ぎないからである。斯る立場にあればこそ米國人は海上から前記の歐洲化の形勢に反對して立向つて行く我國の妨害は百方之を爲すけれども大陸背後からの侵略には毫も介意せず、結果に於ては我國の東洋的東亞保全を妨害しつゝ西洋的東亞保全を助け、其の傀儡となつて居るのである。斯るが故に米國と我國との立場は決して兩立することが出来ない。日本が渡洋進攻の太平洋彼岸から來る脅威に對して晏如たり得るのは、唯實力十割の海軍ありて彼等の狩獵の目的と爲り終らないからである。日露戦争は既に遠い過去の歴史である。其の折すら英國は一兵と雖も極東に兵力を動かした次第ではなく、唯普通に商賣をやつた丈けである。世界歐洲化を前にして日本は一度も眞の味方を持つたことはないのである。

此の歐化外來勢力は前述の如く第三「インターナショナル」關係、人民戰線關係、國際聯盟關係、華盛頓會議以來の太平洋關係の捕繩を以て巴里平和會議以來否寧る二十一ヶ條條約問題

以來日本を敵視する様に支那を導き、最近は國民黨政權を其の歐米派の手を通じて完全に自己藥籠中のもと爲し終つた。滿洲事變は滿洲を歐洲化された支那から引抜く工作であつたと見なければ完全な史眼とは云へないのである。日清戦争は朝鮮を結局の歐洲化から救ふ豫備工作であつたと見なければ完全な史眼とは云へないのである。あの際三國干涉が來たのは世界歐洲化の波から見て唯當然のことであつた。

西力東漸の波、西洋的東亞保全の嵐の尖端に立てる露國に對し我國は東洋的東亞保全の使命を負ふ朝鮮半島の漢江を境として對峙したのであつて、戰勝の結果は漸く長春を境として露國と對峙し得たに過ぎなかつた。"The only genuinely independent state not of european stock" と評された日本は唯單獨に全世界歐洲化の一步手前で巨腕好く此の怒濤を支えてやつて來たのである。然るに支那は「ロヴァノフ」條約以來三十年一日の如く陰に陽に世界歐洲化の傀儡として我國特に我國の東洋的使命に對する反逆陰謀を繰返して來て居るのである、此の見地に立つとき支那大事變は必至であり、其の意義は全く明瞭である。吾人は誓つて支那と其の歐米化勢力とを完全に絶縁させねばならぬ。日支大事變が其の犠牲に相應はしき成果を收むるや否やは右の絶縁が完全に行くか行かないかの點に繫つてゐる。換言すれば小東亞「ブロッ

ク」將又東邦聯合を形成して其の特異なる東洋的東亞保全、東亞の自決主義、東亞の政治的、經濟的、文化的「オータルキー」を爾餘の世界に對して對抗し得るに至るや否やに繋つて居る。日支提携とか東亞共榮とか云ふ言葉の眞意義は斯くも重大意義を持つて居るのである。

四、大 東 亞

日本人の過去に於ける政治能力から云へば前述の小東亞「プロック」たる東邦聯合の結成に吾人が完全に成功するや否やは危ぶまれないではない。加之に吾人がよく成功したとしても小東亞「プロック」は尙ソ聯に抱へられ、歐洲化された全世界から孤立して、充分なる自主獨立性を發揮し得ないかも知れない。其處で小東亞「プロック」建設運動は其の完全強化運動と不可分に考へられねばならぬ。其の際吾人に役立ち得る指針は東洋的東亞保全と云ふ日本の當初からの東洋的使命に基礎を置く標語である。

此の見地に立つとき、吾人は人類の悠久な歴史から見れば誠に昨日と云ふてもよい位最近の過去に於て東亞特に支那から奪取され、多數の東洋人を抱擁して居る地域且又東亞の相續財産たるべき共通文化を持てる地域に眼を轉ぜざるを得ない。

然るときは先づ支那の西南に眼を轉じ、印度支那から検討を始むるを便宜とする。印度支那は暹羅の失地たる「カムボチャ」を除く外は前世紀の後半に至つて交趾支那、安南東京と徐々に佛國の爲に奪取された土地である。安南は漢時代からの朝貢國であつて、明時代にも再度完全に制服協和されて居る。其の後清朝の威令が徹底せなくなつても、依然支那から封冊を受け、朝貢を續けて居た。然るに英佛聯合軍が北京天津を陥れて圓明園を焼いた頃、佛蘭西は宣教師が殺害されたのを口實として遠征軍を侵入せしめ、征戦三ヶ年柴棍條約で局を結び、清朝は柴棍を中心とする交趾支那の三州と島嶼とを失ふた。之を契機として佛國の侵略は迅速に發展し、後安南と同盟條約を結びて之を支那より引放し、一八八四年に保護權を設定した。其の翌年には支那は二回の敗戦特に水軍の惨敗を喫して完全に東京をも失ふに至つた。其の勢に乗じて佛蘭西はいち早く雲南、廣東、廣西を商業上鐵道企業上の勢力範圍として劃定した。今日の印度支那は面積二十八萬五千平方哩（滿洲國の五分の三）人口二千三百萬（佛人は僅に三萬）世界屈指の二毛作米産地で、米、肉桂、砂糖、茶、水産物を出し、石炭、亞鉛、錫、「タンゲステン」礦を産する。輸出品は米を主とし之に次ぐものに「ゴム」、干魚、石炭、薄荷、家畜、皮革、雜穀、亞鉛、錫等がある。

英國は之と併行的に十九世紀の始めから印度經略の魔手を東方にも伸ばし、元朝以來の支那の朝貢國たる下緬甸を一八六二年に、上緬甸を一八八六年に併合し、馬來半島をも一括略取した。緬甸の面積は二十六萬餘平方哩で滿洲國の過半に當り、人口は約一千五百萬、八割五分迄は佛教徒である。林産が豊富に麻栗材を出し、錫、「タングステン」、銀、石油を多量に産する。早くから歐洲化された印度と緬甸とを區別するのは大東亞主義の特異な出發點であるのである。英國は一八九〇年「シキム」に保護權を設定した。「ネパール」、「ブータン」は民國になる迄中國に朝貢したが、今日に於ては獨立は最早名のみで、印度總督の任命する公使兼總督の如き者が駐割して居る。此の方面に於ける支那の失地は滿洲國よりも廣大で支那本部の半分に近いのである。

極東の國際政治を研究する者に取つて一大疑問は何故に太平洋面から世界歐洲化の鐵濤に立向ふ日本の雄邦主義（帝國主義と異なること滿洲國に體現せられたる所の如し）のみが歐米の極東政策即ち門戶開放、不可侵と云ふ原則に依り百方妨害せらるるに反し、大陸背面からの侵略が毫も問題とされず、其の爲に支那人も亦毫も之を問題とせないと云ふ一大事實である。之が説明は既に一度述べたる所の如く日本が世界歐洲化の激浪と孤軍奮闘して居るの事實に求め

らるべきではあるまいか。其の結果として英人は西藏を格別の反對に遣はずに自己藥籠中のものとなし、其の印度通貨の優位が立證する如く之を「事實上の保護國」と呼んで居るのである。面積は滿洲より稍小さく、人口は百五十萬内外と云はれ、目下は農牧を主とし、金、「ボラックス」、食鹽を採取して居る丈けで富源は全く未知數である。西藏は「パミール」高原を含み、蒙古人種及び東方文化の發祥地として東亞「ブロック」から決して除外し得ない地域である。

新疆は滿洲國よりも稍大きく、人口は百二十萬と稱せらるるが、諸大川の流域は土地肥沃に灌漑の便備はり、穀物、果實、野菜は豊富に、絹、羊毛、棉花を産し、玉石や金も現に發見されて居る。蒙古は滿洲國の約四倍もあるが人口は百萬足らずである。外蒙に侵入した露人の數の多いことは注目に値ひする。熱河察哈爾の一部を除く内蒙古及び外蒙古は全く共產黨の支配下に在つてソ聯の一洲又はソ聯の保護國と化して居る。今日に於ては宗主權すらも支那の爲に保留されて居るか否か疑問とされる。此の地方の畜産は頗る豊富で、羊毛、皮革、豚、羊山羊を多量に輸出する。中國共產黨が瑞金を追はれて北に移動して以來は青海、甘肅、陝西、山西の一部迄も共產黨の占領する所となり、ソ聯化されて所謂「コミンタイン・ルート」の勢力圏

内に入つて居る。此の中國内の外藩にして中國より乖離され歐洲化されむとしつつある地域は又那本部の二倍にさへも近い廣袤を有する。聯露容共に興り、聯露容共抗日に乗出し來る國民黨政權が共產主義と不俱戴天の我國と兩立せないのは論理的歸結である。旁々聯日興邦を口號とする新中國政權が剿共滅黨を標榜するのは當然であるが、吾人は防共と云ふ様な消極政策で満足せず、積極的に全ソ聯地區を西藏と一括して奪還せなければならぬ。其の機會に於てソ聯の分解を招徠することが出来るならば夫は唯天に代つて兇逆赤魔を平定するものと云ふべきである。北支政權の口號とする聯日興邦は準失地と化しつつある外藩の奪還から着手されねばならぬ。

第二十世紀の一大課題は西伯利亞鐵道に沿ひて其の南五百餘里、京綏、隴海兩鐵道を連ね、滿洲、外蒙、新疆、中央亞細亞を横斷して「イスタムブル」の對岸「スクタリ」の「ハイデルパシヤ」驛に飛着ける大亞細亞鐵道を何人が建設し、且支配するかの問題である。而て東亞は其の中央亞細亞位迄の區間を是非其の支配下に置くことに依り東洋的東亞保全の要求に答へなければならぬのである。此の責務を果たす爲めにも東亞「ブロック」に外蒙新疆を奪還することが緊急缺くべからざることなのである。

豐饒なる伊犁の西部地方は一八六〇年代に「カシユガル」地方叛亂の際露國に奪はれた。其の西方遙かに「カスピアン」海に達し、南は「アフガニスタン」の北境 Goekteppe より北は「オムスク」に至る回教徒の居住する一大陸塊は「タメルラン」の大帝國に屬した地域であるが、其の後は分裂して回々教を奉ずる土耳其系諸民族の王朝下に在つたが、一七一六年より一八八五年頃迄に等しく露國の爲に經略せられた。現在此の地域には Kazakstan, Turkmenistan, Uzbekistan, Tadjikistan の四共和國が設定され、其の合計面積は滿洲國の三倍弱、其の人口は千五百萬に近い。其處には極めて雑多にして且豊富なる畜産、農産、林産、鑛産、加之製造工業迄も約束せられて居る。従て大元帝國の昔の夢を追ふ大陸の志士は此の地を協和することを全く忘れてはならないのである。

「ウラル」から西伯利亞鐵道を東して「オムスク」に着けば急に蒙古人種の色彩が濃厚となるのを看取する事が出来る。實際「ウラル」山以東又は「オビ」河の流域以東は支那の失地でない迄も之を東亞の失地と呼び得るのであつて、露西亞の亞細亞經略は一五八一年「コサツク」兵の移住に依り始められ、一六四七年に「オホーツク」海岸迄達した次第である。其の内黒龍江省左岸の地は一八五八年、其の右岸の地及樺太は一八六八年頃に支那から奪取されたもの

で、意義ある東亞の再建は其の回收を必要とすること云ふ迄もない。此の西伯利亞は面積約四百三十萬平方哩、滿洲の八倍に當るが、人口は僅に千四百萬弱である。現在其處には二個の自治共和國と三個の洲廳とが配置されて居る。産業は元來農業、林業、牧畜、漁業、狩獵であつて、雜穀、家畜、皮革、毛皮、木材等を多量に産して來たのであるが、二次三次と五箇年計劃が進むに連れて石炭、鐵、銅、金、銀、鉛等雜多にして極めて豊富な鑛産が採取され、各般の工業も起つて來た。

香港、九龍、澳門等の商業據點、租借地、租界勢力範圍等が治外法權と合體して所謂「帝國内の帝國」を構成し、如何に支那の諸都市を歐洲化して居るかは餘りにも顯著な事實であつて今更説明を必要とせない。唯東亞の再建、東亞の復興を云ふならば中國に寄生して居る之等の歐洲的病菌は之を抉り取らねばならぬ。此の點に關し力説せねばならぬことは、日本が幣原外交の當時に於て治外法權撤廢問題や關稅自主權問題に關し最も進歩的な態度を取つたと云ふことである。而て滿洲國に於ては最早鐵道附屬地も治外法權も撤廢されて居ると云ふことである。東洋的東亞保全の語が決して空虛でないことを何人も知り得るであらう。

筆者は今春拙著「雄邦日本の東亞復興」を世に送つたが、今や武漢、廣東を攻略して、日本

の大陸熱は愈々高潮に達し、東亞の新秩序、東亞再建、新東亞、東亞協同體等東亞を云ふに於て何人も人後に落ちざらむとして居る。實に滿洲事變前と較べて隔世の感がある。併し人々の云ふ東亞は遺憾ながら日本、滿洲、支那本部の合計であつて、吾人が呼んで小東亞となす所のものである。此の小東亞はソ聯に依て完全に抱へられた上に、南方及び西方より歐米勢力に依て包圍せられ、政治的、經濟的に到底自裁權又は「オートタルキー」を布き得ないばかりでなく、其の内に所謂獅子身中の虫をさへ藏して居るのである。嘗て國際聯盟の軍縮委員會は一國が自給自足し得る爲には是非共北米合衆國程の大陸と富源とを必要とすると説いたのであるが、余、想ふに小東亞は既に地大物博なりとは云へ未だ到底自給自足に充分でなくして大東亞程の廣大な地域を充分に開拓せなければ駄目である。況んや小東亞が「シンガポール」、眞珠灣、「ウラヂオストック」、香港、廣州灣、「フィリピン」等から脅威されて、全く包圍政策の術中に在り軍事的安全をさへ具備し居らざるに於ておやである。

小東亞の天地に跼蹐すればこそいや應なしに滿洲を挾んで日支相争ふのである。人間は老子が無爲を説くに拘らず極めて争鬪性に富み、戦争でもなければ競技會を催し、擬國會を開きて、其の鬪争慾を満足せしめむとするに急である。西洋で拳鬪會などに行けば女でさへ

him”と叫んで聲援を與へる始末である。此の人間性は揚棄することは出来ても抹殺することには出来ない。此の理を覺らざる東洋の近視眼政治家は歐米人を觀客となし、無料で其の大喝采を博しつつ小東亞の舞臺で戦争劇を演じて居るのである。之を救ふの道は世界歐洲化の事實と大東亞 (Greater East-Asia) 結成の妥當性とに目を醒さすより外はない。

余の所謂大東亞は日、滿、支三國に前述の失地又は準失地を全部取入れたものである。世人の所謂東亞は小東亞であつて、大東亞の三分の一に足らないのである。世人は此の内でも新東亞とか新秩序とか東亞再建とか東亞協同體とか叫ぶのであるが、夫は日本人の運動性——動物に本質的なる——の要求を充し得ても支那人特に醒めたる中國青年の運動性の要求を充し得ない。夫は大陸政策を擔任して大陸に乗出す日本青年の熱情を煽るに足りるかも知れない。併し其の運動たるや支那及支那人を國際政治の客體となすもので、彼等を國際政治の主體に迄高め、其の熱情を動員して共に大陸經綸に邁進せしむるの用意を藏して居らないのである。

個人も民族も所詮「増大の法則」の支配から免がれることは出来ない。世の學者にして新民主義を解説する者は先づ三民主義を否定すると揚言するのであるが、彼等は常に「ショウウイニズム」即ち誤まれる民族主義を否定するだけで決して民族主義を否定して居らないのであ

る。併し大學にも本末、始終、厚薄の別を説いて居るのであつて、此の義をわきまへない平面論理の孫文的民族主義は反て禍國殃民し、民族主義を民權及び民主と合はせて之を葬り去つたのであつて、吾人は誤りなき國際政治の指針として具體的國際主義的民族的民族主義を中國青年に説いて居るのである。此の具體的國際主義的民族的民族主義の要求から云ふても吾人は是非共日、支二人三脚の共同目標を設定する必要に迫られて居るのであつて、小東亞から大東亞へ眼を轉ずる必要がある。其處では東亞共榮を背景として支那の民族主義を眞實に大きく生かすことが出来るのである。斯の如き各般の需要に應ずるものが實に吾人の所謂大東亞主義 (Greater East-Asia Doctrine) である。

五、大東亞主義

大東亞主義は現在の東亞即ち小東亞を出發點として夫に近接する東洋的東亞の失地を恢復し、現在の小東亞を其の三倍の大東亞に擴大せむとする運動である。換言すれば東邦諸民族の共通相續財産でありながら悠久の歴史から見れば眞に最近と云ふべき期間に歐洲化されて歐亞となり切つた地域即ち大東亞と想定された地域全體の三分の二を歐亞から奪還せむとする運動

であるのである。筆者は久敷以前より獨逸の友人に向つて獨逸、波蘭の波蘭支關先に關する葛藤は是非共之を發展的に解消させねばならぬ。即ち獨逸は「ウクライナ」の北半を占めて「バルチック」海へ、波蘭は昔の大波蘭の夢を追ふて南「ウクライナ」より「オデッサ」に伸びよと説いて來た。滿洲に關する日支相剋も之より解脱せむと欲せば是非同様の方策に依るべきであつて大東亞主義は正しく其の要求にも應ずるものである。

大東亞主義は極東國際政治に於て至善に止るものと覺信して疑はないのであるが、前述の失地又は準失地を回收するには精密なる實行計畫と時間割とを必要とするのである。先づ中國の民族主義の要求に聞きて中國の國內の廓清即ち居留地、租借地、商業根據地、治外法權の撤廢より着手されねばならぬ。此の運動は東邦聯合の形式に依る日支提携成り、東亞共榮の大義確立するに於ては何の苦もなく實現されることである。

次は中國の外藩たる準失地西藏、新疆、外蒙等の回收である。西藏は英人が誇稱して保護國と呼ぶものなるも左迄實力を以ての占領があるわけではなく、之が奪還は左迄の困難はない。新疆外蒙には赤化政府の現存するあり、且少數ソ聯軍も侵入して居るので抵抗はあるものと覺悟せねばならぬ、然れども今事變の延長として共匪を追撃し、逃ぐるを追ふて破竹の勢を以て

茲に侵入するときは赤色英雄の都を従前の庫倫に還元することは左迄困難ではあるまい。時期を得れば嘗て「ウランゲル」將軍すら茲に據つて居たのである。

伊犁に連なる中央亞細亞及び西伯利亞の回收は特に急ぐ必要はない。吾人は輕卒にソ聯の分解を速斷することは避けねばならぬが、人間の本性にはソ聯の如き政治體制を瓦解せしむる要素のあることは争はれないし、外部には夫を取捲く國民戰線の勢力が犇々と動き、茫大の國防力強化はソ聯の矛盾を愈々曝露せしめなければ止まない。張鼓峰事件は兵隊が特權階級たる共產黨に入黨させて貰はねば戦はぬと云ふことを證明した。唯の一例であるが Solonevich,

Russia in Chains は開戦の翌朝一切の露兵の銃剣が「モスコウ」に向ふことを豫言して居るのである。十九世紀の病人は土耳其であつたが、第二十世紀の病人はソ聯である。其の死滅解體は自然に到來せねばならず、又東洋安定の爲には是非共之を招徠する必要がある。大東亞主義の長所はソ聯の自然的解體に依て一舉に其の九割迄を實現し得る點にある。大東亞主義は徹底的、積極的、奮闘的剝共主義なりと云ふも過言でないのである。

中國東南の失地恢復には吾人は一層細心であらねばならぬ。英領緬甸に就ては英國が滿洲事變に際し寧ろ日本を支持したり、中國に於ても寧ろ商業上經濟上の利益のみを以て満足せむと

する國柄にして、英首相が嘗て大國は小國の爲し得ざる所を爲し得と揚言せるにも鑑み、所謂平和的變更の可能を信じ、緬甸先住民族が成長して自然獨立を獲得するに至る迄、又は大英飽和帝國主義が老衰して最早此の地を必要とせず、之を拋棄して退却する迄之を預けて置いても差支ないのである。併し此の寛典は今から英國が東亞新秩序を認めて援蔣政策を拋棄し、人種平等主義を認め、土人に對する蒙昧政策、搾取政策を罷め、其の主張して止まない門戶開放主義を此の地にも適用することを條件とする。

佛國が嘗て英國と共に夏臺、圓明園を焼き、印度支那を奪ひ、三國干涉の報償として廣州灣を占領し、日露戰爭に露國を支持し、今も人民戦線に組みし、露國と共に對蔣援助を爲し、日本及新中國に寇なしつつあることは吾人の忘れ難き所である。併し同一條件の下に吾人は茲にも緬甸同様の寛典を施さむとするものであつて、佛國植民地が援蔣政策から蔣政權と一「ブロツク」を爲して我方に敵對するの自殺行爲に出づるなからむことを希望して止まない。

大東亞主義は孫文提唱の大亞細亞主義と思想的背景を共通にして後者と稍異なるのである。人種主義に根據を置く此の主義は理念的には正しいが、現在と理念との間に實行的の橋を架し動き出すことが出来悪いのは大亞細亞主義の短所と云へる。世界の歐洲化から取残された小東

亞と云ふ嬰兒に直ちに大亞細亞と云ふ米俵を負はせ様とするのは無理である、子供には先づゴム毬を與へ、長じて鐵亞鈴を授け、成年に至りて始めて米俵を負はすべきである。此の理を覺らないならば大亞細亞主義は直に印度や、土耳其に想を馳せ、空想に陥る虞があるのである。昔から歐洲化された印度と東洋的なる緬甸以東とを區別するは大東亞主義の特異點で大亞細亞主義と乖離する點である。世界歐洲化の最終段階に於て東洋的東亞保全を志す吾人の困難なる外交上の立場を意識せず、全世界の孰れの部分からも孤立して之と敵對關係に立ち、黃禍論を刺戟し、獨、伊等の國民戦線とすら協力する外交上の用意がないかに見ゆるは大亞細亞主義の困る點である。大東亞主義なれば今後世界に於て相當の日南の土地を得て需要を充す道義上の權利ある獨、伊の東進、即ち「*Diang nach Osten*」と充分協力する餘地があるのである。大東亞主義は又「ウラヂヴォストック」の我國に對する脅威と香港、「シンガポール」の脅威とを區別し先後をよく辨へてゐるのである。而して大東亞主義は大亞細亞主義と併行し、此の後者の短所を救済もし、其の先驅ともなるものである。大亞細亞主義の意圖する「亞細亞人の亞細亞」は既に傳大であるが、吾人は更に「チムール」の雄略を追つて歐羅巴や阿弗利加を人口十一億の亞細亞に隸屬させたり、八紘一字の豫言を全世界に布くことも想定し得る。但し現状を出發點

として之と橋渡しの出来る實踐的理念と云ふものは自ら有限であつて、吾人は大東亞主義から始むるを最も時宜に適すと考ふるものである。さりながら、世界には二億四千萬の有色人たる回教徒がありて、英、佛、ソ聯に大部分隷屬し、内一億七千萬は東西亞細亞に在りて「イスラムナシヨナリズム」の鯨波を擧げて居るのである。而て其の一大部分は大東亞地域内に居住して居るのであるから吾人は之に對する工作を今より怠つてはならないのである。大東亞主義は印度洋と其の接壤地域とは暫く措き、支那西南角と「イスラム」問題との二點に於て尠くも大東亞主義と聯關を持つのである。

聯日興邦を口號とする新中國の青年は是非共覺らねばならぬ一事を持つ。夫は唐、元、清の水軍が嘗て一度も日本を侵襲し得ず、中國の鬼門が明瞭に東方にあることを示して居ると云ふことである。此の理を覺らない蔣介石は愚かにも西方北方に同盟を求め、東方に向つて盲進して遂に其の頭蓋骨を大盤石に打ちつけて之を破碎した。反對に漢、唐、元、清の各朝何時も西方大陸に向つて其の領域を擴大した。世界大戰の苦き經驗に懲りて「ヒットラー」總統が、「ビスマルク」の教訓を繼承し、獨逸の未來は東方にありと呼號して進み來るとき、之と協力すべき日滿支の口號は是非とも「Drang nach Westen」ではあるまいか。

歴史に論及した序に想起せらるることは長髮賊の亂と國民黨の亂とが西洋舶來思想に動かされ、客家の子弟華僑及び外國顧問等に依り支持せられ、東洋の自殺東洋の歐洲化を狙ひ、廣東を出生地となし、所謂廣東精神に依り鼓舞せられて居たことである。されば日本の東洋的東亞保全運動が國民黨と衝突するのは必至である。吾人の戰は實に廣東精神と其背後勢力との決戦である。此の際想起せらるるは扶清滅洋を口號とした義和團事件である。扶清は滿洲朝廷との提携である。而て拳匪は未だ排日を思はなかつたから東邦聯合又は日、滿、支提携が義和團精神である。滅洋は明に西洋又は歐米に反對することを意味して居るので、余輩の所謂東洋的東亞保全又は東亞復興に外ならぬ。果然義和團精神若しくは直隸精神は自ら覺らずして余輩の大東亞主義の先驅であつたのである。

外政の優位も、内政の優位も共に半分の眞理である。全體の眞理は内政外政の併行でなければならぬ。此の見地から見るとき尊王攘夷は二つでなくて一つである。抗日統一も二つでなくて一つである。世界より全く孤立して外交關係を持たない國を想像すれば、其の國人は最早内争に没頭する外鬭争慾を充すことが出來ない。反對に推論して尊王が成立ち、統一が成立つ爲には是非共攘夷や抗日や又は其の代用品が絶対に必要である。群團本能は自團體 (in-group) の

成立する爲には是非共之と對立する他團體 (out-group) の設定を要求する。然るに日本の東亞論者は右の抗日や攘夷に代はるべきものとして何等の目標を示して居らない。防共と云ふ言葉は聞くも否定的命題で推進力を持たない。從て其の説く所は東亞を對象として之に働きかける雄邦日本の獨りよがりである。これ文けでは孫文的民族主義に培はれて來た中國青年が何等の感激を覺える筈がない。大東亞主義は此の缺陷を補ふて餘りある。大東亞主義に於ける他團體は歐洲化亞細亞即ち歐亞と其の背後勢力とである。大東亞主義に於ける自團體は日、滿、支即ち小東亞である。其の争鬪の目標は失地又は準失地たる大東亞の奪回である。大東亞主義と云ふ大極の内には日、滿、支即ち小東亞の團結と云ふ陰と戦ひ取らるべき明日の大東亞と云ふ陽が含まれて完全なる體系を成して居る。東力西漸の出發點たる滿洲に絡まる日支相剋は發展的に解脱せられざるを得ない。

外交政策とは流轉せる世界に於て最も妥當なる自團體と他團體とを對立させ切磋琢磨させる工作を云ふのである。之に依りて自團體の内部を共榮提携と云ふ涅槃に入らしめると同時に、他團體をして反作用を起さしめて、他團體を強化し、其の又反動として自團體を強化するのである。其の過程に於て糞土朽木は淘汰され、天行の健なることが確保されて行く。

道義世界の建設とは天地の化育を助けることであつて、大東亞主義に於ける自團體の設定は他團體にも福祉を齎らすもので、大東亞主義は吾人の大圓鏡智である。中庸に唯天下至誠、爲能盡其性、能盡其性、則能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣、と云ふてある。今日之を東亞の國際政治に適用すれば大東亞主義に歸依するより外はない。大東亞主義は第二世紀東亞の南無妙法蓮華經である。之を抱くときに今迄虚無に等しかつた東亞六億の大衆は悉く當代の日蓮となつて不惜身命の勇猛心を以て一齊に奮起して復古的創造的進化の道程に上り得るのである。

今次事變に依り何十萬と云ふ東亞の菩薩は胡塵の中に失はれた。其處に最も不生産的に濫費せられた物理的化學的破壊力と生命力とは之を目的に動員するならば大東亞主義の二つや三つを實現するに必ずや充分であつたに相違ない。廢墟と未亡人とを前にして吾人は大東亞主義を抱かざりし東洋政治の貧困を長大息して止まない。今大東亞の黎明に立ちて大東亞主義の行者は祈る、東邦諸民族の間に涅槃あれ、進軍する大東亞の理想に勝利の榮光あれと。

六、日本の東洋的世界的使命

世界大戰は酸化鐵の蓋が下から崩出づる創造力を壓殺した歴史であつて、其の後十八年間に於ける「ヴェルサイユ」體制の黄昏の歴史と合はせて無意義のものであることが今日は明瞭となつた。併し當時人々は戰爭を殺す戰爭であるとか、民主主義の安全の爲に戦ふとか云ふて一廉の有意義な仕事をした心算で得意になつて居たのである。之と反對に日本は熱慮的計畫的と云ふよりは寧ろ反射的直覺的に環境に反作用して最少限度の安全の爲に大陸の半島に足場を築き、次第に國家鎮護の第一線を大陸に進めて來たものではあるが、事實上は大宇宙の攝理に導かれて、雄邦日本の完成、東洋的東亞保全又は東亞の復興、道義世界建設の爲にする世界大維新の實現に向つて進んで來たのである。

日本が島帝國內に跼蹐し、日清戰爭が戦はれず、隨て朝鮮が全く獨立であるか、全く支那の屬領として残つて居たならば如何であつたらう。此の場合には朝鮮は滿洲を侵略した露國に滿洲と一括併合されて釜山迄の歐洲化が完成され、日露戰爭もなく、南滿洲の奪回もなく、山東攻略もなく、多分日本は永久に小日本として島國に蟄居し、第二流國となり、半獨立國とな

り、全世界の歐洲化、東洋の抹殺は茲に完成したであらう。然るに事實は之に反し、我國が日清戰爭に勝ちて半島に覇を唱へたから、其後日露は京城に於て争覇することとなり、朝鮮兩分論や、滿鮮交換論の行はるるを見た。夫にも拘はらず萌生する日本生命の躍進は乾坤一擲の快舉に出で、辛ふじて露國の侵略、西力の東漸を撃退して長春迄進んだ。日本なかりせば朝鮮や滿洲が支那のものとして残つたであらうなどと云ふ寢言を誰が云ふか。殷鑑遠からず外蒙新疆を見るがよい。觀じ來れば日本の大陸進出は西洋的東亞保全に代ふるに東洋的東亞保全を以てした文けで朝鮮、支那には絶對に迷惑を掛けて居らないのである。此の事實を認識せぬ者は決して東洋本然の意識を持てる東洋人として日本を理解し、日本と提携協力するの資格なき者である。

然るに今迄の中國は特に國民黨の中國は右の適確なる客體的事實を毫も容認せようとせなかつた。従て中國は「ロヴァノフ」條約以來の傳統を追ひ、一時的の外觀的親善を除く外終始一貫歐米外來勢力と結び、對日反逆陰謀を廻らすに於て寧日なく、此の事は蔣政權に至つて其の頂點に達したのである。斯の如くにして中國は一瞬と雖も衣食足りて禮節を知り、富は屋を潤し、徳は身を潤す、心廣く體胖かなりと云ふ氣持になり、然る後明德を明にするの機會を日本

に與へず、中國五億の大衆と世界列強との眼前に日本を侵略國好戰國なりと只管強ひたのである。親人睦鄰の誼に立てば事實は正に其の正反對であつて、東洋的東亞保全の救世主は慈眼を以て六億の衆生を見んとして居たのである。此の事實を覺らざる日支兩國は小東亞の小天地に蹋躋して、滿洲と云ふ蝸牛角上に相争ひ、見苦しくも巴里、華盛頓、壽府の諸會議を法廷となし、凸鼻の狡兒を大法官となし、其の面前に於て劣等動物視されながらも意氣揚々原被兩造として相争ふたのである。大東亞主義の大義に立つとき何と云ふ極東の悲劇であるか。吾人が自覺なかりし極東六億の大衆は零に等しかりしと論斷するは理の當然でなければならぬ。日支關係の行きつまりは實に三十年一日の如く續いたのである。其の過程に於ては勢の趨く所將又對抗上日本の政策も時に混乱に陥り、歐米流の帝國主義を反映することもあつた、斯様な事實から滿洲事變が起り、其の延長として今回の日支大事變となり、絶對の行詰りは「マルス」の神の審判に依り漸く價值轉換の契機を産み、其の價值轉換を裏書する剿共、滅黨、弭兵、救國、聯日、興邦の口號は臨時維新兩政權汪兆銘五度の聲明等に體現せらるるに至つた。

漸く日本が東洋的東亞保全の大使命に邁進し、道義世界黎明の曉鐘を鳴らす時は來た。滿洲國は所有慾搾取慾の對象たる植民地とはならずして、人種的平等關係に立つ、五族協和の王道

樂土として、東方諸民族聯合の縮圖として、大東亞の儀表として將又日支提携の楔として今や東亞に君臨するに至つたのである。滿洲國は實に日本の東洋的世界的使命達成の礎石であつて、其處から立昇る瑞氣は大東亞主義の進軍を歡呼して居るのである。

新中國の同志は是非日本に明明徳の機會を與へねばならぬ。夫には是非共日本の希望に歩み寄りて全的の協調提携を遂げねばならぬ。斯る上は日本は決して利己主義であつてはならない。大を以て小に仕ふるの仁者となり、利を以て不利となし、不利を以て利と爲すの氣節を示さねばならぬ。特に大東亞主義實現の過程に於て中國に公平と云はむよりは寧ろ獅子の分前を許すの雅量がなくてはならぬ。爾今發揚さるべき大東亞結合體の全體主義に立脚して滿洲國は久しく其の獨立を尊重され、民族的經濟的文化的に其の國境を中、日兩國に向つて精神化して行き、其の地續きの東方及び北方の地域のみを自己に併せねばならぬ。小東亞の西南、西方及び北方の失地は之を新中華衆國の攝理に委すべきである。大東亞主義の勝利の收獲が中國に不利に分配されるであらうと一瞬でも思はせる者は大東亞主義の賊であつて、日本の東亞的使命を裏切る者であるのである。

七、大東亞的大陸大洋體制の布陣

筆者が昨春世に送つた小著「雄邦日本の東亞復興」は興亞院の先驅を爲すに至つた。此の書名は一八三八年の日本の課題を最も妥當的に表現せんが爲に選んだものである。併し世界の全民族の生命の総合的壓力は「雄邦日本」を乾坤第一邦たらしめ、「東亞復興」を大東亞的大陸大洋體制の布陣に變容せしめむとして居る。余輩思ふに日本は獨、伊と呼應して大陸國際雄邦主義の聲息を通じ居るとは云へ、極東に於ては孤立して居る。其の際米國は明瞭に南北南米大陸に大陸大洋體制（筆者の創意である、Continental and oceanic system とでも譯すべきである）を布かむと慾して無限大軍擴に乘出して居る。其の銳鋒は日本一國に向けられて居る。「ナポレオン」は大洋體制を有せざりしが故に大陸體制確立の功を一簣に缺いた。併し英國は一部獨、伊から挑戰されながらも大洋體制を維持し、分散大陸體制をも布いてゐる。日本は之等と對抗し、渡洋進攻し來る米艦隊を一舉に擊滅するの完全なる實力、割海軍を必要とするのである。此の物質力のみが大東亞運動への重壓を負擔し得るのであつて、斯る物質力を單獨に發揮し得る國は乾坤第一邦でなければ出來ぬことである。従て大東亞聯合は日本海軍をして

斯る任務に堪へしむる爲めの援軍を用意せねばならぬ。

尙又大陸に於ては赤魔の進軍を擊退し、英佛の惡意の妨害を排撃するに足る大陸體制を布かねばならぬ。陸軍當局は最近ソ支二正面戰備又は作戰を説くのであるが、(一)ソ滿國境に於ける日ソ對陣、(二)外蒙、寧夏、陝西、甘肅、青海等に恆るソ聯及共產軍對日本及新中國の戰線(三)四川又は雲南、廣西に據らむとする黨軍及其の背後勢力對日本及新中國の戰線は四千哩に及んで居る。小東亞共通國境の武裝撤廢と日、滿、支間密接協同又は分擔割當に依る國防計畫の樹立が之が爲に要求せらるるのである。従て大東亞主義は大陸大洋體制の形に於て適度の日、滿、支國防合同化を其の脊髓骨として持たねばならない。其處から大東亞計畫、經濟の樹立も必要となり、其の推進力として臚ながら大東亞中道全體主義が要求せられ、日、滿、支は共同且個々に其の人的物的總力を極度に擴充せなければならぬのである。

八、大東亞主義の擔任者としての東亞聯合組織要綱

協同體と云ふ言葉は先天的の集團を意味し、從來東亞の諸民族に斯る觀念があつたかどうか疑問である。現に此の言葉は今次の日支大事變後に使用され始めたのである。尙又此の言葉は

東亞聯邦と云ふ語と同様過度の混和を意味する虞もある。他の反面に於て人種、文化、經濟、政治、地理等の單一又は共通關係に於て近親民族たる東邦諸民族間に此の觀念を將來に向つて涵養することは東邦間の相剋を解消し、東亞の全體主義を發揚し、東亞に於て現狀維持主義の要求と現狀調整主義の要求とを化合せしめて發展的調和即ち眞正の平和を招徠し、大東亞主義に宿主又は母體を供する所以である。斯の如き宿主に余輩は東亞聯合又は東邦聯合 (Association) の名稱を與ふるを適當と考へる。然るときは大東亞主義を敷衍した大東亞新秩序體制は實に次の如きものであらねばならぬ。

- (イ) 東洋人本然の意識に復歸し、東邦諸民族の同文同種性將又經濟的地理的單一性を再確認し大東亞主義の彼岸に於ける新文化創造の理念として東亞協同體の實在に目醒め、利を以て不利となし、不利を以て利となすの心境に立つべきこと。
- (ロ) 右に基き其の實踐第一步として東邦諸民族の個性發揮と連帶關係とを同時に可能ならしむる爲め東亞聯合を結成すること。
- (ハ) 以上の結果として世界關係、聯盟關係、太平洋關係、第二第三「インターナショナル」關係等に對する東亞關係の絶對優位を是認すること、依て日支兩國は等しく歐米依存、聯

露容共を清算すること。

- (ニ) 東邦諸民族の具體的國際主義的民族主義の合作する目標を大東亞主義の實現に置き、東邦聯合約法案の基礎たらしむること。
- (ホ) 全世界歐洲化の大勢を逆轉せしめ、東洋的東亞保全の先覺となれる唯一眞正獨立黃色國家たる雄邦日本の精神的優位を認め、之を擁護して大東亞的使命を達成せしむること。
- (ヘ) 東西の衝突、日支葛藤より揚棄せられたる滿洲國の獨立を認め、其の五族協和的王道樂土を以て大東亞聯合の儀表たらしむること。
- (ト) 以上の基礎の上に新中國及び滿洲國は先づ其の内部を肅清し、「帝國內の帝國」を一掃し、剿共に徹底し、準失地を確保すると共に消極變容民族主義より蟬脱するに努力すべきこと、東亞聯合又は東邦聯合は正義に基く東亞内部の新平和體制を確保する爲め此の中國滿洲國等の努力を支持すべきこと。
- (チ) 大東亞政策を確立して大東亞の實現と東邦一層の融和とを招徠し、更に世界政策を確立して道義世界の建設を期すること、右諸政策擔任の機關として東亞聯合最高政治會議を設くること。

- (リ) 東邦聯合全體主義を基調として東亞計畫經濟を立案し東亞共榮に資すること、之が爲に經濟理事會を設くること。
- (ヌ) 明德新民精神を涵養し、東洋文化の發揚光被に努むること、之が爲に文教理事會を設くること。
- (ル) 新中國の爲専制主義民主主義の相剋より揚棄したる中華合衆國的指導者國家の形體を選み、行政上は五族協和の爲め聯省自治等をも併用すること。
- (ヲ) 大東亞政策の線に沿ひて國防を效果的に按配し、大東亞大陸大洋空體制の確立を期すること。
- (ワ) 東亞全體主義計畫經濟の線に沿ひて諸般の産業を振興し、各邦及東亞の總力戰體制を擴充し、大陸大洋東亞大空體制の確立に資すると共に厚生政策を效果的に實施すること。
- (カ) 東亞一德一心の線に沿ひて教育を振興し、國民の智徳を向上せしめ、民意の暢達に資すること。
- (ヨ) 門戶開放主義は植民地に適用せられ、東亞を半植民地の地歩に置くものなるに依り之を否認すること。

- (タ) 東亞聯合加盟國の相互間に於ても加盟國內部に於ても比較的經濟的平等を以て精神的序列合理化の保障となすこと。
 - (レ) 東亞聯合加盟國は此の大東亞の黎明に臨み其の重責に堪ゆる様夫々國內に於て政治機構經濟組織の革新を斷行すること。
- 孔夫子が大學に於て本末を知り、始終を考へ、厚薄を辨へるの必要を力説して居るのは余の具體的國際主義的民族主義を説かれたものである。之を吾人眼前の東亞に適用したものが大東亞主義であつて、其の實踐は東亞六億の大衆を始て國際政治の正しき主體たらしめ、意義ある創造に進ましむる所以である。東亞の志士仁人の擧りて此の旗幟下に團結するに至らむことを。

第六章 小東亞裡の相剋より大東亞裡の解脫へ

物事は遠く廣く且深く眺めて見ねば其の意味は解らない。人類の歴史に於て空前絶後とも云ふべき世界大戦争、將又其の結論であつた所の諸平和條約は其の後に何物を残したか。想ふに世界戦争は現状維持派の制動機が「人類増大の法則」を兩翼に具現した獨逸と云ふ大鵬の創造力を挫いた歴史である。然るに其の結果たるヴェルサイユ條約は流轉の法則に従つて迅速に黄昏の内に埋没し去り、獨逸の創造力は今や潑刺として效果的に東方に動いて居る。憂患に陶鑄されて天命を把握した者の力は誠に大なる哉と云はねばならぬ。世界大戦争は無意義であつた。大獨逸運動に盛られた獨逸民族主義のみ塊地利、チエツコ・スロヴァキア、メメル、ダンチツヒ等に凱歌を揚げて進軍して居る。此の活歴史は混沌より脱して秩序に生きよと我等に啓示するもの如くである。

筆者が始めて支那を知つてから二十五年の歴史を回顧するに、其の初期に當りては日露戦争の餘波として中國が我が方に信頼を繋ぎ、中國留學生の我國に殺到し、其の内には辛亥革命に命

牛耳を採つた人々すらもあつたのである。然るに洪秀全の第二世になる様にと親兄弟に教へられて成長した孫逸仙が廣東精神を以て滅滿興漢の民國革命に成功して以來、日支關係の本流は相剋の二字に盡きて居る。其の出發點は實に世界大戦争に際しての我が膠洲灣攻略と大正四年の日支交渉であつたのである。

當時の所謂二十一ヶ條の要求は帝國の東亞的大使命を把握して、其の基礎の上に宿命的大陸政策を堅實に展開すると云ふよりも、寧ろ遠東の劣等人種を只管搾取せむとするに急であつた歐米列強の帝國主義の跡を聊か踏襲するかに誤解さるる性質のものであつた。若し當時青島に安固な居留地を得る外、滿蒙に集中する政策を取つて居たならば一層建設的であつたであらうが、事實は現在青島大港の前に横はる廢墟の殘餘が物語つて居る通りである。而て此の日支交渉は今迄とは截然と區別されねばならない根強い排日運動を爆發せしめて、其の火勢は連綿事件毎に油を注がれて今次の日支大事變に至つて居る。

事件とは何であるか。我が國が巴里平和會議、華盛頓會議、聯盟諸會議にカノサの屈辱を滿喫して行つたことである。口號は同文同種、唇齒輔車、日支親善、共存共榮等であつたが、遠東の一國の屈辱は其の隣邦の最大の歡喜であつた。其の陶醉を壽ぐかの如く排日抗日、輕日侮

日の傳單は滿洲を含む四百餘州を埋めて行つた。滿洲事變に導いて行く宿命の一路は坦として砥の如く昭々指點し得るものであつた。世に之を認識せずして喫驚腰を抜かせし中央政府ありしとせば夫は世界歴史に特筆すべき滑稽事であつたと云はねばならぬ。

此の東洋大活劇には二つの要素がある。第一は日支の小東亞蝸牛角上に於ける爭覇相剋である。第二は之に油を注ぐ歐米外來勢力即ち英米等資本的帝國主義と國際共產主義とである。此の後者に日本が屈すれば屈する程中國の眼には我國が「小日本」と見へ、相剋は彼に有利であるかの如く見へた。關稅問題、治外法權問題等に關して多少の自由主義進歩主義を示して見ても、夫は百雷の鳴り際に於ける赤兒の寢息程の効果もなかつた。蓋し日本の舉措は支那人の崇拜する米國と云ふ佛様に細い線香一本あげた位のものであつたからである。之を政治の貧困と云ふのである。斯る折柄として思想的にも英米的國際主義や、ソ聯赤化思想の下敷となり、何事も日本のすることは悪い様に見へ、大日本帝國の帝國と云ふ字を用ふることは罪惡位にまで考へる徒輩を生じ、さてこそ滿蒙拋棄苦しからずと云ふが如き説までも行はれたのである。一皮剝けば直ぐに觀破出来る既成飽和超帝國主義國の其の環境に對する反作用に過ぎない現状維持的平和軍縮運動を不動の鐵則かの如く誤信し、昨年十一月三日の明治節に近衛首相が始めて

「過去の諸原則が事實上不均衡なる現状維持を固定化するところにあつたことは否むべくもない。聯盟規約の如き國際條約が其の權威を失墜したことは實に此の不合理に根本原因があるのである」と喝破する迄に十八年を要した事は、日本知識人の悟性の働き振りを疑はざるを得ない。如上の世界的認識に配するに僅に世間の支那通的部分的知識を以てす。滿洲事變から日支大事變への發展は赤裸々の無能力の應報として將に當然來るべく約束されて居たのである。其の動因は前述の如く常に日支相剋と外來勢力の煽動とであつた。

日支大事變が永續する有意義の成果を産み、小東亞が今迄の二十五年間の惡靈から解放される爲には吾人は是非とも右の二つの絆を斷たなければならぬ。吾人は今其唯一の而て最後の機會を其の前額に依て幸にも捉へて居るのである。其の成功と否とは過去に向つては武威に依つて右の絆を完全に斷ち切ることであり、將來に向つては文徳を以て日、滿、支の東亞を互助連環の新紐帶を以て繋ぎ、舊惡縁の絆を復活せしめざることに在る。

此の際に當り筆者は右後者の任務に聊か關係して北京に滞在し居ることとて、如何にして大陸に吾人の同志を獲得するかが日常の關心問題なのである。余は新民學院の學生や其の他に對し日本開闢以來始めての經驗を経験しながら次の如く説くのである。

日支相剋は過去三十年間滿洲問題を中心として行はれて來た。此の地は世界歐洲化の急潮と東洋的東亞保全の逆潮との決戦に於ける日本の戦勝記念碑として残つて居る。諸君の眼の上の梁を取り、西洋人の賦與する色眼鏡を棄て、東洋本然の意識に立歸つて誇觀せよ。滿洲は日本の羽翼下の擁護國でないならば、必ずや歐洲化され、且赤化されて、何の道支那からは失はれて居たであらう。然るに中國は其の後に於ても尙西洋的東亞保全の傀儡となり、ロヴァノフ密約以來日本に對する繼續的反逆陰謀至らざるなく、其の間聯露容共、歐米依存、遠交近攻、洋夷を東亞大陸の官闕内に入らしめて今日に至つて居る。今度の事變は東洋的東亞保全と西洋的東亞保全（矛盾語）との決戦である。今や上海、南京につき廣東、武漢三鎮、海南島相次で陥り、中國の哲學的主權は我が掌中に在る。而て日本は東亞新秩序の創造に當り蔣政權が畏縮せしめ、枯死せしめた民族、民生を最大限に活かさむと欲するものである。

經典大學に説く所の如く物には本末始終がある。抽象平面論理の學たる單純民族主義は駄目である。支那は外交關係の出發點から消極變容、三日月型民族主義に變つて居る。此の際は唯

具體的國際主義的民族主義のみが中國特に新中國の指針として消極變容民族主義を最大限に圓滿ならしむる方途を中國人に教ゆるであらう。近親民族と小東亞の蝸牛角上に相争ふ如きは殘餘の三日月型民族主義の否定に終はるのを何故覺らないのか。是から出來上るべき東邦聯合の儀表でもあるかの如く嚴存する滿洲國は日支相剋を解脱させた記念碑ではないのか。之を尊重して日支が其の慶に浴するのに異議を唱ふるは過去の歴史を全く無視して、小東亞の煉獄に何時までも蟄居するものではあるまいか。

今や新東亞、東亞新秩序、東亞再建、東亞聯盟、東亞協同體等日本に於てはコロンブスの亞米利加發見の如く東亞を云はざれば人にあらざるの慨がある。由來日本には識見の高い者が尠くない。今日の有様から判斷すれば日本には嘗て一人も聯盟を謳歌したり、軍縮を誇示した人はなかつたのである。世界に聯盟規約や不戰條約や九國條約が在る由なるも、夫は日本人とは全く無關係に自然發生して居るのである。併し日本識者の云ふ東亞は本然の東亞の三分の一たる小東亞即ち現在の日、滿、支に過ぎない。余輩は固有の本然の東亞を大東亞と認識し、其の内に天地の公道に従ひ東力を東漸させて、日、滿、支三人四脚の國際政治上の目標として大東亞を戦ひ取る開顯過程の内に小東亞の相剋を解消し去る様にと新中國に提唱するものである。

大東亞とは何を云ふか、夫は現在の小東亞に東亞又は中國の明瞭に東洋的と稱し得べき失地、印度支那、緬甸（歐亞の延長として主として西洋史研究の對照たる印度と區別す）伊犁、オムスク以東の東部西伯利亞及び中國の準失地、西藏、新疆、外蒙を加へたるものである。此の失地及び準失地は小東亞の二倍に當る面積を持つて居る。滿洲問題を蝸牛角上の争と云ふのは此の大局的見地に立つて云ひ得ること、孫文先生が嘗て中國人に滿洲の日本委附を説いたのは此の見地に立つてこそ云ひ得たことであつたのである。

支那の水軍は唐、元、清孰れも日本の敵ではなかつた。歴史の立證する所、東方は支那の鬼門に當り、反對に漢、唐、元、清の各朝は西方大陸に向つてこそ大發展を遂げ得たではないか。知らず國民黨政權は鬼門に向つて盲進し、遂に大盤石に頭を破碎して死滅せんとして居るのではないのか。新中國は大圓鏡智に覺らねばならぬし、日本は覺らせる爲めのサヂズム工作に徹底せなくてはならぬ。其處からのみ價值轉換が生れて来る。吾人が祖國に向つて乾坤第一邦の實踐即ち大陸大洋體制の布陣を要求するのは蓋し茲に基因するのである。

吾人が新中國の人士に説かんとする大東亞主義は大亞細亞主義と思想的聯關を持つも、當代外交政策として豊かなる創造力を待つ點に於て後者と全く對蹠點に立つ。前者は國民戰線に立

つ獨伊と相結びて大陸國際雄邦主義を結成し、二十世紀の大病人ソ聯（十九世紀の大病人は土耳古であつたことは周知の通りである）の解體作用を受けて、獨伊に其の西洋的破片を、我が方に其の亞細亞的破片を圓滿に繼承せしむる準備を藏する。實に滿洲に關する相剋よりの解脫は大東亞の黎明及び道義世界即ち世界新秩序の黎明と併行してこそ其の圓滿を期し得るのである。

勿論新中國は餘りに急いではない。加之新中國は西南の失地に關しては所有慾の權化英佛に對して數世紀間之を預け置くの雅量をさへ示してよい。唯大國は小國の爲し得ざる事を爲し得ると自負する彼等に向つて、人種平等主義を容認し、新中國の近親民族に對する蒙昧政策、搾取政策を是正するのみならず、彼等の主張する門戶開放主義がさ程よいものであるならば、先づ夫を自國の植民地に實施し、移民位は自由にし、先住民に其の近親民族の製品を自由を買はせるの雅量を示してから顔を洗つて出直せと指令すべきである。英米人等の門戶開放主義が利己的東亞擾亂策に過ぎないことは門戶開放主義が大陸背後からの侵略獨占到對し何等の反作用を示さざること依りて明瞭である。併し新中國は彼等の此の笑止な武器をもぎ取つて之を英米人等の咽喉に擬し、速に彼等をして租借地、居留地、勢力範圍、治外法權を拋棄せ

しめ、新中國の「帝國內の帝國」を一掃し去るべきである。此の運動に關しては滿洲に於て治外法權、鐵道附屬地行政を撤した日本は新中國に於て慥に領導權を握る用意があるものの如くである。此の運動は直に實行に着手されねばならぬ。其の次に着手すべきは國民黨政權がソ聯及英國の蹂躪併合に委して毫も顧みない西藏、外蒙、新疆の回收である。此の茫大な準失地は之を此上とも歐洲化させてはならない。吾人は道義世界建設の第一歩に於て既に世界の四分の一を所有する英國、其の六分の一を有する露國に向つて嚴然退却を要求し、聞かざれば之を放逐するに何の難きことやあらむである。大東亞主義の最大長所は瀕死の世界的大病人ソ聯一國の死滅分解に際し、一舉に九割まで實現さるる可能性最も大なる點に在る。東洋的東亞保全を確かりと把握する者のみが他日地を繼ぐことが出来る。滿洲國を東邦聯合の儀表として存置した日本は獲物の分配に於て決して利己主義でないであらう。加之日支は協力しつつ夫々東北と西北に開拓すべき無限の新天地を持つのである。

以上大東亞の黎明に立つて吾人の大陸の同志に呼掛ける日、滿、支三人四脚の目標たり得る

具體的國際主義的民族主義は實に斯の如きものである。此の三國の民族主義を夫々大きく共同且個別的に生かす方策は斷じて他にあり得ない。筆者の提唱は幸にして大陸の多くの同志の殆んど無留保の共鳴を買ひつつある。願はくば小東亞上の相剋解脫より大東亞上の涅槃へと絶叫する筆者の提唱が祖國の識者に依り否定さるる様なことがなく、過去二十五年間特に舊著支那の外交及財政を世に問ふて以來日支關係の開顯に努力して來た筆者の主張が來るべき二十年間に豊富なる大東亞實現の永續的成果に依りて酬ひられむことを祈願して止まない。

第七章 新中國建設綱領

一、昏迷狀態の中國青年

從來我國に於ける共產主義思想家や實踐家が行詰つて遂に轉向を餘儀なくされた場合、彼等は大體心神喪失の状態に陥り、如何に舵を取直すべきかに暫く迷ふて居ると云ふことである。國民黨政權の三民主義的黨化教育に驅りたられ、此の主義の内に救國の光明を認め、往々に強い熱情を寄せ、之を實踐にまで移して來た中國青年としては、東亞新秩序の黎明と共に起ち上る北京臨時政府、南京維新政府等の治下に、昨是今非、去就に迷ふも無理からぬことであり、吾人は同情を以て之を視るものである。今斯る状態より彼等を救出すことは唯に東亞の志士仁人の責務たるばかりでなく、滿洲事變を以て告げられたる世界大維新の動向將又東亞新秩序建設運動の擔任者たる日本國民の當然の責務でもあるのである。

二、三民主義の素材

廣東地方は所謂客家子弟の多數居住し、革命思想の鼓動する地方でもあるし、最初の開港場として近世歐米思想が鯨波を揚げて之に拍車する地方でもあつた。此處で呱呱の聲を揚げた孫逸仙は太平天國を夢みた長髮賊亂の首魁洪秀全の後繼者になる様にと父兄から教へられて成長した。而て洪秀全を鼓舞したものが基督教であつたと同一の意味に於て此の革命兒を鼓舞したものは近世歐米政治思想たる民族主義、民主主義、社會主義であつた。彼は終局の革命未だ成らざる内に志を抱いて不遇に斃れたけれども、滅滿興漢を旗幟とする辛亥革命の首領として、將又北伐成功後の國民黨の新偶像として過去四十年間の支那の歴史を纏めてゐる。併し彼は専門が醫者であつたし、革命實行家として東奔西走寧日も尠かつたので、泰西政治思想を素材の儘丸飲みにし、匆忙の間祖國の現状に照し、多少の手加減を加へて之を適用するに止まつた。其處で革命を通して支那を近代國家に向上せしめることに大に貢献したのも彼の把握した所謂三民主義であつたし、日支大事變を誘發して國民黨政權に今日あらしめたのも亦三民主義であるのである。此の點に中國青年の現在の思想的混亂の契機があるのである。斯るが故に三民主義

の素材又は三脚柱とも云ふべき近世西洋史に幅をきかせた泰西政治思想の根軸たる民族主義、民主主義、社會主義又は共產主義こそ先づ検討されねばならぬ。

三、民族主義

本來民族主義とは人種、言語、宗教の同一、地理的經濟的單一性、同一皇室の推戴、歴史傳統の共通、風俗習慣の一致等の要件を具備する群團即ち民族が一國家を形成すべしとの主張を意味するものであつて、特に過去四、五世紀間世界歴史に異常の波紋を織出したものである。而て當初に於ては本主義は部分社會たる封建制度と戦ひ、中葉排民族主義大帝國の正統主義と戦ひて、民族國家實現の推進力となつた。一見其の歴史的使命を終つたと考へらるる二十世紀の黎明に當つては國際無政府状態を世界協同體の内に解消せしめむと意圖する國際主義に依り對抗せらるるに至つたけれども、尙中國の辛亥革命、世界大戰後に於ける波蘭、「チエツコスロヴァキア」の誕生、而て最近「ヴェルサイユ」條約體制の黄昏に乗ずる大獨逸の創造等に躍如として動いて居るのである。

併し民族主義は皇道家族國家日本の如き純粹なる形式と内容とを具備せずして、實際上は多

數の國に於て積極的又は消極的の變容を受けて居る。即ち英、米、佛、露の四大既成飽和帝國主義が或は二三、或は數十の異民族を抱容し、屢々其の民族主義を抹殺し、此の四箇國を合する時は優に世界の面積及人口の四分の三を掩有する程である。既に辛亥革命後の支那は五族協和より成り、歐洲大戰後民族線に沿ふて政治國境線を引かむとした巴里平和會議の努力は殆んど失敗に歸した程である。其の上、模範的民族主義國家、積極變容の民族主義國即ち帝國主義國、消極變容民族主義國即ち半獨立國、半植民地等が雜然と併存する國際社會に於て、生活運營上の順逆に従ひ、同盟と抗争關係とが同時に發生するを免がれ難い傾向にあるから、軍事同盟、政治集團、經濟「ブロック」等が相繼いで結成され、民族主義が獨自其の力を發揮することとは寧ろ尠ない。果然民族主義は先天的に共同生存意思に結ばれた自然の力強い存在であつても、全一な最終の實在體とは申されないのである。

四、民主主義

原子論的個人主義を背景に持つた君主專制が少數貴族僧侶等に依存し、苛稅苛役を以て民に臨み、其の反動として同様に原子論^{アトミズム}の立場に立つた人民に遠心力が働くに於ては民族國家に於

てすら「大洪水」の來ることは佛蘭西の專制君主すら氣附かないわけには行かなかつた。斯る社會狀態を前にして「ルーソー」の民約説が生れ、自由平等と民權とを説いたのは當然で、其の結果佛蘭西大革命となり、帝制は倒れて共和政治の下に第三階級即ち庶民階級が法律上の自由平等を克ち得る様になり、英國の政治史と「モンテスキュー」の學説から立憲政治、普通選舉、議會政治が生れて來た。佛蘭西革命の影響は全歐洲に及び、排民族主義國家、匈牙利、土耳其等に於ては民主主義は民族主義と合體して正統主義と戦ひ、成熟植民地に於ては其の本國よりの獨立が加速度を以て實現された。

此の泰西君主專制の反動として意義のある民主主義は個人主義、自由主義特に經濟上の自由主義、從て又四海同胞主義とも相通するものであつて、國々に所謂資本主義を發達せしめ、其の反動として勞働者問題、階級闘争の擡頭を結果した。四年に一度數量に相談すると云ふ議院政治は行政の推進力を過小にし、其の上之に多數の制動機を裝置したから激成されて行く社會問題の前に行政は著しく不感症となり、國家の内部的崩壞や國際的地位の顛落に對する憤激、敗戦後の屈辱的講話の桎梏より蟬脱せむとする武者振ひの激動に遭つて顛落した。其の結果は創造力に富み、今後二十世紀の世界歴史の上にて重要な役目を演ずると思はるる獨、伊、

西班牙等に於ける強權全體主義的獨裁政權の擡頭となつた。民族國家の本質によく合致すると思はるる此の全體主義は民族精神を高翔せしめつつ民主自由思想や社會主義を揚棄し去つた。人類文化史に於て重要な使命を果し來つた民主主義は決して萬病感應丸ではなく、全く廢れない迄も最早其の創造力の時代を過ぎたと見て大過ないであらう。

五、社會主義

民主主義は一應政治上の自由平等を齎したが、其の後に至り其の基礎の上に社會主義は經濟上の自由平等を招徠せむと期するもの如くである。本主義の萌芽は人類の倫理思想、社會思想と同様に古いのであるが、之に科學的性質を加へ新興第四階級に依る社會革命の性質を帯びしめたものは、資本集中、階級闘争、無産階級の勝利、生産手段の共有、勞働階級の國際主義、唯物史觀等を説いた「マルクス」の共產主義である。著しく不健全な帝政露國の敗戦の際に於て一群の猶太系不遇智識人が此の主義に依て無智の大衆を驅立て、食物、土地、平和を約束することに依り共產革命に成功した結果は蘇聯の現状が之を物語つて居る。其處では人類、國際社會、國家、民族、階級、個人等が與へられたる儘のものである以上、共產主義と云ふ平

面論理は徹底的に變容せられ、國家資本主義にならねばならなかつた。宇宙法則から餘りかけ離れた「イデオロギー」を實踐した結果は大體こんなもので、其處には唯の無内容の法律上の自由平等さへも無いのである。他の諸國では帝國主義、民族的偏見、各種労働組合の相剋等の制約の下に共產主義が修正されて社會民主黨の政治的社會主義となり、社會政策的立法を發達させた。之に飽足らなかつた労働者は地方毎に、工場毎に同盟罷工、怠業等の直接行動に出でたが、之は産業的社會主義と呼ばれた。此の葛藤を解消せむものとして一時勞資協調や、「ギルド」社會主義等も唱道された。併し其の歸趨の分明ならざる内に前述の強權全體主義が擡頭して、過去一世紀に亘る妖魔唯物的階級闘争主義を民族我と云ふ全部の内に解消させて仕舞ふた。夫にも拘はらず國の傳統や環境が民主主義、社會主義を強く必要とする國々は所謂人民戰線とか、民主主義戰線と云ふ國際主義を標榜して、全體主義國家戰線即ち現狀打破國戰線と對峙して居る現況である。全體家族皇道國家とも云ふべき我國が此の後者と同一の世界觀に立つて堅き防共協定の紐帯に依り結び居ることは既に人の知る所である。

六、以上三主義の交渉、制約、救濟

以上世界歴史寧ろ西洋史に顯著な足跡を印して來た三つの主義は各々歴史的使命を別にして居る。併し三者は往々時空の上に於て一部重複して適用せらるるが故に理論上も實際上も複雑なる交渉を持つ。特に二十世紀初頭の支那の如く被搾取、半植民地に專制の清朝が君臨し、國民が無教育の散砂であり、序で封建的軍閥が割據するに至つた社會に於ては、民族主義は國內的には革命と統一との爲めに國際的には完全獨立の爲めに戦はねばならなかつた。其の際には民主主義も亦併行して高翔することが是非必要とされ、社會主義も亦民主主義の後衛となり、外國の資本主義的搾取に對し挑むこととなつたのである。此の點で注意すべきことは卑見に依れば民族協同體全部の問題を取り上げる民族主義が、衆庶の參政權を要求する民主主義、無産階級の經濟問題を取り上げる社會主義よりも優位に立つべきことである。此の理論の歴史的に正しいことは民族主義の内外に對する要請を堅く抱きしめた全體主義強權指導者國家の擡頭に依り明證されて居る。

想ふに凡そ社會は無限に複雑で、云はば立體的構造を持つて居る。而て以上の三主義は何れも其の一斷面に妥當する平面論理に過ぎない。世の中の學問が實際に役立たない所以、將又大學の顛落する所以は學問が實在せない抽象的平面の上にて、將又立體的構造を持つ社會現象の

假設的一断面の上にて平面論理を操つて居るからである。學者が専門と云ふ城壁を築いて其の内に立籠り其の穴から活きた無限の世界を覗いて居るからである。學問が知行一致の原則に當嵌まる爲には是非共平面幾何學から立體幾何學に高められなければならない。夫が社會構造の實際にも適ふ遣り方である。立體學問は藝術の「キュビズム」にも似て居ると云ひ得る。平面論理を操る平面學問から云へば戦争と平和とは反對觀念である。一切人は斯様に教へられて居る。然るに立體學問から云へば平和と戦争とは同一物である。戦争は他の手段を以てする今迄の政策の強行に過ぎない。平和から戦争が生れて行く、戦争は只今の日支事變が示す様により善き平和への志向でもあり楷梯でもある。平和即戦争、戦争即平和である。故に生存競争は平和的戦争と云ふ文字で現はし、異人種に對する殲滅戰は战争的戦争と云ふ文字で現はさねばならない。平和を欲せば戦争に對して用意せよと云ふのは實際論者の平面平和論理である。軍擴は戦争を收獲するから平和を欲せば平和に對して用意せよと説くのは平和論者の平面平和論理である。平面學問に於ては兩者は矛盾する二律背反である。立體學問に於ては兩者は交錯せず共に兩立しうる五〇%の眞理である。自由主義、個人主義、功利主義、唯物主義、共產主義、社會主義、民主主義、獨裁主義、民族主義等夫々一個の平面論理である。之を其の儘實行す

ると混沌中に突入する。「スターリン」獨裁政治の現實と共產主義とは無關係で、其處では前述の如く經濟的自由ばかりでなく天賦人權さへ失はれて居る。蔣介石の政治が事實上民族民權民生を合はせて難破させて居る故ある哉である。役に立つものは「ナチス」經濟の統制自由主義である。役に立つものは「ファッショ」の平等的階級的民權主義である。役に立つものは「ナチス」の獨逸國粹社會勞動主義である、役に立つものは我國の民本的眞正君主國體である。一黨に全體を動員し得て「ヒットラー」の獨裁は愈々有意義な創造を爲し得る。新中國が立直りて創造途上に歩む爲には具體的國際主義的民族主義の一途を歩む外はない。立體學問は政治、經濟、文化を別個のものと思はない、政治に依り人事が決定されるれば浪人が經濟を立て直し、知識人として現楷梯からより高き文化生活に進み得る。立體學問の眞髓は茲に在つて、修養の道場は斯かる學問から鼓舞されねばならぬ。凡そ人の患は一曲に蔽はれて大理に闇きに在りと云ふのは平面學問から立體學問に揚棄せよと教ゆるものである。

かゝるが故に民主主義特に自由主義に偏重すれば無政府に近くなり、社會主義に偏重すれば勞働至上主義、無産者の獨裁、産業の覆滅となり、民族協同體を危殆ならしむる。民族主義も亦之に偏重すれば彼の民族自決主義の如く到處に衝突を惹起するのであつて、「スコットランド」

は英帝國から獨立せぬ方が賢明であると云へる。又孤立しては屈指の理想的民族國家と雖も超帝國主義、同盟關係、集團關係の亂立する世界に於て自己を主張すること困難となるであらう。其處で前述の如く民族主義は眞正の國際主義、特に具體的國際主義に導かれなくてはならない。即ち民族主義、民主主義、社會主義は正しき序列に置かれ、全體主義、眞正の具體的國際主義に導かれ、加ふるに中庸の道、一切の聖智經驗に照して適確に把握され、其の上環境に關する正しい認識と相俟つて效果的に適用されねばならない。日本政府當局が三民主義は修正せられなくてはならないと云ふのは其の素材たる世界史上又は西洋史上の三主義が以上の如く正しく把握され、援用せられなくてはならないと云ふ意味に外ならない。而て吾人は一應此の方面の研討を終へたから今や中國革命史上の孫文主義即ち三民主義の正誤の問題を刃を迎へて解決することが出来る。因に北支臨時政府が三民主義は端的に否定されなくてはならないと云ふのは三民主義の名を冠して黨國の政綱に纏められた孫文主義に關して然か云ふのである。

七、三民主義寧ろ孫文主義と其の排撃

民族主義、民主主義、社會主義は何れも科學的に演繹されなければ支那の古典及び歴史に

は克明に現はれて居る。併し祖國を知ること淺き革命實行家孫文は民族、民權、民生の三民主義を編出すに當り、其の出典を佛蘭西革命の自由、平等、博愛の思想、將又米國の一切切人々と云ふ全民主義に求めた。勿論孫文の所言と雖も一から十まで誤解で充ちて居ると云ふ理由ではないが、彼の此の出發點は西洋思想心酔に過ぎて居る。爲に舊道德の恢復を叫びながらも東洋の否定、舊物破壊の傾向から曳ては歴史傳統加之民族主義其のもの否定の蛹を作つて居る。自國民を「一片の散沙」なりと貶して、民族精神の消磨を慨し、日本の民族主義精神の旺盛にして、爲に白人の日本人ばかりでなく亞細亞人をも敢て輕視し得ざるに至れるを力説したのは正しい。併し國共合作の爲め共產組織及び「ソヴィエツト」制度の中國に適用不可能なるを認めながら、民生主義を共產主義に言を歪めて一致せしめ、蘇聯代表に對し同國の軍隊は中國の利益及び必要上外蒙古より撤退するに及ばずと聲明したのは民族主義に對する裏切りである。目下露西亞を除ける二億五千萬人が十二億五千萬人を支配して居る、今後の世界に於ては公理と強權、被壓迫者と横暴者との階級戦争が展開され、白人と白人、黃種と黃種と相合して戦ふであらうと云ふて、聯露容共を第一位に置き、之を大亞細亞主義と命名し、之と合作して東洋王道の干城たれかしと日本に慫慂して居るは脱線も極まれりと云はねばならぬ。彼は既に